佐賀県文化財調査報告書第157集

佐賀県内遺跡確認調査報告書21

２００３年3月

佐賀県教育委員会

はじめに

この報告書は、佐賀県内で実施される農林業基盤整備事業、嘉瀬川ダム建設事業、筑後川堤防改良事業、その他国・県所管の公共事業の施工に先立ち実施した、埋蔵文化財の確認調査の結果をまとめたものです。

本県には埋蔵文化財が多数存在しており、県教育委員会では、これらの貴重な文化財の保護と開発との調整を円滑に進めるために、協議があった開発予定地について現地踏査を実施し、遺跡の存在が予測される等埋蔵文化財の有無・性格等を調査する必要があるものについては試掘・確認調査を実施し、遺跡の内容把握に努め、これをもとに文化財の保護を進めています。

今回、農林業基盤整備事業、嘉瀬川ダム建設事業、筑後川堤防改良事業、その他国・県所管の公共事業の施工地区について文化財確認調査を行った結果、縄文時代から近世・近代にわたる各時代の遺跡が確認されました。

本書が、文化財を県民の共有財産として大切に保存していくための資料となれば幸いです。

この調査にあたって、文化庁、九州農政局をはじめとする国・県各事業の関係機関、各市町村教育委員会・農林等担当課、並びに地元関係各位の深い御理解と御協力をいただき、心からお礼申し上げます。

平成15年３月31日

佐賀県教育委員会

教育長　松尾正廣

例　　言

1．本書は国庫補助金（県内遺跡発掘調査事業）を受け、平成13年度に実施した佐賀県農林業基盤整備事業、佐賀郡富士町内に計画されている嘉瀬川ダム建設事業、川副町三重津地区に計画されている筑後川堤防改良事業、その他国・県所管の公共事業に伴う文化財確認調査等に関する調査結果報告書である。

2．調査は市町村教育委員会の協力を得て、佐賀県教育委員会が行った。

3．トレンチ（試掘坑）位置図作成、遺構の実測、写真撮影は調査員が行った。また、地形測量図作成の一部及び空中写真撮影作業については委託により実施した。

4．遺物の整理・製図・報告書作成作業は、佐賀県文化課（神埼八子事務所）で行った。

・遺物・図面整理……田中ハルミ

・製図……三好文子

5．本書に用いた方位は、原則として座標北とし、磁北を用いた場合はその旨を記した。

6．挿図中の■は遺構・遺物が確認されたトレンチ、□は遺構・遺物が確認されなかったトレンチを示す。ただし、遺物の出土が表土層からのみであった場合は□で表す。

7．本書の内容は調査員から提出された調査結果報告をもとに編集者がとりまとめた。その際、報告等の原稿のうち、「土壙」や「‥‥跡」の表記等については統一を図る必要性等から一部表現を変えたところがある。これらの文責は編集者に帰す。

8．本書の執筆は各調査に係る部分については、各項目の最初に記す調査担当者が行い、それ以外のもの及び編集は徳富則久が行った。なお、Ⅱ－［3］－(1)及び(2)の項については、各担当者である五島昌也及び武谷和彦の執筆・編集に従った。

目　　次

Ⅰ．調査に至る経過 ……1
1．平成14年度農林業基盤整備事業等に係る文化財確認調査 …… 1
(1)　農林業基盤整備事業等に係る協議 ……1
(2)　文化財確認調査 …… 1
(3)　農林業基盤整備事業等と文化財保護に関する協議 ……1
2．平成14年度嘉瀬川ダム建設事業に係る文化財確認調査 …… 2
3．平成13・14年度その他公共事業に係る文化財確認調査……2
4．調査組織 ……2

Ⅱ．平成13年度文化財確認調査の概要 ……7
［1］農林業基盤整備事業等に係る文化財確認調査 …… 7
1．佐賀東部地区の調査 …… 7
(1)　中原町 …… 7
2．佐賀西部地区の調査 …… 9
(2)　佐賀市 ……10
(3)　多久市 ……12
(4)　小城町 ……17
3．佐賀南部地区の調査 ……19
(5)　太良町 ……19
4．佐賀北部地区の調査 ……22
(6)　伊万里市 ……23
(7)　七山村 ……24
(8)　厳木町 ……26
5．佐賀上場地区の調査 ……28
(9)　玄海町 ……28
［2］嘉瀬川ダム建設事業に係る文化財確認調査 ……29
［3］その他公共事業に係る文化財確認調査 ……33
(1)　佐賀市 ……33
(2)　川副町 ……43
(3)　東脊振村 ……60
(4)　北方町 ……67

Ⅲ．まとめ ……70

挿　図　目　次

第１図　平成13年度県内遺跡確認調査地区位置図 ……5～6
第２図　佐賀東部地区調査区位置図 ……7
第３図　中原町：九千部山横断線トレンチ配置図 ……8
第４図　佐賀西部地区調査地区位置図(1/50,000) ……9
第５図　佐賀市：兵庫東部地区トレンチ配置図 ……11
第６図　多久市西多久（板谷上）地区トレンチ配置図 ……13～14
第７図　多久市西多久（船山）地区トレンチ配置図 ……15
第８図　多久市西多久（平山）地区トレンチ配置図 ……16
第９図　小城町：筑後川下流用水事業トレンチ配置図 ……18
第10図　佐賀南部地区調査地区位置図(1/50,000) ……19
第11図　太良町：杉谷地区トレンチ配置図 ……20
第12図　太良町：大川内地区トレンチ配置図 ……21
第13図　佐賀北部地区調査地区位置図(1/50,000) ……22
第14図　伊万里市：立目地区トレンチ配置図 ……23
第15図　伊万里市：野々頭地区トレンチ配置図 ……24
第16図　七山村：馬川地区トレンチ配置図 ……25
第17図　厳木町：二タ又地区トレンチ配置図 ……27
第18図　佐賀上場地区調査地区位置図(1/50,000) ……28
第19図　玄海町：畑地帯総合整備事業棚橋地区 ……28
第20図　嘉瀬川ダム建設事業調査地区位置図(1:50,000) ……29
第21図　富士町：嘉瀬川ダムダムサイト予定地トレンチ配置図 ……32
第22図　佐賀城跡位置図 ……34
第23図　佐賀城内概要図 ……34
第24図　佐賀城跡二の丸トレンチ配置図 ……35
第25図　佐賀城跡二の丸遺構全体図 ……35
第26図　二ノ丸大手門～多聞櫓（北）周辺遺構図 ……37
第27図　二ノ丸大手門想定図 ……37
第28図　多聞櫓周辺遺構図（中～南） ……39
第29図　多聞櫓周辺遺構図（東） ……41
第30図　多聞櫓周辺全体遺構図 ……41
第31図　木組み遺構群図 ……41
第32図　川副町・諸富町佐賀藩海軍所跡(佐賀商船学校跡)位置図 ……44
第33図　川副町佐賀藩海軍所跡(佐賀商船学校跡)確認調査対象範囲 ……45
第34図　佐賀藩海軍所(佐賀商船学校)推定模式図 ……45

第35図　川副町佐賀藩海軍所跡(佐賀商船学校跡)確認調査試掘坑位置図 ……47
第36図　製罐所・船渠地区(推定)周辺遺構配置図 ……49
第37図　SX0007・0008・0009製鉄関連遺構・SX0009出土遺物・T3・16・27・28・46試掘坑土層断面実測図 …50
第38図　佐賀藩海軍所跡(佐賀商船学校跡)確認調査出土遺物実測図 ……51
第39図　国道34号線拡幅・田手川改修工事調査地区位置図 ……60
第40図　国道34号線拡幅トレンチ配置図 ……62
第41図　国道34号線拡幅遺構配置図 ……63
第42図　田手川改修工事トレンチ配置図 ……64
第43図　田手川改修工事遺構配置図 ……65
第44図　武雄福富線道路防災工事調査地区位置図(1/50,000) ……67
第45図　北方武雄福富線関係トレンチ配置図 ……68
第46図　貝良木遺跡出土石剣実測図 ……69

図　版　目　次

図版１　県内遺跡確認調査 …… 4
図版２　嘉瀬川ダム建設事業地区確認調査遺構 ……31
図版３　佐賀城二の丸 ……42
図版４　佐賀藩海軍所跡(佐賀商船学校跡)① ……54
図版５　佐賀藩海軍所跡(佐賀商船学校跡)② ……55
図版６　佐賀藩海軍所跡(佐賀商船学校跡)③ ……56
図版７　佐賀藩海軍所跡(佐賀商船学校跡)④ ……57
図版８　佐賀藩海軍所跡(佐賀商船学校跡)⑤ ……58
図版９　佐賀藩海軍所跡(佐賀商船学校跡)⑥ ……59
図版10　国道３４号線拡幅・田手川改修工事 ……66
図版11　武雄福富線道路防災事業 ……69

表　目　次

表１　川副町佐賀藩海軍所跡(佐賀商船学校跡)確認調査試掘坑一覧 ……52
表２　佐賀県内遺跡確認調査地区（平成13年度実地) ……71

報 告 書 抄 録

ふりがな	さがけんないいせきかくにんちょうさほうこくしょ２１
書名	佐賀県内遺跡確認調査報告書２１
シリーズ名	佐賀県文化財調査報告書
シリーズ番号	第157集
編集者名	徳富 則久
編集機関	佐賀県教育庁文化課
所在地	〒840-8570　佐賀県佐賀市城内一丁目1-59　Tel.0952(24)2111
発行年月日	2003年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査対象面積 （確認調査） ha	調査原因
佐賀県農業基盤整備事業地区内遺跡 嘉瀬川ダム建設予定地内遺跡 その他公共事業予定地内遺跡	佐賀県内					20010401 ～ 20020331	約144.9ha	佐賀県農業基盤整備事業 嘉瀬川ダム建設事業 その他公共事業

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
佐賀県農業基盤整備事業地区内遺跡 嘉瀬川ダム建設予定地内遺跡 その他公共事業予定地内遺跡	集落 墓地 古墳 城郭 生産	縄文時代 ～ 近世			

Ⅰ．調査に至る経過

1．平成14年度農林業基盤整備事業等に係る文化財確認調査

(1) 農林業基盤整備事業等に係る協議

農林業基盤整備事業については、昭和53年4月（昭和59年4月1日一部改正）に県農林部と県教育委員会が締結した「農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財の保護に関する確認事項」に基づき、翌年度工事予定地区に関し文化財確認調査の有無等について協議を実施している。平成14年度農林業基盤整備事業については、平成13年7月9日付け教委文第932号で農林事業担当課あて事業照会を行い、これに対する事業協議を受けて、関係市町村教育委員会と協力して検討を行った。施工主体は、県農林部・農村農地整備局所管の県営、市町村所管の団体営事業等に区分される。また、九州農政局筑後川下流農業水利事務所所管の筑後川下流用水事業に伴う協議（大和町・神埼町・小城町・三日月町）、同局筑後川下流白石平野農業水利事業所所管の筑後川下流白石平野農業水利事業に伴う協議（牛津町）、佐賀中部農地防災事菜所所管の農業用水関係事業に伴う協議（佐賀市・大和町・三日月町・牛津町・芦刈町）もなされた。

これらの検討・調整の結果、施工予定地区のうち、予備調査（分布・試掘・確認調査）が必要となった地区は、佐賀東部地区（鳥栖市・中原町・北茂安町・上峰町・神埼町・東脊振村・脊振村）12.9ha、佐賀西部地区（佐賀市・多久市・東与賀町・久保田町・大和町・富士町・小城町・三日月町・牛津町）68.6ha、佐賀南部地区（武雄市・鹿島市・山内町・北方町・大町町・白石町・有明町・太良町・塩田町・嬉野町）32.8ha、佐賀北部地区（伊万里市・有田町・西有田町・浜玉町・七山村・厳木町・相知町）18.7ha、佐賀上場地区（唐津市・肥前町・玄海町・鎮西町）6.4haの合計139.4haである。

(2) 文化財確認調査

協議を行った施工計画について現地踏査などの結果をもとに検討を行い、文化財確認調査が必要と認められた地区を決定した。これを受け、当該市町村教育委員会・農林担当課、県農林部・農村農地整備局、九州農政局との第１回目の「平成14年度農林業基盤整備事業に係る文化財の保護に関する第１回協議会」を県教育委員会が主催して10月22日に開催し、文化財確認調査の時期など円滑な実施について協議した。文化財確認調査は原則として稲刈り終了から麦の作付けまでの期間（9月～12月）を中心に行ったが、地区によっては上物の状況等により、年度末までずれ込む箇所もあった。確認調査は原則として、2m×2mのトレンチ（試掘坑）を20m間隔で碁盤目状に、また農道・林道等調査対象地区が狭い場合はほぼ等間隔に設定し、埋蔵文化財の有無、性格、範囲などを調査した。

(3) 農林業基盤整備事業等と文化財保護に関する協議

確認調査等を実施した結果、佐賀東部地区で2,600㎡、佐賀西部地区で23,400㎡、佐賀南部地区では0㎡、佐賀北部地区で0㎡、佐賀上場地区で100㎡の合計26,100㎡の遺跡の広がりが確認できた。内容としては旧石器・縄文時代の遺物包含層、弥生時代～中世の集落、中世の山城跡、古道等を確認した。この結果を受けて、平成13年12月17日に「平成14年度農林業基盤整備事業に係る文化財の保護に関する第２回協議会」を開催し、確認調査の結果をもとに、文化財の保存について工事計画との調整を計った。このうちほ場整備等においては盛土による保存、農道・林道・用排水路等については路線の変更により遺跡の保存に努めたが、設計変更によっても保存が不可能なものについては、協議の上、工事実施前に記録保存の措置を取ることとした。

２．平成14年度嘉瀬川ダム建設事業に係る文化財確認調査

嘉瀬川ダムは嘉瀬川水系嘉瀬川に計画されている多目的ダムで、その開発対象地全体が佐賀郡富士町内に含まれ、事業主体は国土交通省九州地方整備局嘉瀬川ダム工事事務所である。ダムサイトは佐賀郡富士町大字小副川（左岸）・畑瀬（右岸）の標高約205ｍの川床部分に設置されるもので、この地点より上流部の標高約304ｍ等高線で囲まれる約2.7km2が最大湛水地区（水没地区）となる。この水没地区内には西畑瀬・東畑瀬・鷹ノ羽・小ケ倉・栗並・馬場・大串・大野・中原等の集落の全部又は一部が含まれる他、ダム関連開発（代替地開発・道路整備・土捨て場）などにより、多くの埋蔵文化財・民俗資料等が破壊・水没することが予想された。このうち、民俗・民俗芸能・建築物・石造物・文書資料等については「嘉瀬川ダム建設に伴う学術調査委員会（米倉利昭委員長［長崎純心大学人文学部教授］）」によって平成8～10年度にかけて学術調査が実施され、平成11年度に「嘉瀬川ダム建設に伴う学術調査報告書」※としてその成果がまとめられている。

一方で埋蔵文化財については、富士町での過去の調査データがほとんどないため、事業実施に伴って埋蔵文化財にどの程度影響を及ぼすのかという点について早急に把握する必要が生じた。確認調査の実施にあたっては、平成10年度までは富士町教育委員会が調査主体となっていたが、事業量の増加や事業の性格等に鑑み、平成11年度からは佐賀県教育委員会が調査主体となり確認調査を実施している。平成13年度は嘉瀬川ダムの開発対象面積404haのうち、小副川地区のダムサイト予定地において、2.4haを対象に、平成12年度に実施した測量調査の結果に基づき、近世期の水田遺構に関連すると思われる大規模な石積遺構周辺について、その性格を判断するため確認調査を実施した。

註　※嘉瀬川ダム建設に伴う学術調査委員会編 2000『嘉瀬川ダム建設に伴う学術調査報告書』富士町教育委員会

３．平成13・14年度その他公共事業に係る文化財確認調査

農林業基盤整備事業、嘉瀬川ダム建設事業以外の国・県主体の公共事業について、平成13年度に確認調査を実施した事業及び遺跡は、国土交通省筑後川工事事務所所管の三重津地区堤防改良事業に伴う三重津海軍所跡（川副町、0.9ha）、佐賀県土木部所管の佐賀城公園造成事業に伴う佐賀城跡（佐賀市、0.3ha）、国道385号線拡幅工事に伴う三津前田遺跡（東脊振村、0.05ha）、辛上地区水路付替工事に伴う大曲二の坪遺跡（東脊振村、0.22ha）、県道武雄・福富線改良工事及び同防災工事に伴う貝良木遺跡・山西古墳群（北方町、1.6ha）である。

４．調査組織

平成13年度

調査主体　　佐賀県教育委員会

総　　括

局　　長　佛坂　勝男　県文化課課長

次　　長　堤　　博文　県文化課参事

天本　洋一　県文化課副課長

東中川忠美　県文化課副課長

庶　　務　天本　茂春　県文化課専門員（庶務係長）

相川ミエ子　県文化課庶務係主査

島田　一幸　文化課庶務係主査

陶山　　優　県文化課庶務係主事

調　　査

調査総括　西田　和己　県文化課管理・指導班企画調整主査

徳富　則久　県文化課管理・指導班企画調整主査

松尾　吉高　県文化課調査班企画調整主査

調 査 員　五島　昌也　県文化課管理・指導班主査

古川　直樹　県文化財課管理・指導班指導主事

武谷　和彦　県文化課管理・指導班文化財保護主事

市川　浩文　県文化財課管理・指導班文化財保護主事（事業調整担当）

調査協力

佐賀市教育委員会	唐津市教育委員会	鳥栖市教育委員会
多久市教育委員会	伊万里市教育委員会	武雄市教育委員会
鹿島市教育委員会	東与賀町教育委員会	久保田町教育委員会
大和町教育委員会	神埼町教育委員会	東脊振村教育委員会
脊振村教育委員会	中原町教育委員会	北茂安町教育委員会
上峰町教育委員会	小城町教育委員会	三日月町教育委員会
牛津町教育委員会	浜玉町教育委員会	七山村教育委員会
厳木町教育委員会	相知町教育委員会	肥前町教育委員会
玄海町教育委員会	鎮西町教育委員会	有田町教育委員会
西有田町教育委員会	山内町教育委員会	北方町教育委員会
大町町教育委員会	白石町教育委員会	有明町教育委員会
太良町教育委員会	塩田町教育委員会	嬉野町教育委員会

（農業基盤整備事業）

九州農政局筑後川下流農業水利事務所

九州農政局佐賀中部農地防災事業所

九州農政局筑後川下流白石平野農業水利事業所

佐賀県農政部農政課・農村整備課・林政課・森林整備課・農村計画課・園芸課・畜産課

佐賀中部農林事務所

烏栖農林事務所

武雄農林事務所

鹿島農林事務所

伊万里農林事務所

唐津農林事務所

各市町村農林担当課

（嘉瀬川ダム建設事業）

国土交通省九州地方建設局嘉瀬川ダム工事事務所

（その他公共事業）

国土交通省筑後川工事事務所

国土交通省佐賀国道工事事務所

佐賀県土木部技術管理課・道路課・河川砂防課

佐賀土木事務所

神埼土木事務所

鳥栖土木事務所

唐津土木事務所

伊万里土木事務所

武雄土木事務所

鹿島土木事務所

西部地区ダム建設事務所

地元各位

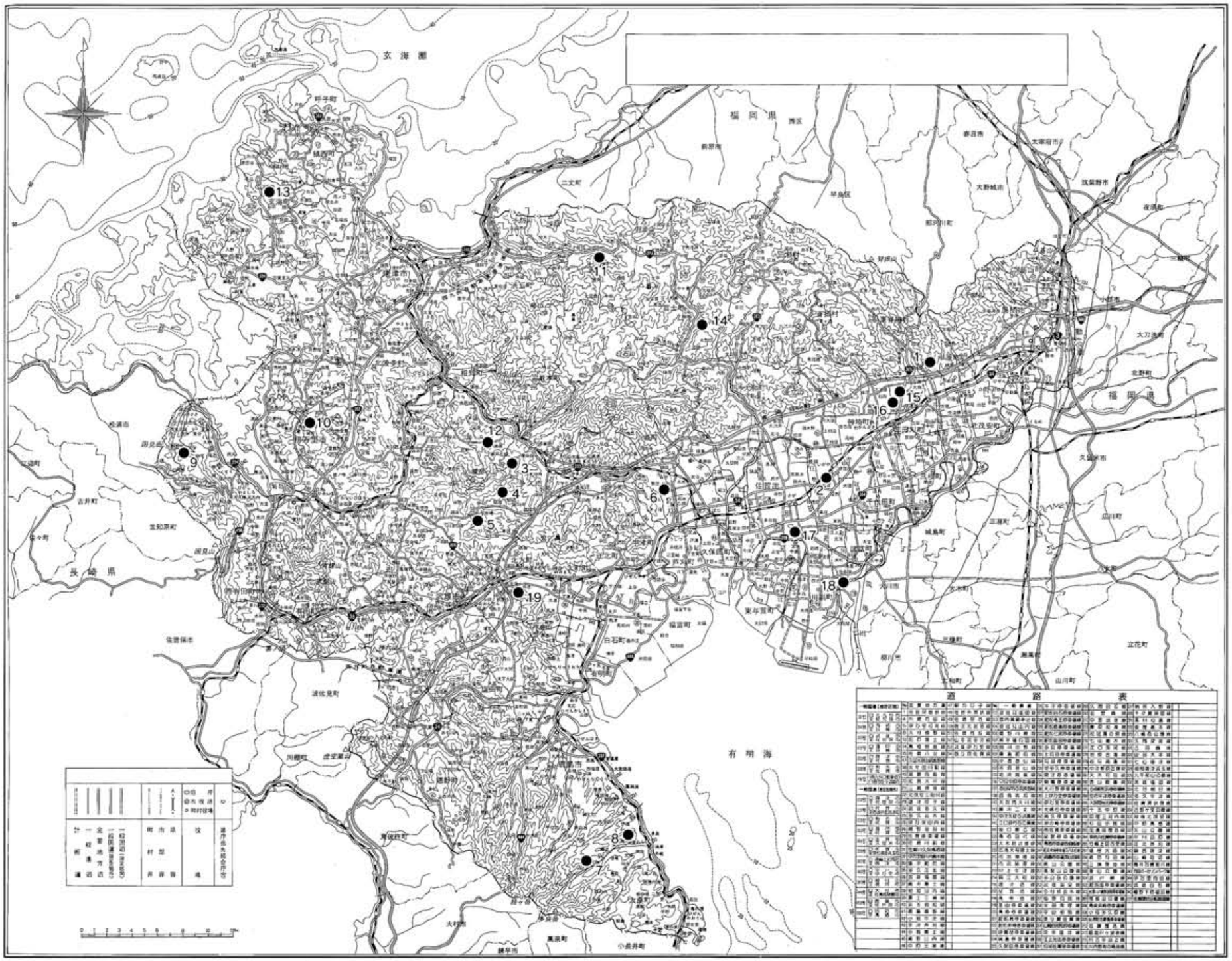
調査指導

知野　泰明　日本大学

佐賀市兵庫地区確認調査

太良町大川内地区確認調査

図版１　県内遺跡確認調査



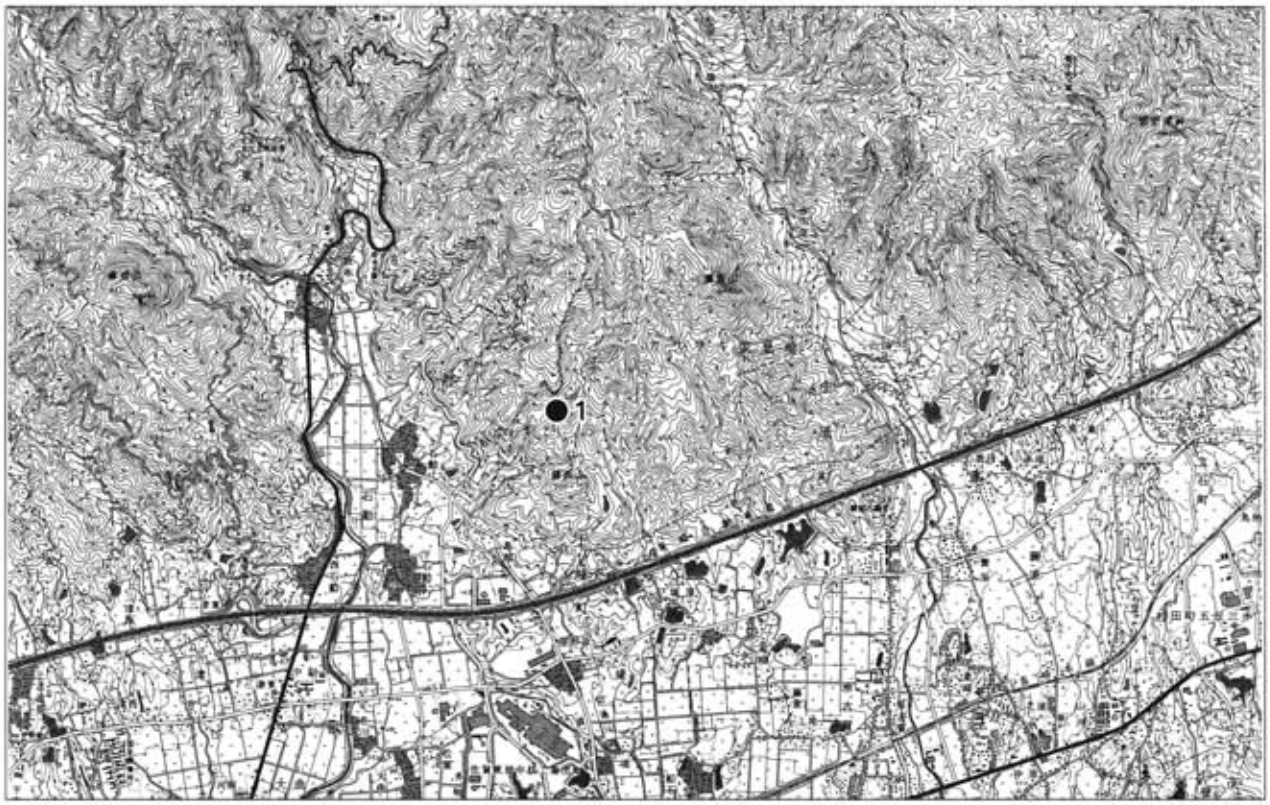
確認調査地区	**農林業基盤整備事業**
	佐賀東部地区
	1．中原町（九千部山横断線）
	佐賀西部地区
	2．佐賀市（兵庫東部地区）
	3．多久市（西多久（船山）地区）
	4．多久市（西多久（板谷上）地区）
	5．多久市（西多久（平山）地区）
	6．小城町（佐賀西部導水路）
	佐賀南部地区
	7．太良町（太良（杉谷）地区）
	8．太良町（太良（大川内）地区）
	佐賀北部地区
	9．伊万里市（立目地区）
	10．伊万里市（野々頭地区）
	11．七山村（馬川地区）
	12．厳木町（厳木（二タ又）地区）
	佐賀上場地区
	13．玄海町（棚橋（上場Ⅳ期）地区）
	嘉瀬川ダム建設事業
	14．富士町（嘉瀬川ダム・ダムサイト建設）
	その他公共事業
	15．東脊振村（辛上地区）
	16．東脊振村（国道385号）
	17．佐賀市（佐賀城公園）
	18．川副町（三重津地区）
	19．北方町（県道武雄・福富線）

第１図　平成13年度県内遺跡確認調査地区位置図

Ⅱ．平成13年度文化財確認調査の概要

［1］ 農林業基盤整備事業等に係る文化財確認調査

1．佐賀東部地区の調査



第２図　佐賀東部地区調査地区位置図(1/50,000)　　1　九千部山横断線（中原町）

(1) 中原町

調査対象地区名　九千部山横断線４－１工区

調査対象地所在地　三養基郡中原町大字原古賀字丸山

調査対象面積　8,000㎡

調査担当者　中原町教育委員会　太田睦

調査期間　平成14年３月１日～３月25日

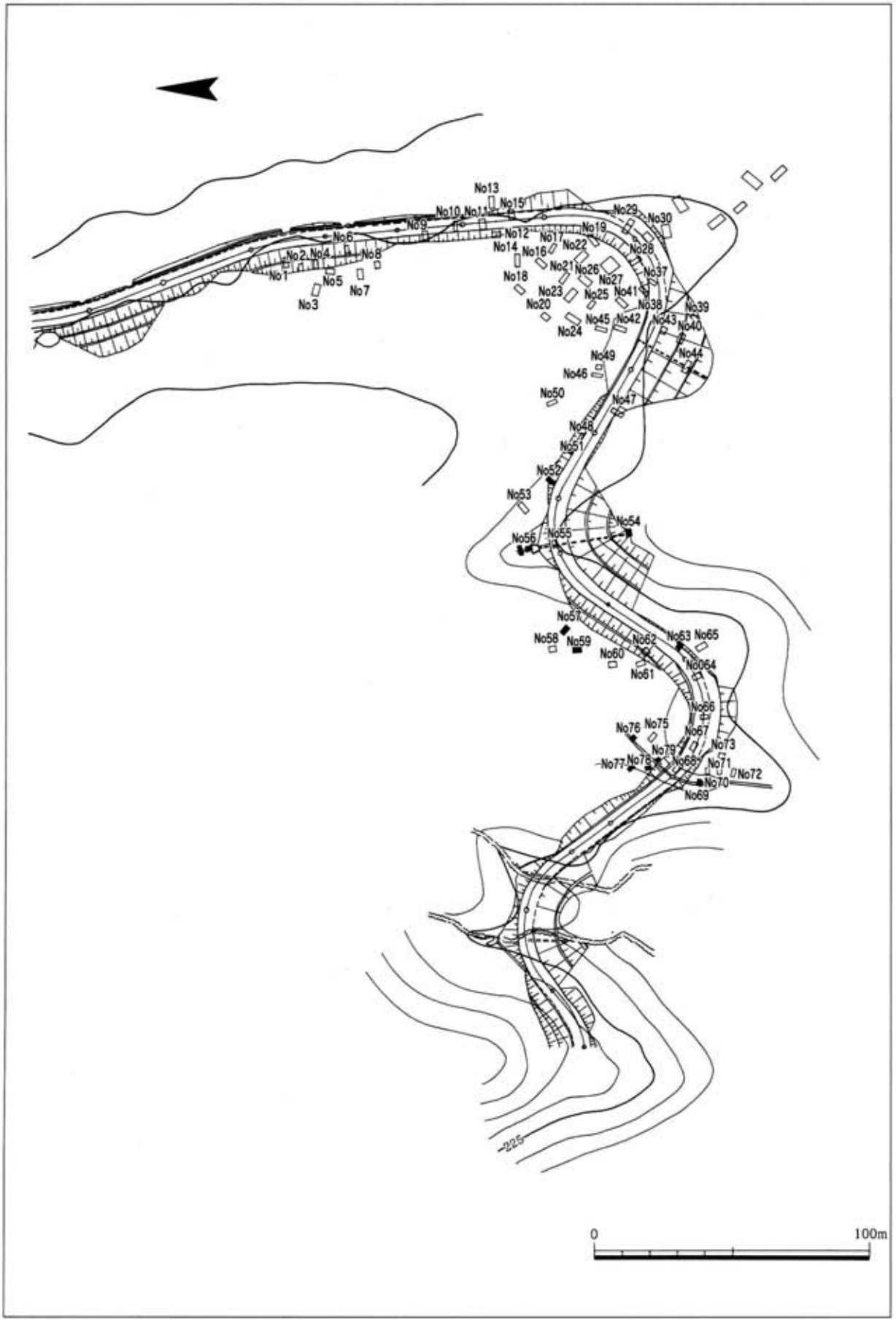
調査対象地区の立地　本調査地区は鷹取山の中腹に位置し、標高約250ｍである。調査区の西側は上峰町に接する。調査地点は谷と尾根で、尾根上には一部平坦面が見られる。

周辺の遺跡及び遺跡の内容　鷹取山山頂には中世山城が存在する。

調査方法　人力により79本のトレンチを入れた。

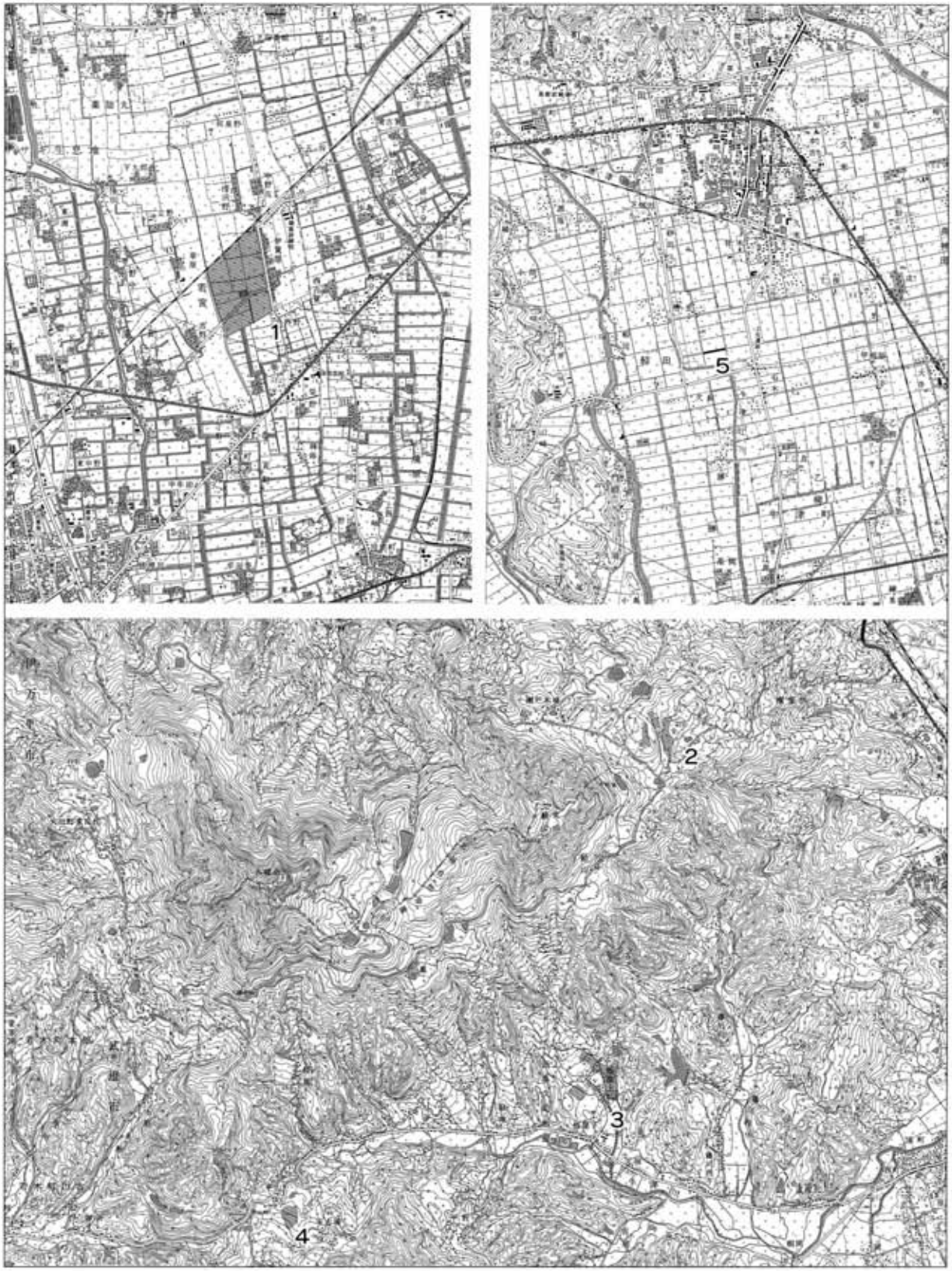
調査内容　51・52・57・59・63・69・74・76～79トレンチから通路状の遺構が検出できた。またピットらしき穴もいくつか確認できたが、遺物が出土せず、埋土もしまりがないものばかりで、遺構とは断定できない。出土遺物としては54・56トレンチから、土師器片が出土した。時期は不明である。

所見・その他　上峰町との町境の尾根上には、山頂部へ向かう通路状の遺構が存在している。またこの尾根から東側の尾根への連絡通路と見られる遺構も確認された。東側の尾根上には平坦面があるが、遺構は確認されなかった。ただし、尾根の先端部には人工的に切り落としたような痕跡が見られる。谷部から土師器片が出土したことから、このあたりで何らかの活動を行っていたことがわかるが、何に由来するものであるかは今回確認できなかった。



第３図　中原町：九千部山横断線トレンチ配置図

2．佐賀西部地区の調査



1　兵庫東部地区（佐賀市）　　2　西多久（船山）地区（多久市）
3　西多久（板谷上）地区（多久市）　　4　西多久（平山）地区　（多久市）
5　筑後川下流地区（小城町）

第４図　佐賀西部地区調査地区位置図(1/50,000)

(2) 佐賀市

調査対象地区名　県営ほ場整備事業兵庫東部地区

県営かんがい排水事業佐賀市東部地区

調査対象地所在地　佐賀市兵庫町大字若宮地内

調査対象面積　21ha

調査担当者　佐賀県教育庁文化課　市川浩文・西田和己・古川直樹・松尾吉高

調査期間　平成13年11月14日～平成13年11月16日・22日

調査対象地区の立地　対象地は佐賀市の東部域、神埼町との町市境に近い、標高3.0～3.5mの沖積平地である。現況は全面が水田で、高畑等は見られない。近接する現況集落としては、調査対象区の東側に隣接する県道脊振・佐賀線に沿って伊賀屋の集落が見られる。JR長崎本線のすぐ北側には天満神社があり、社殿棟木には延宝８年(1680)「鍋島大和守藤原直氏再興」の、また宝暦７年(1757)「鍋島山城守直幸　再興」の銘が見られる。対象地周辺は、近世初頭まで萱の生い茂る湿地であったが、成富兵庫茂安の指示により開拓が進められ、焼原川による灌漑・排水が整えられたとされている。現在は焼原川と、それと東側に並行して南流する２本の水路に区画された水田が整然と広がっているが、明治21年前後に調製された地籍図上でも水路・水田の地割の方向等はほとんど変わっておらず、近世の開拓時の地割についてもかなり遺存しているものと思われる。

周辺の遺跡及び遺跡の内容　対象地の南北、東側には近接する周知の埋蔵文化財包蔵地は見られないが、西側には野中遺跡・若宮遺跡が隣接する。いずれもほ場整備に伴い新たに確認された遺跡であるが、その中心は西寄りにあり、今のところ対象地に近接した地区で遺跡の存在は権認されていない。

調査方法　対象地のうち、ほ場整備については掘削を被る水路部分、かんがい排水の水路部分について試掘坑総数89本を設走し、重機により掘削を行なった。掘削後は人力により精査を行い、記録作成後、埋め戻しを行った。調査にあたっては、調査期間が麦蒔きまでの期間に限定されていたことから、重機３台を用いて３班体制で実施した。

調査内容　遺構としては、Ａ－15・16トレンチにおいて落ち込みが確認され、旧水路を埋めたものと考えられる。またＡ－21、Ｃ－14・15トレンチでは溝状の遺構が確認されたが、埋土は軟質で深さも浅く、時期的に新しいものと推定される。

出土した遺物としてはＣ－23・24トレンチの表土中より近世幕末期～近代の陶器片がそれぞれ１点ずつ出土した他、土師器の細片が確認できたのみである。

所見・その他　対象地内に設定したいずれのトレンチでも現況耕作土下で明灰褐色粘質土あるいは暗淡黄灰色粘質土からなる粘土層（沖積層、粘土化した植物遺体が含まれる）が権認された。堆積状況としては、耕作土直下で沖積層が確認される地点と、旧田面上に盛土を行って田面を高めている地点の両者があるが、後者は概ね、県道バイパス予定路線より東側の集落に近い地区で多く見られる。設定したトレンチの範囲内では明確な遺構は検出されず、集落遺跡等の立地に適したシルト質性の土壌についても全く確認されなかった。また、旧クリークを埋め立てたような痕跡も一部で見られたのみで、現況の地割そのものが、近世期の開拓時からほとんど変化していないものと推定される。

第５図　佐賀市：兵庫東部地区トレンチ配置図

(3)多久市

調査対象地区名　　中山間地域総合整備事業（ほ場整備）西多久（船山）地区

調査対象地所在地　　多久市西多久町大字船山地内

調査対象面積　　1.9ha

調査担当者　　多久市教育委員会　高塚啓介

調査期間　　平成13年12月10日～平成13年12月11日

調査対象地区の立地　対象地は多久盆地西方の船山東斜面にあたり、山頂から北東約１km地点、標高約350mに位置する。一帯は山中で唯一、北東へと緩やかに下る傾斜地である。

周辺の遺跡及び遺跡の内容　当該地区に隣接して旧石器・縄文時代の遺物散布地である綿打遺跡が所在している。

調査方法　掘削機及び人力により試掘溝を設定、発掘し開発予定地内の文化財の有無を確認した。

調査内容　掘削機及び人力による全７ヶ所のトレンチを発掘した。その結果、遺構・遺物ともに確認できなかった。

所見・その他　開発予定地は周知の遺跡綿打遺跡の隣接地にあたるが、今回の調査では遺跡を確認できなかった。現況は水田地帯であるが、旧地形はやや急斜面だったと考えられ、切り盛り造成が行われたものだろう。遺跡の立地には不向きだったと思われる。

調査対象地区名　　中山間地域総合整備事業（ほ場整備）西多久（板谷上）地区

調査対象地所在地　　多久市西多久町大字板谷地内

調査対象面積　　7.1ha

調査担当者　　多久市教育委員会　高塚啓介

調査期間　　平成13年11月19日～平成13年12月20日

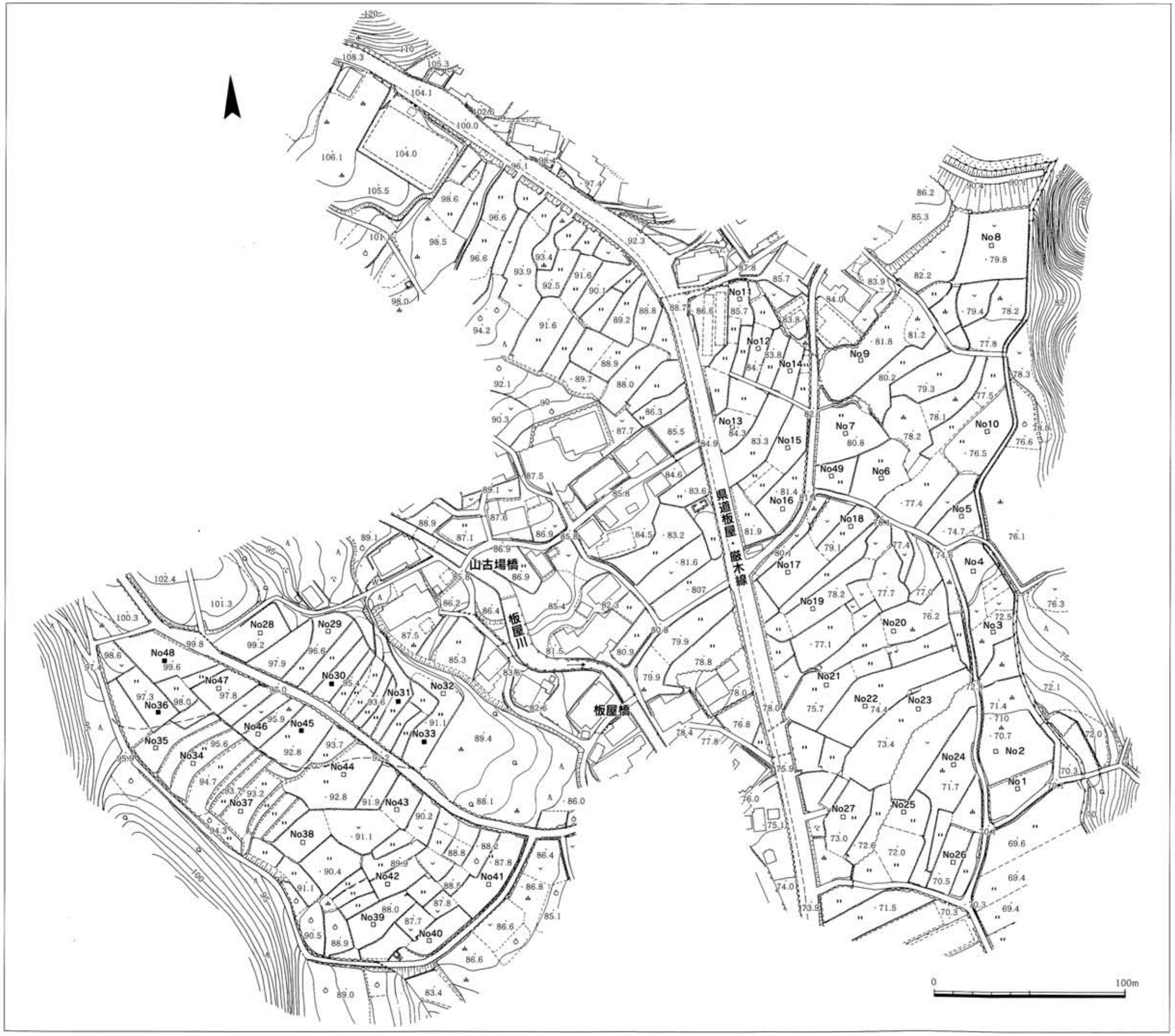
調査対象地区の立地　対象地は西多久町を通る県道多久～若木線を西部小学校から北に入って500m程の地点で、多久盆地西方の船山（女山）東麓の丘陵地及び谷部を含む水田地帯である。西多久町は八幡岳と船山、徳連岳に挟まれた山間で平坦地はほとんどない。谷間には八幡岳を源流とする牛津川が東に流下する。

周辺の遺跡及び遺跡の内容　多久市北西域は市内の中で遺跡発見の例が少ない地域である。山間で平坦地に乏しい環境により遺跡立地に難しいことがその要因の一つと考えられるが、船山周辺の緩傾斜地に石器などが散布する地点が点在する事は以前より知られる。市境に接する綿打遺跡は旧石器・縄文の散布地で広大な面積を持つ。今回の調査区に隣接する板屋遺跡も縄文の散布地である。

調査方法　掘削機及び人力により試掘溝を設定、発掘し開発予定地内の文化財の有無を確認した。

調査内容　掘削機及び人力による全49ヶ所のトレンチを発掘した。このうち９ヶ所のトレンチから、小穴、土坑などを確認した。遺物としては、表採及び堆積土内から石器、剥片が出土。遺構内より中世～近世の土師器片、陶磁器片などが出土した。

所見・その他　開発予定地で西部小学校北方谷部にあたる調査区では遺跡は確認できなかった。西側の高台上の水田では中世～近世の生活跡を確認した。



第6図　多久市西多久（板谷上）地区トレンチ配置図は折り込み図版

第7図　多久市西多久（船山）地区トレンチ配置図

第８図　多久市西多久（平山）地区トレンチ配置図

調査対象地区名　　中山間地域総合整備事業（ほ場整備）西多久（平山）地区

調査対象地所在地　多久市西多久町大字平山地内

調査対象面積　　2.5ha

調査担当者　　多久市教育委員会　高塚啓介

調査期間　　平成13年12月11日～平成13年12月12日

調査対象地区の立地　西多久町は、北は船山、南からは徳連岳に挟まれる谷を形作る。対象地は多久市の最西域にあたる西多久町平山地区、女山峠入り口付近に位置する。標高約200ｍの水田地帯で多久盆地南西の徳連岳にかかる北向きの傾斜地である。

周辺の遺跡及び遺跡の内容　開発予定地の谷を挟んで東に位置する傾斜地には、縄文の散布地である周知の遺跡、平古場遺跡が所在している。

調査方法　掘削機及び人力により試掘溝を設定、発掘し開発予定地内の文化財の有無を確認した。

調査内容　人力により全10ヶ所のトレンチを発掘した。その結果、遺構は検出できなかった。遺物としては、第２トレンチ堆積土中よりサヌカイト剥片１点が出土した。

所見・その他　現況の水田は急な傾斜地を切り盛りで造成したものだろう。遺跡の立地には不向きだったと思われる。出土したサヌカイト剥片は上位からの流入と考えられ、付近に遺跡の所在が予想される。今後の調査に期待したい。

(4)　小城町

調査対象地区名　　筑後川下流用水事業

調査対象地所在地　小城郡小城町大字船田

調査対象面積　　780m

調査担当者　　小城町教育委員会　古庄秀樹

調査期間　　平成13年12月13日

調査対象地区の立地　小城町の南部に広がる平野部に位置する。

周辺の遺跡及び遺跡の内容　隣接する三日月町側には、国指定史跡土生遺跡がある。

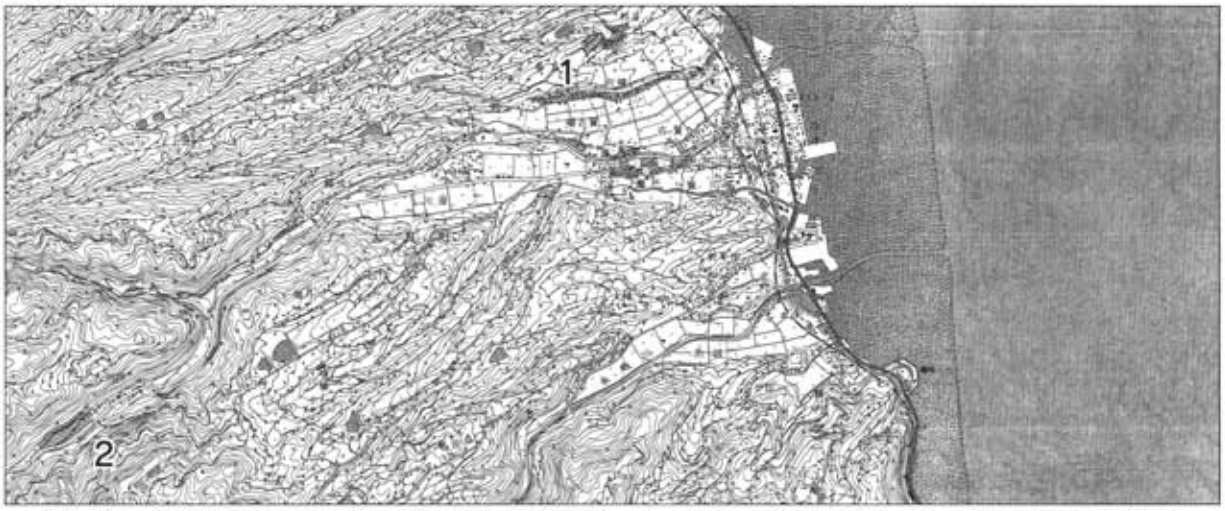
調査方法　掘削機により対象地に５ヶ所の試掘坑を設定し、作業員による遺構検出作業を行った。検出作業の後、略測図、土層図の記録を取り、写真撮影を行って埋め戻した。

調査内容　遺構としては、弥生時代から中世に至るピット、土坑、溝等多数。また厚さ40cm程度の遺物包含層も一部で確認した。出土した遺物としては、弥生土器、青磁、石器等がある。

所見・その他　対象地全域で、弥生時代～中世に至る遺跡を確認した。遺構の密集度も高く、出土遺物も豊富である。

第９図　小城町：筑後川下流用水事業トレンチ配置図

３．佐賀南部地区の調査



第10図　佐賀南部地区調査地区位置図(1/50,000)　1　太良（杉谷）地区　2　太良（大川内）地区

(5)太良町

調査対象地区名　県営中山間地域総合整備事業杉谷地区

調査対象地所在地　藤津郡太良町大字多良字杉谷

調査対象面積　1.9ha

調査担当者　佐賀県教育庁文化課　市川浩文・古川直樹

調査期間　平成13年12月18日～平成13年12月19日

調査対象地区の立地　調査対象地は太良町の北部、経ケ岳・多良岳から放射状に延びる山稜の先端部付近の標高約35～70ｍの範囲に位置し、旧海岸線からの距離は約0.5㎞である。現況はほぼ全面が蜜柑園となっており、近接する集落としては、東側に隣接して杉谷の集落がある。

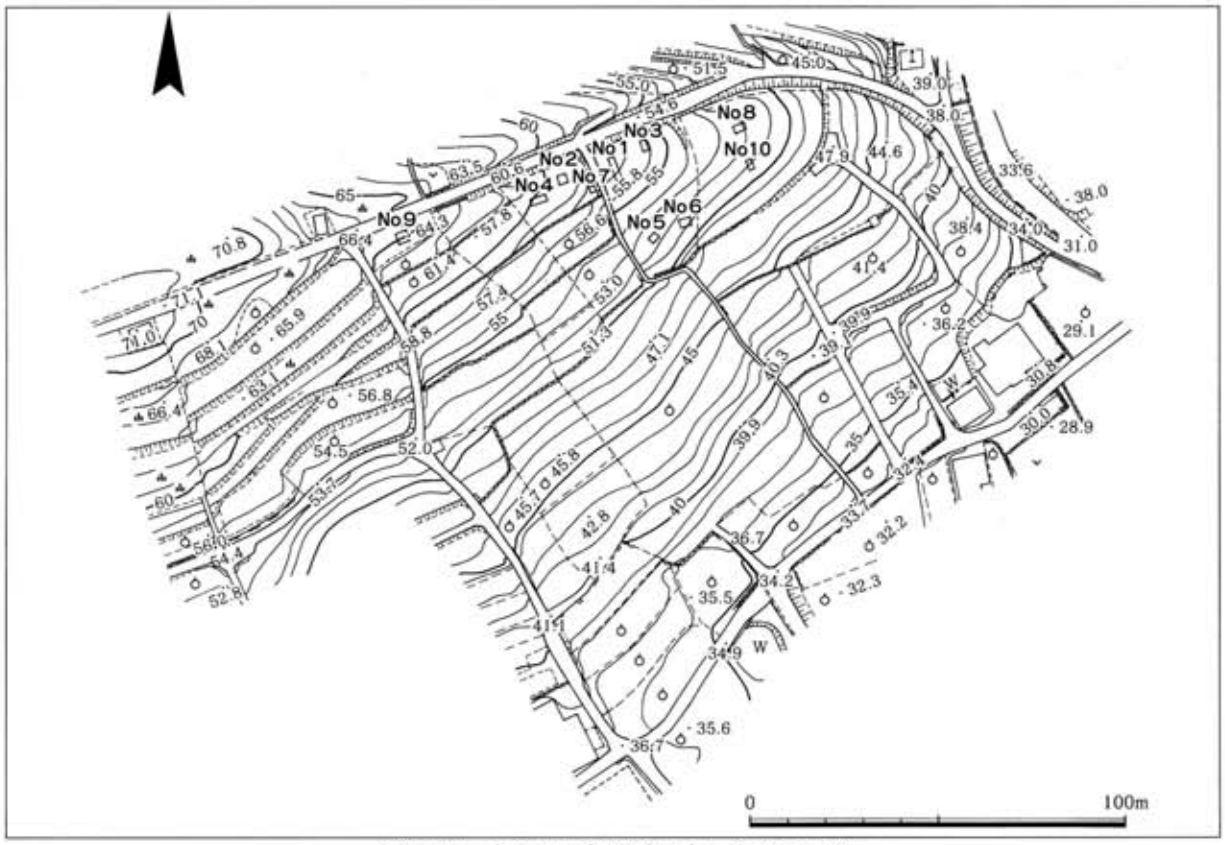
周辺の遺跡及び遺跡の内容　対象地は周知外であるが、東側に隣接して杉谷遺跡、南側に喜三郎遺跡などの縄文時代の散布地が見られ、いずれも対象地と同様の丘陵地帯で、現在蜜柑園となっている。

調査方法　工事内容は蜜柑園全体に対して区画整理を行うもので、比較的旧地形を留めていると想定される尾根上を中心に試掘坑（トレンチ）を10箇所設定した。また、南側の斜面についてはかなり改変を被っていることが予想されたため、尾根上の試掘結果を踏まえて調査を実施するかどうか判断することとした。

調査は蜜柑の木の間を選んでトレンチを設定する必要があったため、全て人力により掘り下げを行った。掘り下げ後は略測・写真撮影等の記録をとった後に埋め戻しを行った。

調査内容　いずれのトレンチでも遺構及び遺物包含層は確認されなかった。埋土からの出土遺物はないが、表採資料として黒曜石の剥片数点、古墳時代後期の須恵器甕の胴部片１点、近世末期以降の染付片数点が採集された。

所見・その他　調査前から黒曜石剥片が散布していたため、縄文時代の遺物包含層が遺存している可能性が考えられたが、いずれのトレンチでも耕作土・造成土下より赤褐色礫質土（安山岩の土壌化したもの）の地山が確認され、遺物包含層等の自然堆積層は既に流出、あるいは蜜柑園造成時に削平を受けていることが明らかとなった。また、古墳時代の須恵器甕片が出土した他、立地等からも、かつて古墳が存在していた可能性が考えられるが、石室石材に該当するような石も見られず、同様に湮滅しているものと推定される。



第11図　太良町：杉谷地区トレンチ配置図

調査対象地区名　県営中山間地域総合整備事業大川内地区

調査対象地所在地　藤津郡太良町大字多良字大川内

調査対象面積　3.0ha

調査担当者　佐賀県教育庁文化課　市川浩文・古川直樹

調査期間　平成13年12月20日

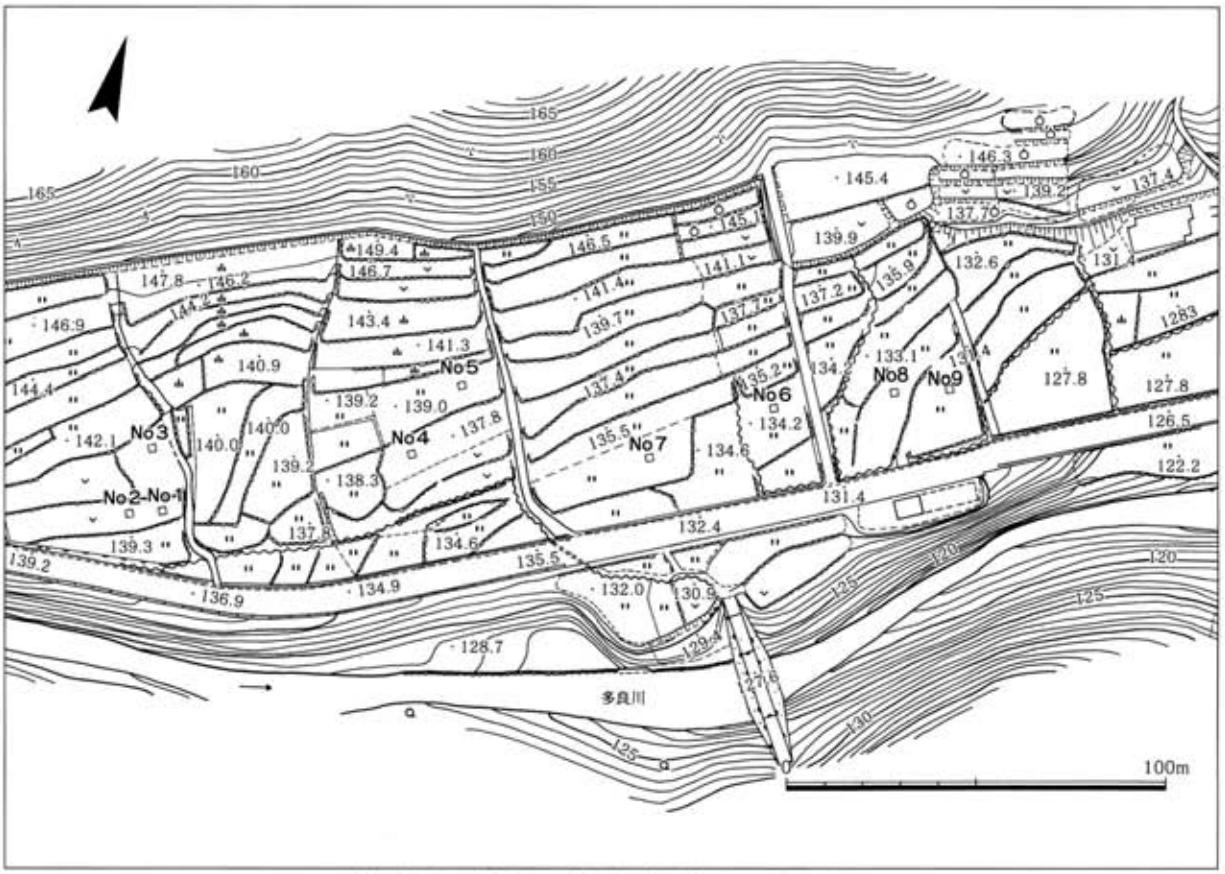
調査対象地区の立地　調査対象地は太良町の西部、経ケ岳・多良岳から放射状に延びる山稜の間の侵食谷にあたり、谷底を東流する多良川の北岸、標高120～160mの範囲に位置する。対象地は山稜南側斜面を段造成した水田部であり、旧地形としては、山稜斜面と谷部との間に挟まれた比較的緩やかな傾斜地であったと推定される。対象地の東側に大川内の集落が隣接する。

周辺の遺跡及び遺跡の内容　対象地は周知外であり、近接する周知の理蔵文化財包蔵地も見られないが、むしろ周辺での調査例等がないために埋蔵文化財の状況についてほとんど明らかになっていないのが実状である。多良川沿いの道は経ケ岳・多良岳の山麓の中でも最も広い平野へと続く道であり、対象地を道沿いに登った現山中キャンプ場付近からは多良岳への登山道が延びるが、古くは山頂付近の太良岳神社上宮、あるいは神宮寺である金泉寺への参道としても利用されていたようである。

調査方法　工事内容は水田部について区画整理を行うもので、比較的旧地形を留めていると想定される傾斜が緩やかな地点を中心に試掘坑（トレンチ）を９箇所設定した。調査は農道が幅１m足らずと非常に狭い上、各水田の段差が大きいため重機の搬入が不可能なことから、全て人力により掘り下げを行った。掘り下げ後は略測・写真撮影等の記録をとった後に理め戻しを行った。

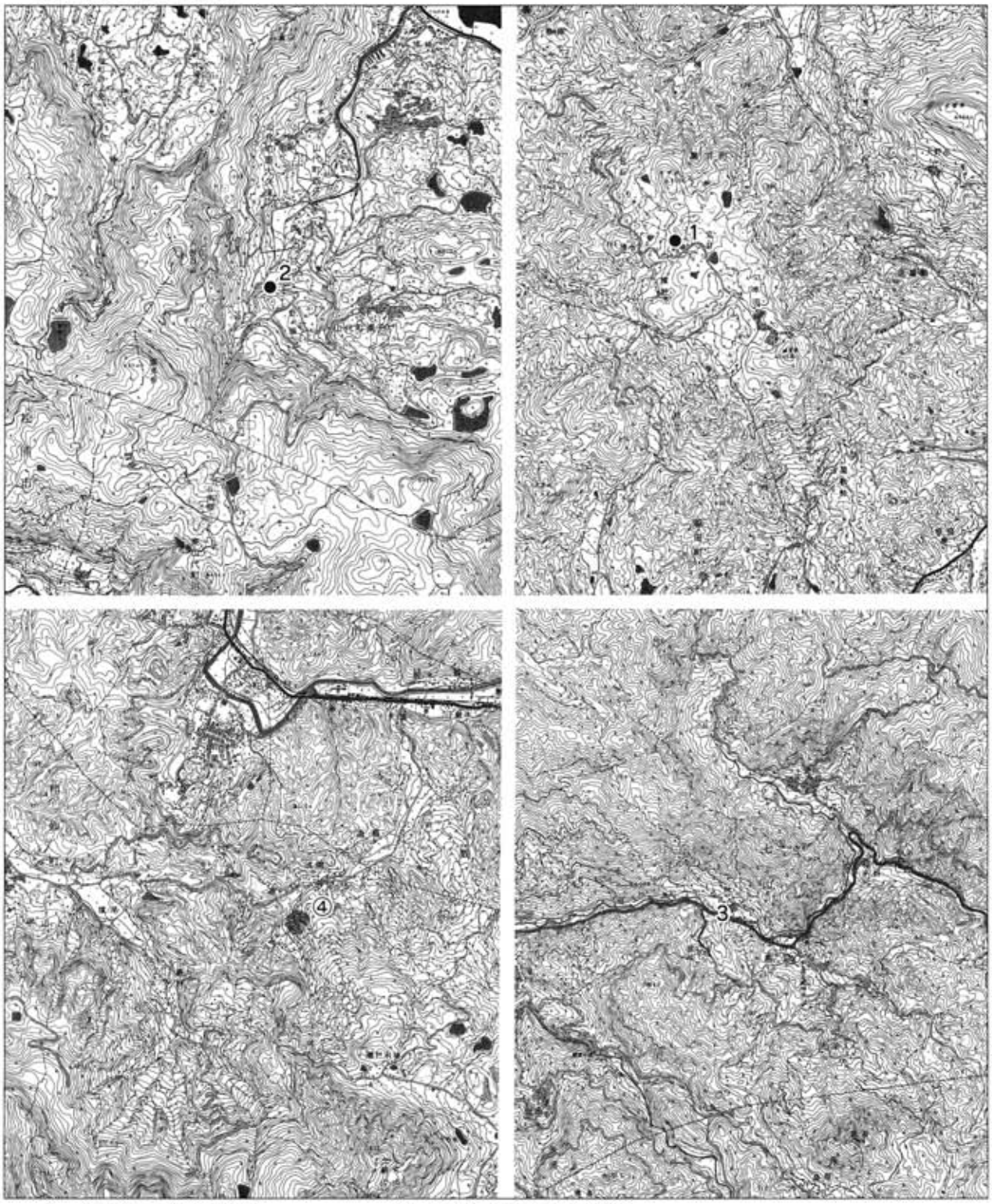
調査内容　No.1、2、7、9トレンチでは耕作土下で大型礫群からなる造成土が確認されたが、人力での掘り下げが不可能なため、下層の状況は未確認である。No.3トレンチでは自然堆積層を検出したが、土器・石器等の遺物は出土していない。その他のトレンチでは耕作土直下より硬い地山面が確認されたが、遺構は認められていない。出土遺物としてはNo.1、2、4、6、9トレンチの耕作土中より、江戸時代（一部明治期まで下る）の陶磁器が数点出土している。陶磁器には肥前系の染付、武雄系の陶器刷毛目皿が見られるほか、嬉野町内野山窯系の青緑釉陶器などが出土し、概ね17世紀後半～18世紀代に位置付けられる。

所見・その他　対象地は当初の予想以上に以前の耕地整理で改変を受けていることが明らかとなり、遺構・遺物包含層については確認できなかった。しかし、出土遺物は江戸時代前期～中期に位置付けられるものであり、調査対象地を含めた周辺部に当該期の遺跡が存在していた可能性がある。多良川沿いに太良岳神社上宮、あるいは金泉寺への参道のひとつが延びていたことも考え合わせると、山間部の狭小な土地ではあるものの、当時から人々の往来が比較的盛んであったことを窺わせるものである。



第12図　太良町：大川内地区トレンチ配置図

4．佐賀北部地区の調査



1　立目地区（伊万里市）　　2　野々頭地区（伊万里市）
3　馬川地区（七山村）　　4　厳木（二タ又）地区（厳木町）

第13図　佐賀北部地区調査地区位置図(1/50,000)

(6)　伊万里市

調査対象地区名　　集落水源地整備事業立目地区

調査対象地所在地　　伊万里市黒川町大字立目

調査対象面積　　0.34ha

調査担当者　　伊万里市教育委員会　島内浩輔

調査期間　　平成14年3月12日・平成14年3月13日

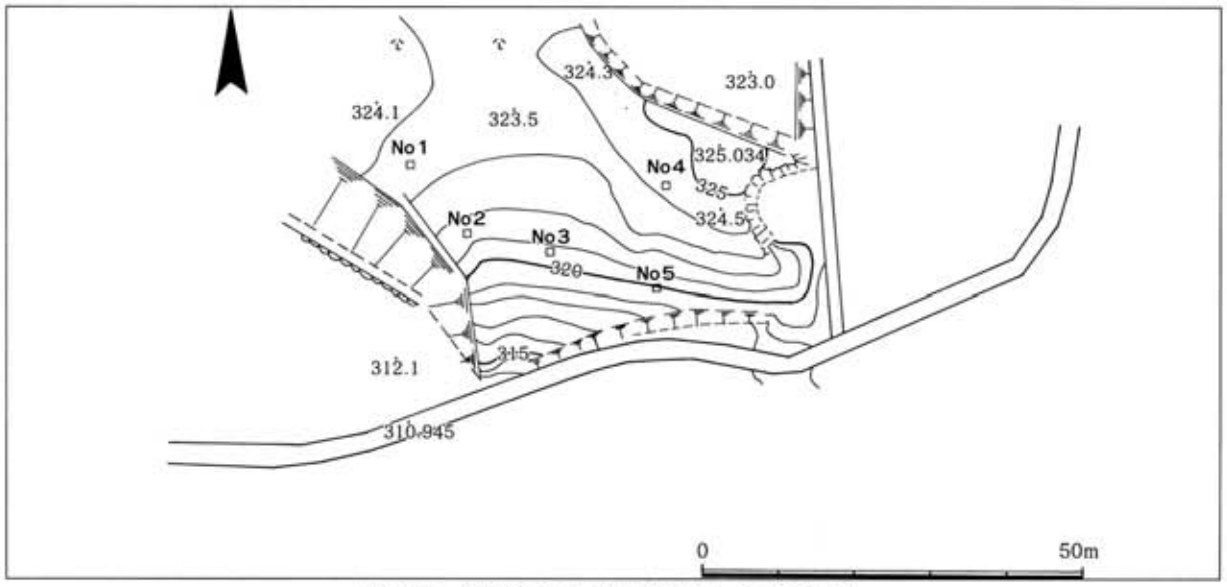
調査対象地区の立地　伊万里市街地の北に標高330mの大平山がある。調査地点は、大平山山頂の南に広がる緩傾斜の台地上に位置している。

周辺の遺跡及び遺跡の内容　周辺には、大平山遺跡・三郎左衛遺跡・前山遺跡・大良遺跡・石倉遺跡等縄文時代遺物の散布地が知られている。

調査方法　予定地に人力により２×２m程度の試掘坑９ヶ所を設けて遺跡の有無の確認を行った。

調査内容　遺構・遺物ともに確認できなかった。

所見・その他　遺跡の存在は確認できなかった。



第14図　伊万里市：立目地区トレンチ配置図

調査対象地区名　　集落水源地整備事業野々頭地区

調査対象地所在地　　伊万里市山代町大字東分

調査対象面積　　3,400㎡

調査担当者　　伊万里市教育委員会　島内浩輔

調査期間　　平成14年3月12日～平成14年3月13日

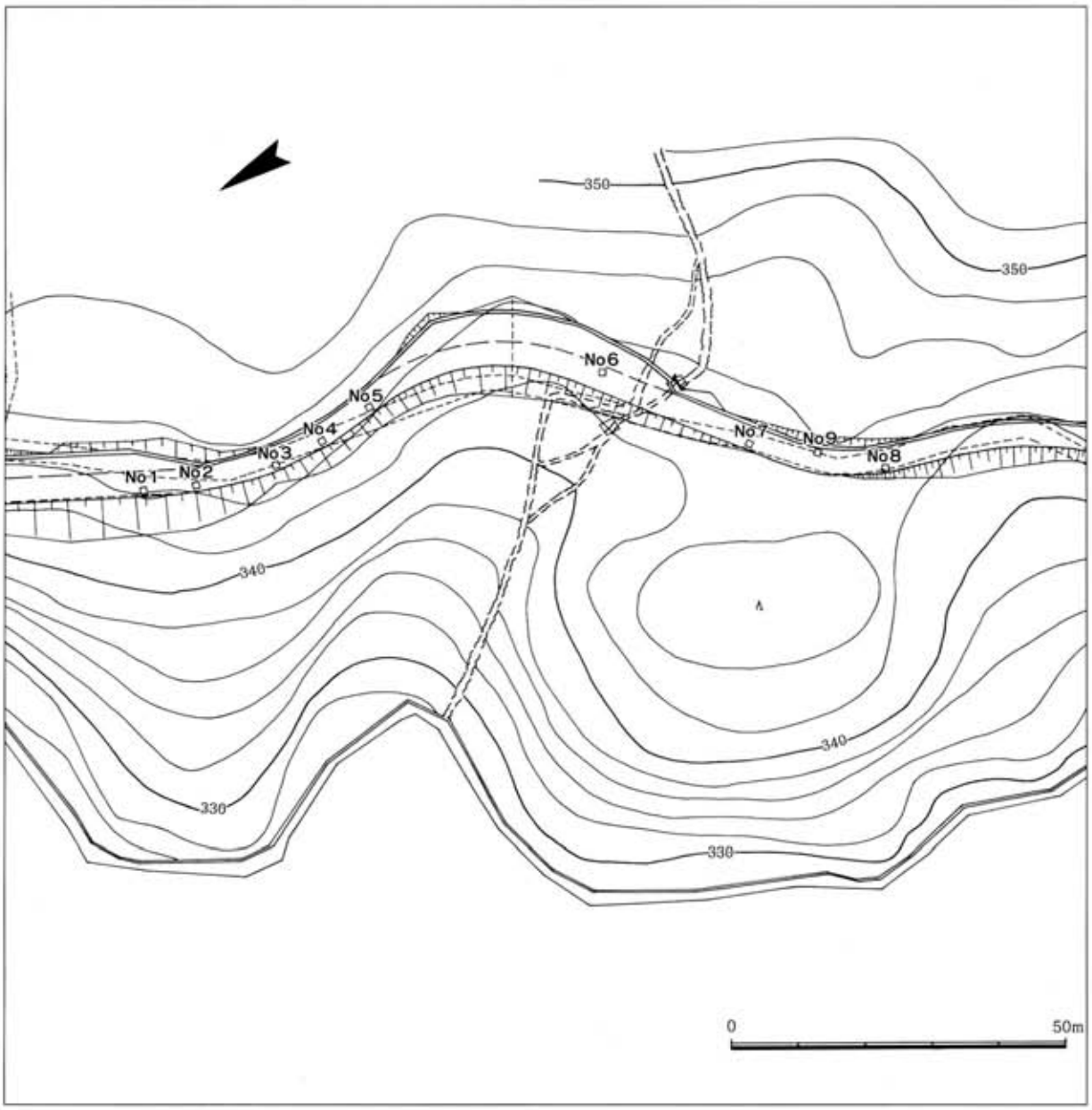
調査対象地区の立地　国見山系北端北側斜面に位置する。

周辺の遺跡及び遺跡の内容　周辺には原前遺跡・原後遺跡など縄文時代の遺物散布地が知られている。

調査方法　予定地に人力により２×２m程度の試掘坑９ヶ所を設けて遺跡の有無の確認を行った。

調査内容　遺構・遺物ともに確認できなかった。

所見・その他　遺跡の存在は確認できなかった。



第15図　伊万里市：野々頭地区トレンチ配置図

(7)　七山村

調査対象地区名　　農林漁業用揮発油税財源身替農道馬川地区

調査対象地所在地　　東松浦郡七山村大字馬川

調査対象面積　　1000m（調査面積33.5㎡）

調査担当者　　佐賀県教育庁文化課　市川浩文

調査期間　　平成13年10月25日

調査対象地区の立地　七山村の東部、玉島川の左岸域にあたり、玉島川に合流する小河川による侵食谷にあたる。調査地点の標高は、玉島川に近い国道323号の隣接地で約219m、谷を南に登った最も高いところで約264mである。現況はすべて水田。

周辺の遺跡及び遺跡の内容　対象地の玉島川を挟んだ、対岸の緩斜面（現在は住宅・水田）は周知の埋蔵文化

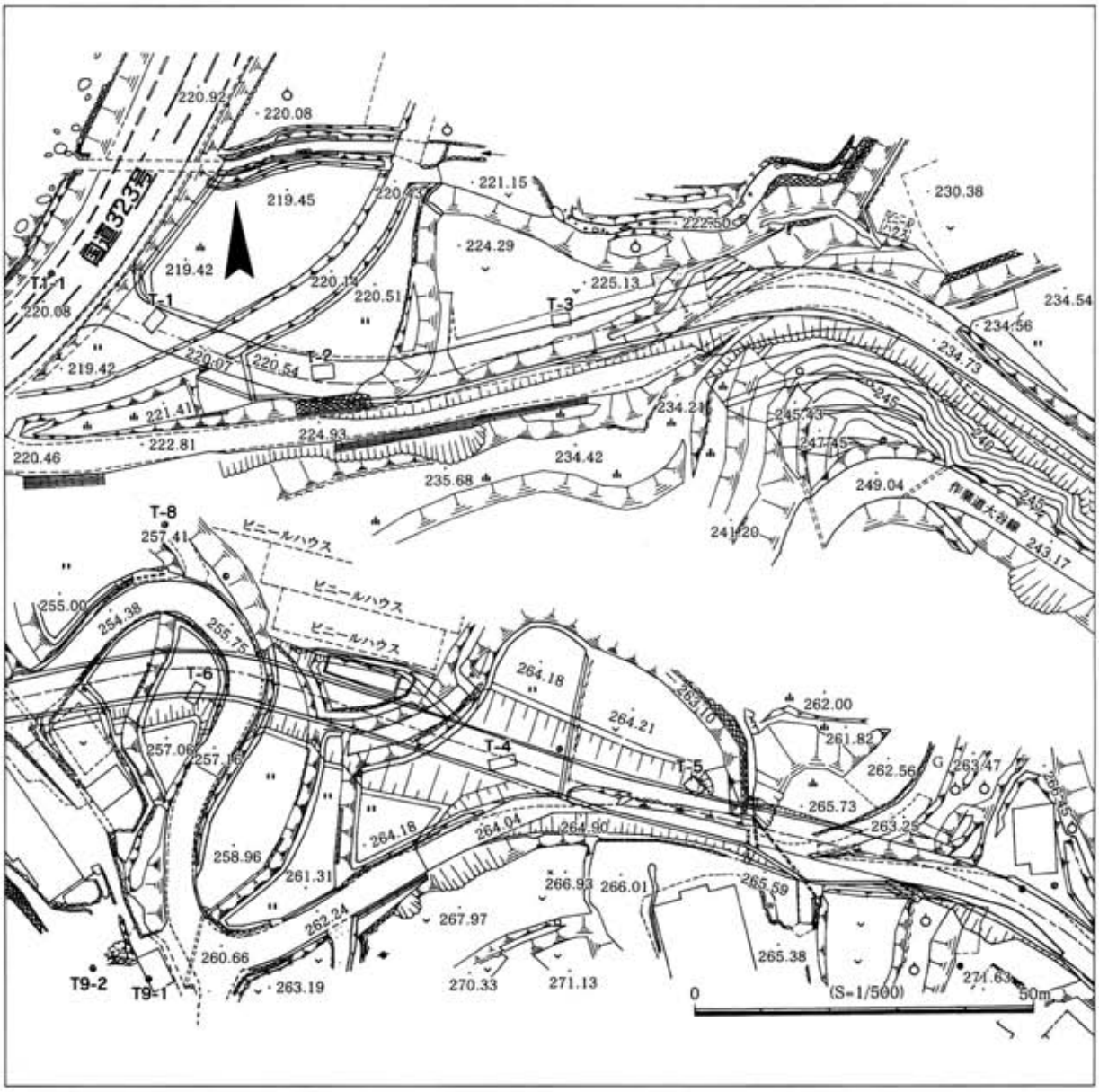
財包蔵地琳ノ上遺跡（縄文時代の散布地）が存在し、その他、玉島川沿いでは石器片の散布地が各所に散在する。

調査方法　対象地は水田造成により切り盛りがなされている箇所が多いが、そのうち、旧地形が遺存している可能性がある地点について６箇所にトレンチを設定した。トレンチの掘削は重機を用い、遺構検出作業は人力により実施した。

調査内容　遺構は確認できなかった。

遺物としては、黒曜石フレイク・木杭（No.1トレンチ）、近代以降の瓦・染付・色絵・陶器の小片（No.4トレンチ）、中世の糸切り底の土師器杯小片（NO.6トレンチ）がある。

所見・その他　対象地は当初の予想以上に大きく切り盛りがなされており、旧地形についてはほとんど失われていることが明らかとなった。トレンチ内で旧地表面が確認されたのはNo.6トレンチのみであり、旧地表面下位より縄文期の遺物包含層に似た土層が検出されたが、旧地形が比較的急な斜面であったと考えられることから、遺跡が存在する可能性は少ないと思われる。



第16図　七山村：馬川地区トレンチ配置図

(8) 厳木町

調査対象地区名　県営中山間地域総合整備事業厳木地区［ほ場整備浪瀬（ニタ又地区）］

調査対象地所在地　東松浦郡厳木町大字浪瀬地内

調査対象面積　3．9ha

調査担当者　厳木町教育委員会　坂井清春

調査期間　平成13年12月14日～12月27日

調査対象地区の立地　対象地は厳木町の西部、女山から北に派生する丘陵地の北側斜面にあたる、標高約165～205mの地点である。南北に伸びる２つの丘陵及びその間の谷を含む地区が開発対象地区であるが、急傾斜のため、調査対象外とする。調査対象地区は蜜柑園造成時にやや改変を受けていたが、比較的旧地形を良く残している。現況は蜜柑園が営まれている。

周辺の遺跡及び遺跡の内容　対象地の北東約300m付近には樫原遺跡（縄文時代散布地）が、北西400mには苔見堂遺跡（縄文時代散布地）が存在するが、地形的改変を受け詳細は不明である。また、浪瀬の集落を挟んだ北側の尾根上には中近世城郭の獅子城が立地するが、獅子城に関連する集落・屋敷等の存在は今のところ確認されていない。

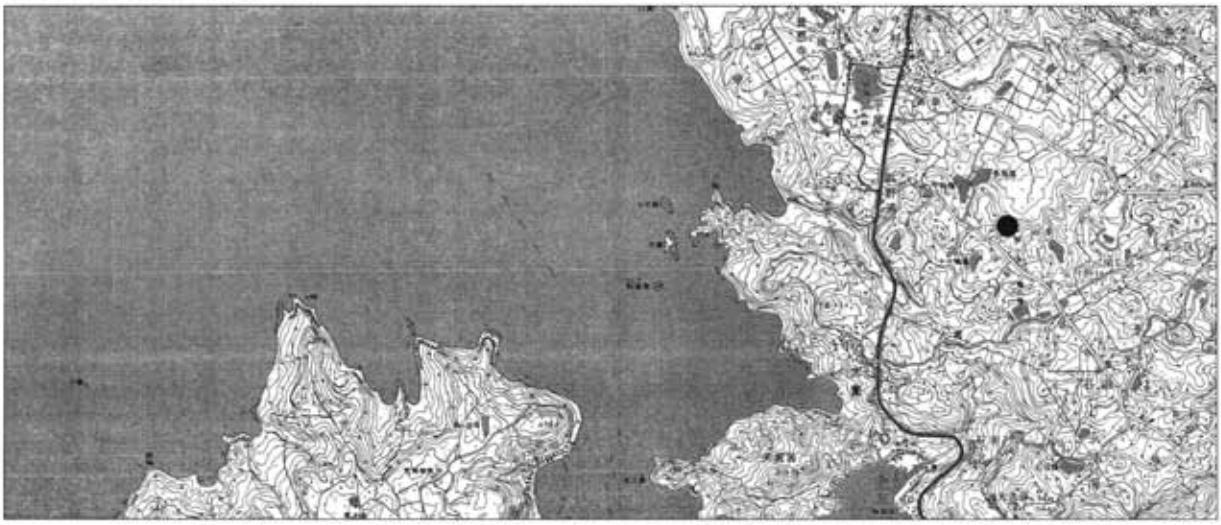
調査方法　対象地のうち、比較的旧地形を残していると予想される地点に対して試掘坑14本を設定し、人力により掘削を行なった。

調査内容　検出した遺構としては、No.3トレンチにおいて小穴５個を確認し、完掘したものの、遺物は出土しなかった（小穴の埋土は新しいものではなく、近世以前に遡る可能性もあるが、詳細な時期については不明）。その他、蜜柑穴がみられた。出土遺物としては、No.5トレンチで近代以降の瓦片・陶磁器片が採集されたのみであった。

所見・その他　全てのトレンチで表土直下から燈褐色粘質土（基盤層の風化土壌）が見られ、蜜柑園造成にもかかわらず、旧地形が比較的良く残っていることがわかった。唯一、No.3トレンチでは小穴を検出したが、出土遺物もなく、遺構の時期については特定できなかった。また、採集される遺物も極めて少量であり、遺跡の存在については確認できなかった。

第17図　厳木町：二夕又地区トレンチ配置図

5．佐賀上場地区の調査



第18図　佐賀上場地区調査地区位置図(1/50,000)　1　棚橋地区（玄海町）

(9)　玄海町

調査対象地区名　畑地帯総合整備事業（上場Ⅳ期）棚橋地区

調査対象地所在地　東松浦郡玄海町大字今村字堤田

調査対象面積　3,853㎡

調査担当者　玄海町教育委員会　有光宏之

調査期間　平成13年9月13日～9月19日

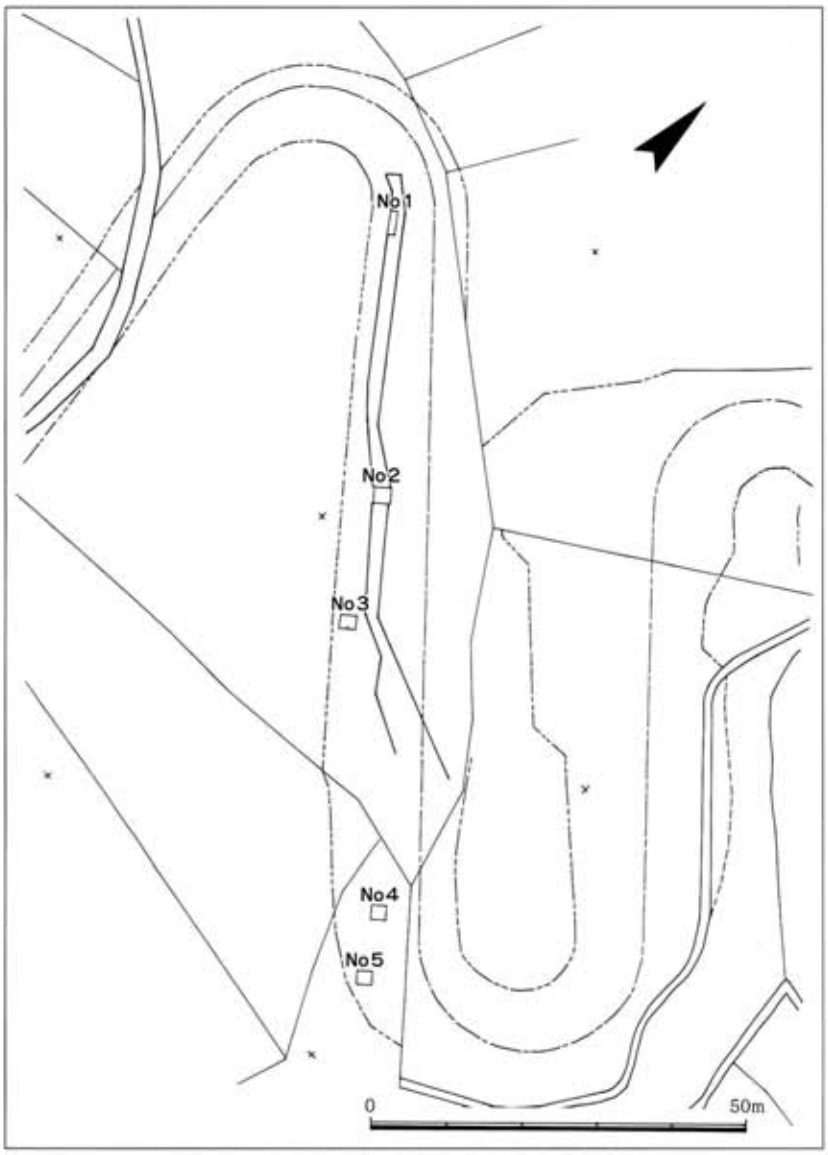
調査対象地区の立地　標高約165m前後の畑地及び山林に位置している。

周辺の遺跡及び遺跡の内容　調査対象地の1kmの範囲内に、縄文時代の棚橋・大橋遺跡がある。

調査方法　2×2mの試掘坑4箇所と1×3mの試掘坑1箇所を設定し、すべて手掘りで行なった。

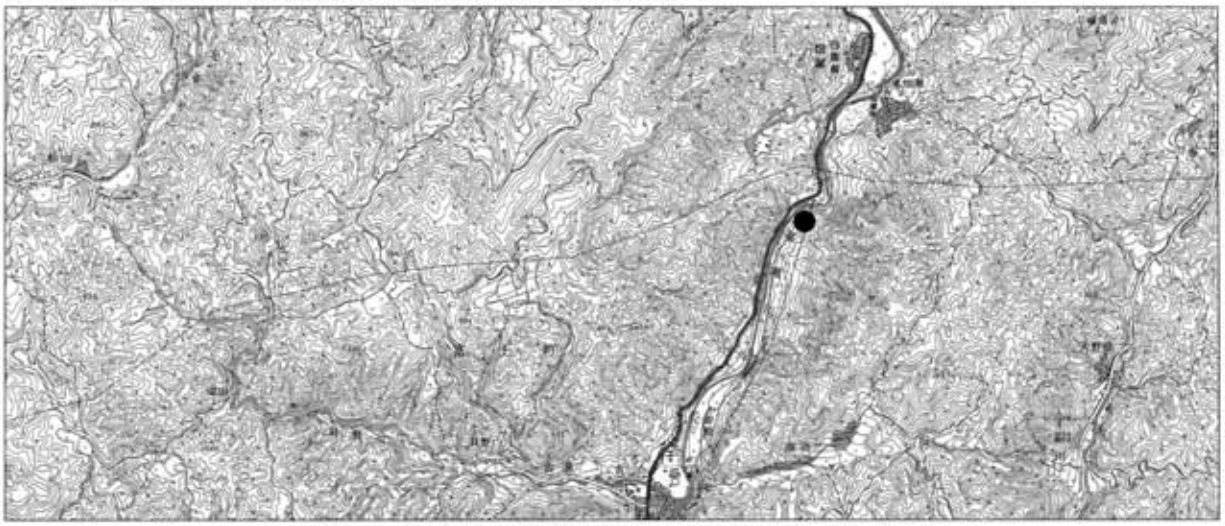
調査内容　遺構・遺物ともに確認できなかった。

所見・その他　今回の試掘調査では、畑地は表土の下は畑造成時の盛土が深く、その下層は自然層で遺構・遺物は検出されず、遺跡の存在は確認できなかった。山林も自然層で遺構・遺物は検出されず、遺跡の存在は確認できなかった。



第19図　玄海町：畑地帯総合整備事業棚橋地区

［2］ 嘉瀬川ダム建設事業に係る文化財確認調査



第20図　嘉瀬川ダム建設事業調査地区位置図(1:50,000)

調査対象地区　　嘉瀬川ダム建設事業（ダムサイト建設予定地）

調査対象地所在地　　佐賀郡富士町大字畑瀬

調査対象面積　　－　㎡（調査面積　43.5㎡）

調査担当者　　佐賀県文化課 管理指導班　市川 浩文・古川 直樹

調査期間　　平成14年１月18日～平成14年３月29日

調査対象地区の立地・現況　対象地は嘉瀬川が畑瀬の谷底平野部から、さらに狭く急峻な谷部を南流する部分の東岸にあたる。地形的には二つの痩せた尾根に挟まれて広がる緩斜面にあたり、現況ではこの斜面の標高240～280ｍの範囲が細かく段造成されて、平坦面が作り出されている。これら平坦面は東西200ｍ、南北120ｍの範囲に広がって分布している。発見時の現況は杉林となっていたが、それ以前は水田として使用されていたようである。

周辺の遺跡及び遺跡の内容　周辺の遺跡分布密度は低いが、近接する周知の埋蔵文化財包蔵地としては東畑瀬・西畑瀬遺跡が存在し、前者は縄文時代早期・晩期の遺物包含層・中世集落跡、後者は弥生時代中期・古墳時代前期及び中世から近世の集落跡である。その他、東畑瀬・西畑瀬遺跡の立地する谷底平野部の東側丘陵部では中世山城関連遺構の存在が指摘されている。

対象地については地形的に大規模な集落遺跡等の存在は考え難いが、主交通路である嘉瀬川沿いの谷部を望む緩斜面であり、周辺部に比較すると遺跡の存在は十分想定できる地形と言える。

調査方法　段の数は大小合わせて30以上が数えられ、いずれも等高線に沿った、細長い平面形をなしている。段の中でも規模の大きなものについて、平坦地Ａ・Ｂ・Ｃと呼称し、このうち平坦地Ａは南北37ｍ、東西16ｍを測り、最も面積の広いものである。これら多くの平坦面の谷部側法面では、各所で石垣が確認されている。石垣の規模も上記の平坦地Ａ・Ｂ・Ｃに伴うものが、その高さ・幅共に大規模であり、それぞれ石垣Ａ・Ｂ・Ｃとした。

調査対象地については、造成平坦面の範囲・全体規模を明らかにするため、平成12年度に地形測量調査を実施している。今回は各造成平坦面の性格を明らかにするため、トレンチ調査を実施した。また、石垣の積石技法等を明らかにするため、石垣面の清掃作業を行い、写真撮影を実施した。トレンチは平坦地Ａ及び石垣Ａ下部を中心に設定し（No.1～5）、その他、谷部から平坦面群へと続く緩斜面部分についても、旧石器・縄文時代

遺跡等の存在を想定して3本のトレンチ（No.6～8）を設定した。掘削は重機の搬入が困難なため、すべて人力にて行った。

調査内容　No.1トレンチ　平坦面Aの盛土状況を確認するため、石垣A天端付近から東方向に向かって、長さ7.8m、幅2.0mの規模で設定した。その結果、旧田面層・床土層の下位から花崗岩風化礫・土壌の二次堆積からなる地山面を、天端から約6mの地点を境に切り盛りを行って造成していることが確認された。造成面上を精査したが、遺構等は確認できなかった。

No.2トレンチ　No.1トレンチの東側に隣接して、同方向に長さ8.0m、幅2.0mの規模で設定した。旧田面層・床土層の下位では全面で地山面が確認され、精査を行ったが、No.1トレンチと同じく遺構等は確認できなかった。

No.3トレンチ　No.2トレンチの北側付近、平坦面Aから上段の平坦面へと続く通路状の部分に、長さ2.1m、幅2.1mの規模で設定した。その結果、石列が2条、溝状にトレンチ東側からトレンチ中央部に伸び、さらに直角に折れて北側に続く様子が確認された。石列の残存状況は良くないが、明らかに人為的に並べられたものであり、上段から流れてきた水を北側の谷部へと流す排水溝的な性格が想定される。

No.4トレンチ　平坦面Aの北端部、石垣Aの北面側の裏込め状況等を確認するために、小規模（長さ1.6m、幅1.0m）なトレンチを設定した。その結果、石垣の控えは0.3～0.4m、裏込め部分も0.3～0.4m程度であることがわかった。また裏込めは礫だけでなく、土も多く含まれるものであった。

No.5トレンチ　石垣Aの西面部分の裾部付近に設定し、石垣の根石付近の状況を確認した。トレンチを設定した範囲では、根石に築石より大きな石を用いている様子は窺えず、むしろ比較的小ぶりの石を使っているようである。また、根石の設置に際して地山を掘り窪めるなどの工法を取っている様子も見られなかった。

No.6～8トレンチ　緩斜面上における遺構・遺物の存在を確認するため、旧地形を残していると想定される箇所を選んで設定した。いずれのトレンチでも表土の下位より花崗岩風化礫・土壌の二次堆積からなる地山面が確認され、遺構及び遺物については確認されず、遺物包含層を想定できるような自然堆積層も見られなかった。

所見・その他　平坦面へのトレンチ調査では、旧地形の斜面に対して切り盛りによる段造成を行い、さらに土留めとして谷部側に石垣を築いている様子が確認できた。しかし、建物の柱穴等の遺構は確認できず、土層観察でも水田層以外は検出できなかった。No.3トレンチで検出された溝状の石列も水田に関連するものである可能性が考えられる。また、出土遺物もなく、水田以外の施設の存在を示す資料は得られなかった。

また、石垣Aの築石は大きさ0.4～0.5m程度の石が数量的に最も中心を占めるが、大きさ1.0m以上になる大石や0.3m未満の小さなものも多く見られる。用いられる石はほとんどが割石であるが、意図的割った石は少なく、その多くが転石の中から選択して積み上げられているようである。石積みの目地は横方向を意識しているように見えるが、基本的には「布目くずし」積みであり、「落とし」の技法は観察されない。隅角部の作りは算木積み状に左右に引きを違えて積むが、角石の大きさ・形状はまちまちで、角脇石の使用も見られない。積み石技法的には近世期に遡る要素を多く含んだものと言える。

以上のことから、今回の調査結果からはこれらの数々の平坦面は水田造成に伴って造られた可能性を示すもので、城館・集落等の存在を積極的に示唆する資料は得られなかった。造成の行われた時期についても不明であるが、石積み技法には近世期の要素が含まれており、当該期の遺構である可能性も十分考えられる。今回の調査面積は調査対象地の全体規模に比べて極めて小面積であり、さらに広範囲の試掘調査が必要と思われる。

石垣A遠景（北西から）

平坦地A調査前状況（北東から）

石垣A（西から）

石垣A北東隅石

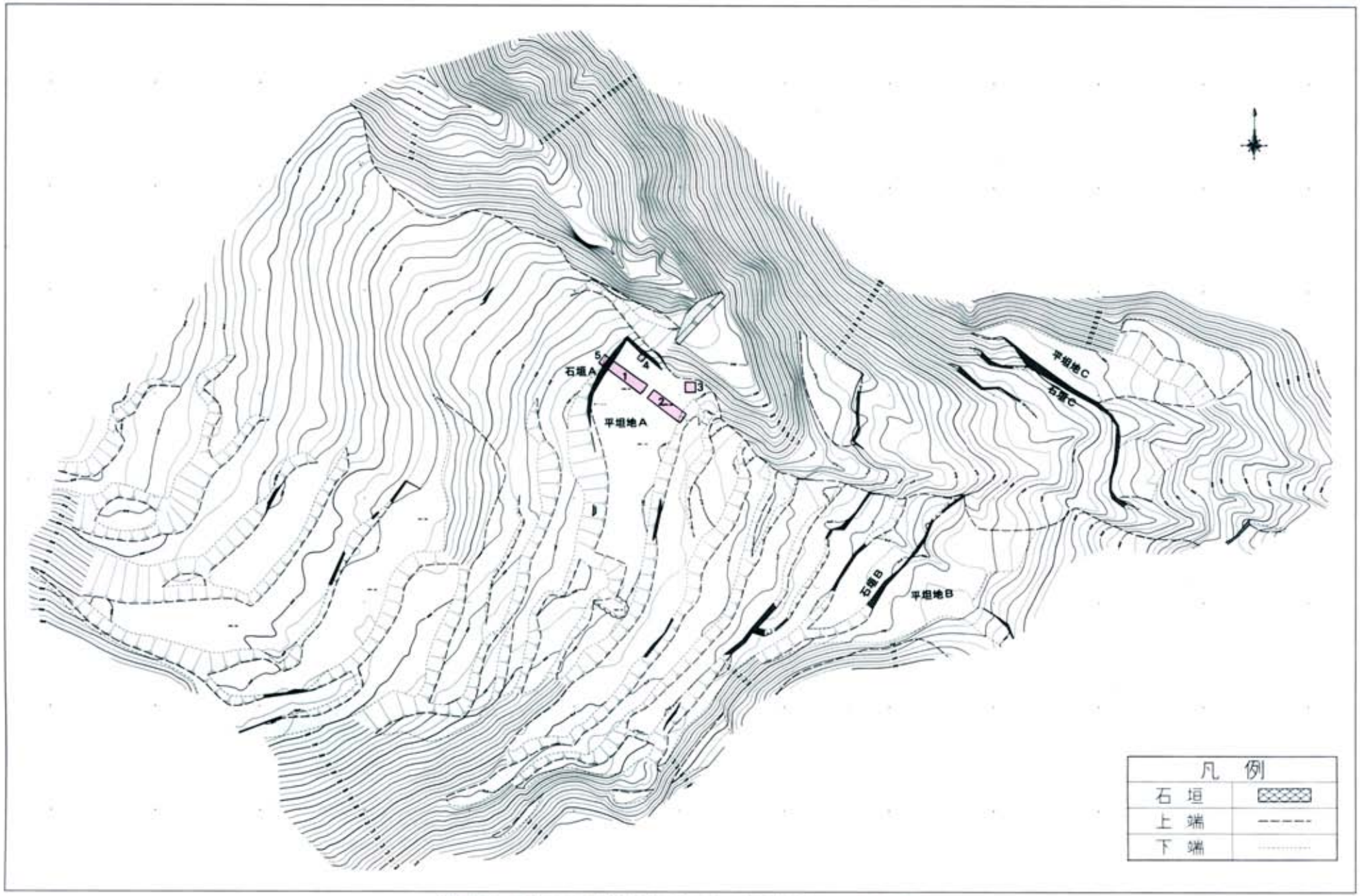
石垣A北側

石垣A南側

石垣B

石垣B

図版2　嘉瀬川ダム建設事業地区確認調査遺構



第21図　富士町：嘉瀬川ダムダムサイト予定地トレンチ配置図

［3］ その他公共事業に係る文化財確認調査

(1) 佐賀市

調査対象地区名　県営佐賀城公園造成工事地区

調査対象地遺跡名　佐賀城跡（二ノ丸跡）

調査対象地所在地　佐賀市城内二丁目

調査対象面積　500㎡

調査担当者　佐賀県教育庁文化課　西田和己・五島昌也

調査対象地の立地　佐賀城跡は佐賀市の南寄り、佐賀市街の中心地に含まれ、現在は佐賀県庁をはじめ、学校、博物館・美術館等が集中し、民家もかなり密集して建てられている。（「第22図　佐賀城跡位置図」参照）旧地形としては、有明海沿岸の沖積性低地にあたり、二ノ丸跡付近での標高は約3.5mである。今回調査対象地となった鯱の門北側部分は、佐賀城公園歴史の森地区の駐車場用地として更地の状態であるが、その他は学校用地、公共施設用地として利用されている。

遺跡の内容　佐賀城跡は、佐賀平野の低平地に築かれた近世期の城で、周囲を最も幅広のところで約40間の堀に囲まれた典型的な平城である。その前身は、天正年間に整備された龍造寺氏の旧村中城を拡張したもので、鍋島直茂・勝茂親子の佐賀城総普請により完成した。慶長13年(1608)から慶長16年までに、旧村中城三ノ丸東に本丸が造られ、続いて本丸を北から東に囲むように二ノ丸が造られた。記録では承応2年(1653)に造作にかかったとされている。

佐賀城総普請以来、佐賀城本丸は１度、二ノ丸は３度、三ノ丸は２度大きな火災が発生し、曲輪内建物のほとんどが焼失している。享保11年(1726)の火災では天守をはじめ、本丸・二ノ丸・三ノ丸が焼失し、享保13年に二ノ丸、遅れて宝暦5年(1755)に三ノ丸が再建されたが、旧本丸の機能は二ノ丸に移り、本丸敷地内に御殿が再建されることはなかった。二ノ丸はその後百年余り藩政の中心であったが、天保6年(1835)に再び焼失したため、10代藩主直正は本丸再建を表明し、天保9年に完成をみた。一方、二ノ丸は嘉永5年(1852)に再々建がなされたが、その存続期間は短く、明治7年(1874)の佐賀戦争により、三ノ丸とともに焼失し、佐賀城二ノ丸の体裁を失った。

天保の再建に当たって、本丸においては「佐賀城御本丸差図」（註１）等、詳細な作事計画図が作成され、現在も残存している。これまでの発掘調査により、差図に整合する礎石群が検出され、現在実施中の本丸御殿復元（佐賀県立歴史資料館（仮称）建設）事業の有力な資料となった。一方、二ノ丸においては詳細な作事計画図に類するものは現在までのところ残存しておらず、僅かに城内の行事を記した「諸御手数録」（註２）に北御丸として、式台まわりの建物輪郭が見られるのみである。享保の再建以前においても、佐賀城全体を描写した「佐賀小城内絵図」（註３）に、数棟の建物が描かれるのみである。

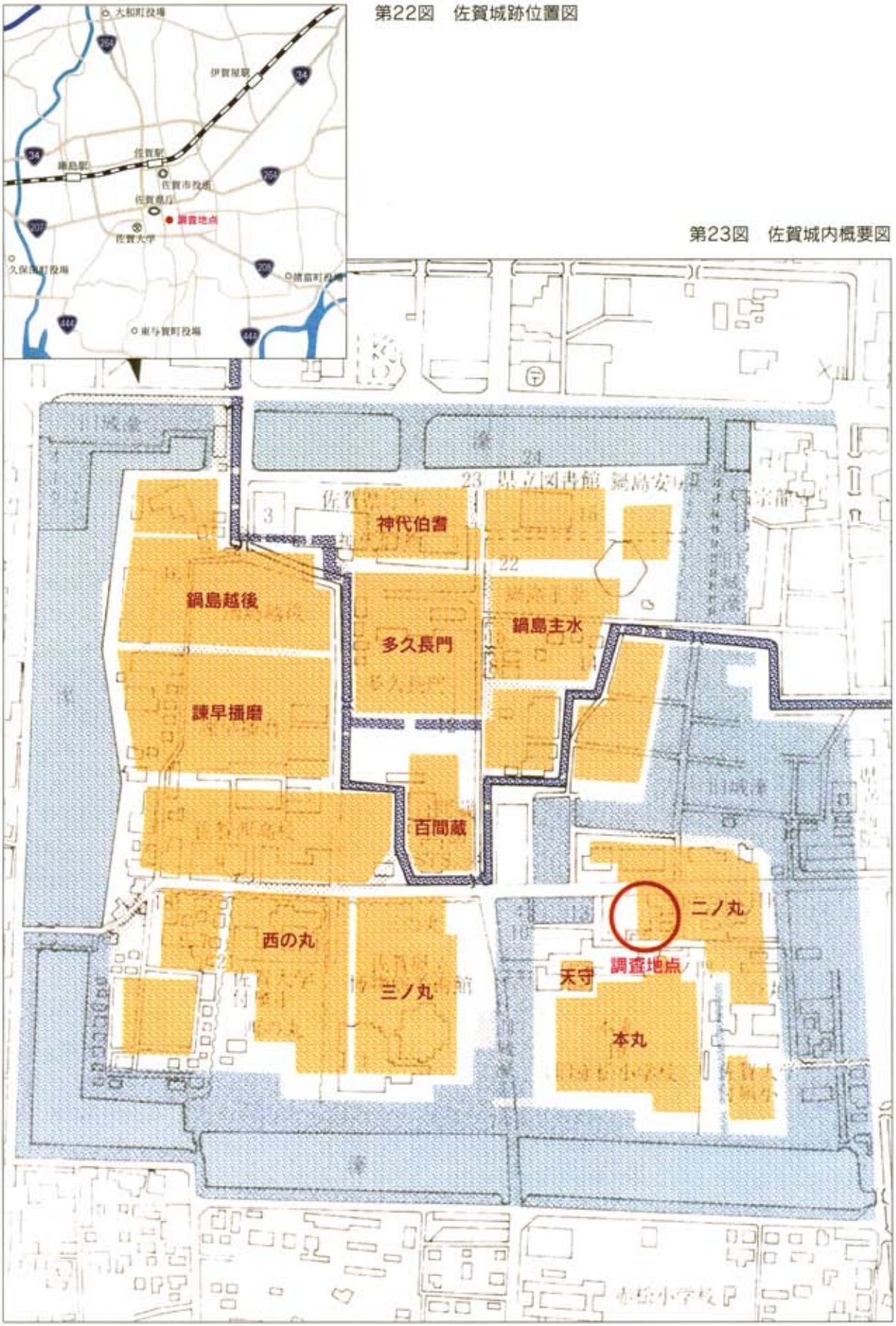
また、歴史資料によると、二ノ丸では、これら大火による再建のほか、表御門について宝暦5年(1755)年と寛政2(1790)年に、御居間について明和8年(1771)年に、式台について寛政4(1792)年に、それぞれ棟上げの記載があり、いわゆる営繕活動としての建物改築が行われている。

近現代においては、明治22年に尋常師範学校附属小学校（現佐賀大学付属小学校）が二ノ丸東半に開設、昭和26年佐賀市立赤松公民館開館、昭和43年NHK佐賀放送会館開館など、主に公共文教施設が立地し、現在に至っている。佐賀城二ノ丸における過去の発掘事例はほとんどなく、二ノ丸西側の堀護岸石垣を調査したに留まっている。

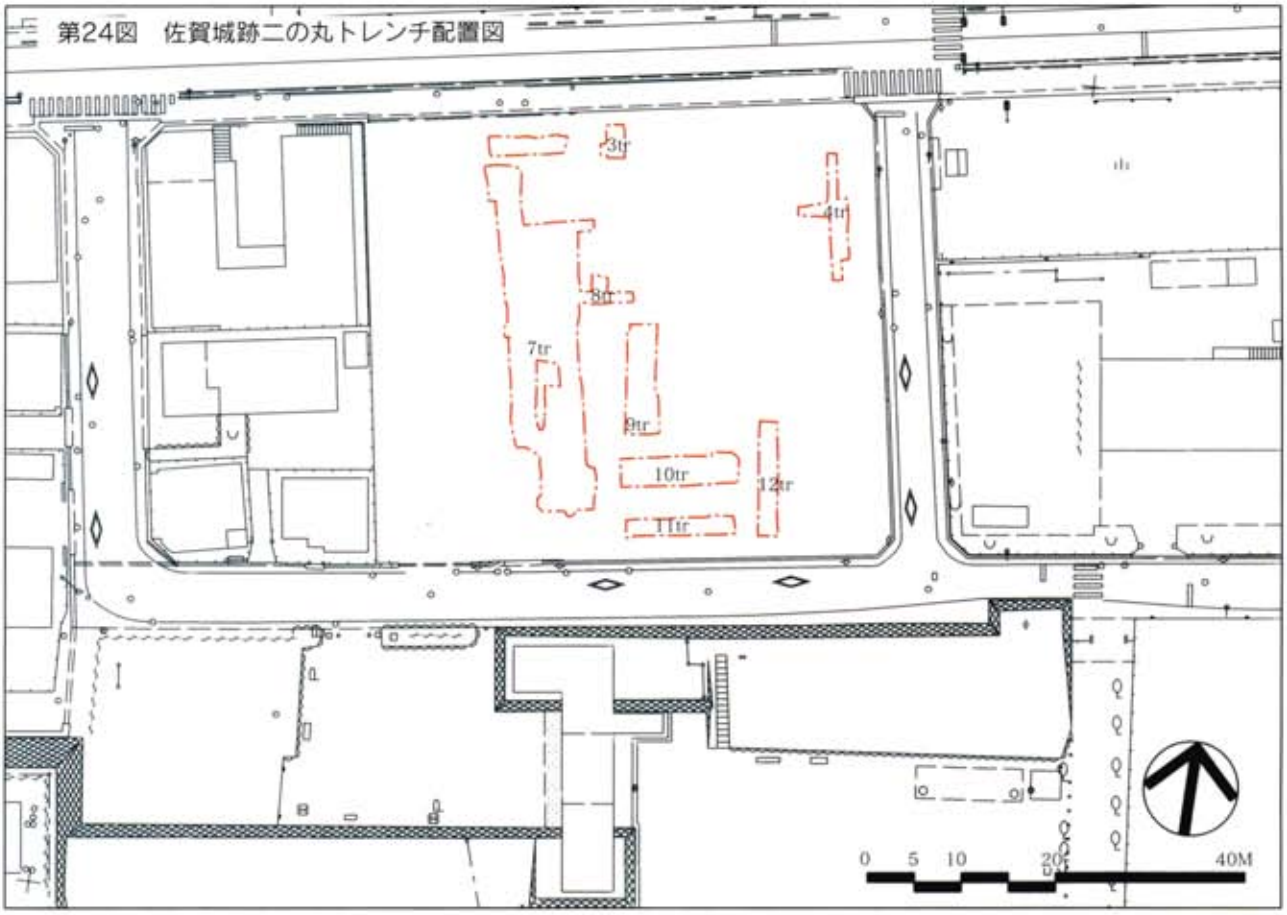
調査方法及び内容　今回の調査は、当該地に佐賀城公園の駐車場を新設する開発行為の事前確認調査として実施したものである。調査範囲は、佐賀城全体を描いた「佐賀城分間御絵図」（註４）によると、二ノ丸の西端部と西側通路部分となり、具体的には二ノ丸大手門とそれに関連する施設、式台建物及びその前庭の部分に当た

第22図　佐賀城跡位置図

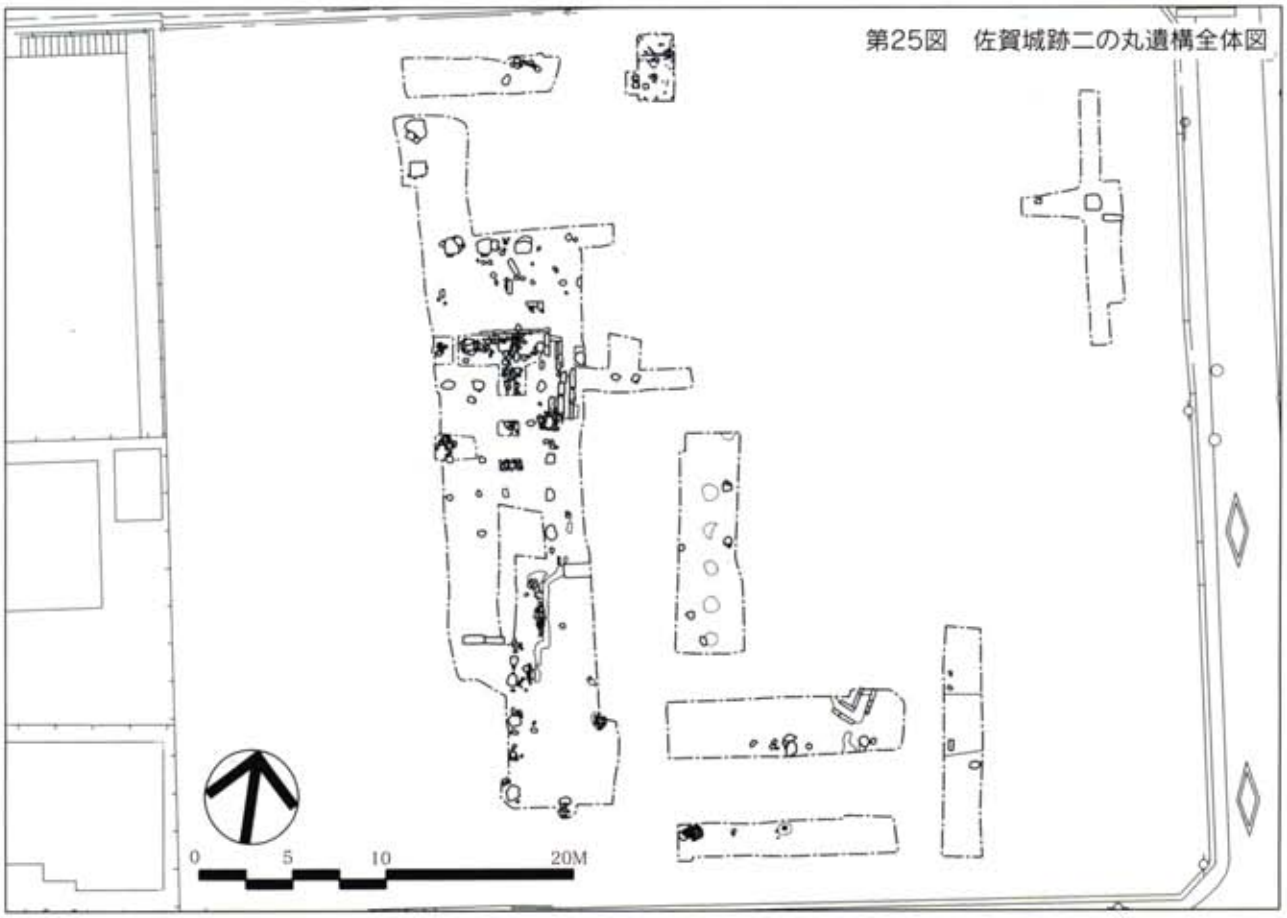
第23図　佐賀城内概要図



第24図　佐賀城跡二の丸トレンチ配置図



第25図　佐賀城跡二の丸遺構全体図



る。（「第23図　佐賀城内概要図」参照）約2,000㎡を調査対象とし、そのうち「第24図　トレンチ配置図」のとおり、約500㎡を調査した。表土が固く締まっているため、掘削機（バックフォー）によって床堀を行い、その後、人力により遺構の検出及び精査を行った。その結果、「第25図　遺構全体図」のとおり、鉄筋コンクリート建築物が所在していた部分を除いて遺構を検出した。以下に調査地点毎に述べる。

(1)二ノ丸大手門想定位置　標高3.1m内外（現地表面下約50㎝）にて、「第26図　二ノ丸大手門～多聞櫓（北）周辺遺構図」のとおり、５個の礎石を検出した。礎石は自然石またはそれを粗割りした四角形であり、一辺が80㎝内外ものが多く大型である。南北軸に２石、東西軸に３石、矩折れに並んでおり、南北軸の礎石間隔は約2.1m（約6尺9寸）、東西軸の礎石間隔は西から約1.8m（約6尺）と約2.1m（約6尺9寸）である。個々の礎石については以下のとおり。

①南北軸北……現状は南西角部を欠くため不整形であるが、本来は隅丸長方形と思われる。南北長1.05m、東西長1.13mで、欠損部を復すると、残存５石中最大となる。東辺には上辺を作り出すための石割痕跡が残り、矢穴幅は5～7㎝である。上面は平坦で水平を保ち、柱心想定部分の標高は3.11mである。

②南北軸南……欠損はなく、長方形をなす。南北長0.81m、東西長0.84mあり、北辺及び東辺と西辺に各辺を作り出すための石割痕跡が残り、そのため北西角はほぼ直角を示す。北東角は直角ではないが、直角を作ろうとした意図は明瞭に伺える。それに対して、南辺は原石形状を留めている。上面は平坦で水平を保ち、柱心想定部分の標高は、3.10mである。

③東西軸西……欠損はなく、南西角を円心とする四半円形をなし、南北、東西長とも0.87m。上面は平坦で水平を保ち、柱心想定部分の標高は3.03mである。

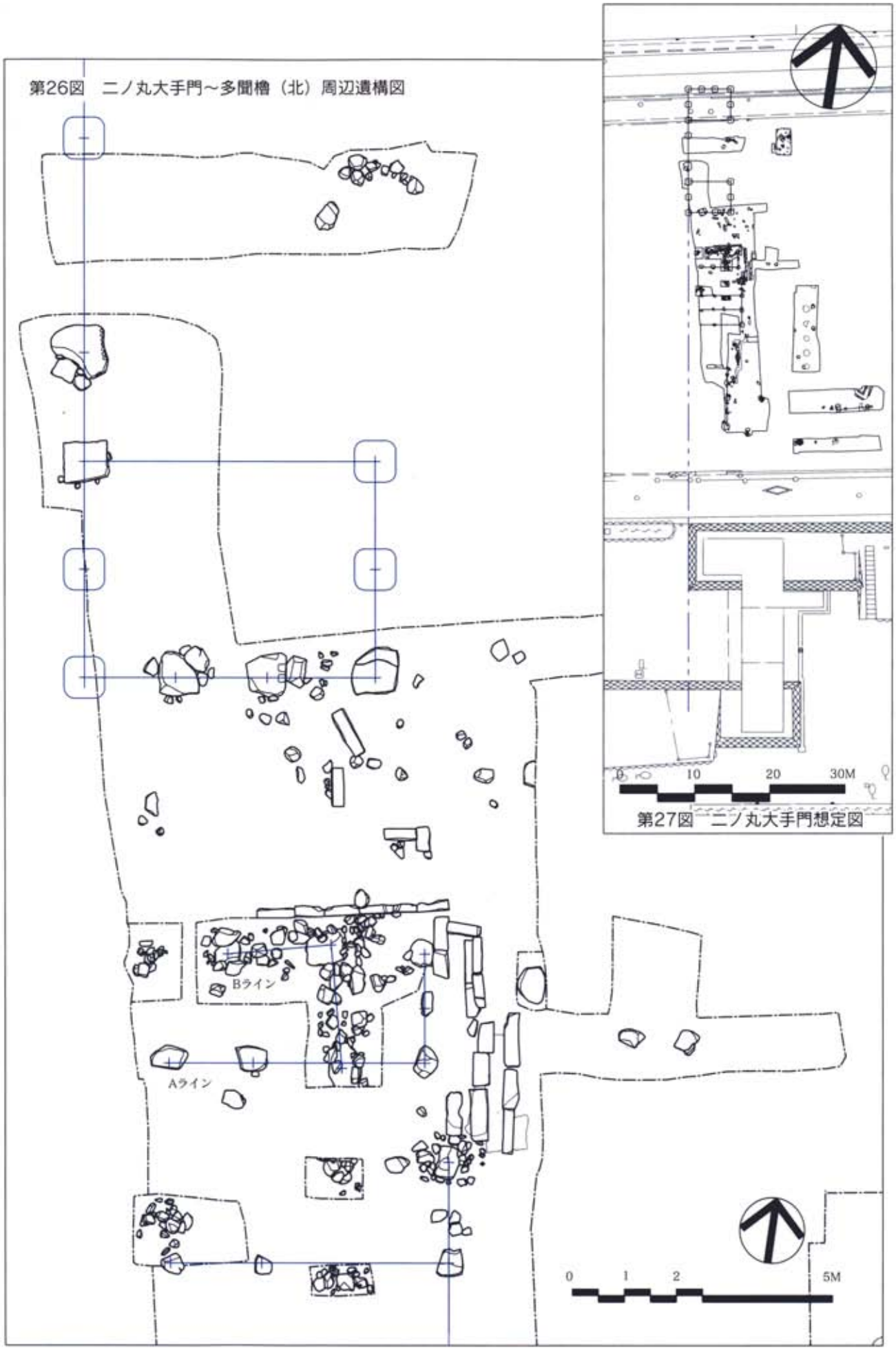
④東西軸中……欠損はなく、東辺を底辺とする台形状をなし、南北長0.87m、東西長0.78m。東辺に上面を作り出すための石割痕跡が残り、矢穴幅は14～15㎝と大型である。上面は平坦で水平を保ち、柱心想定部分の標高は3.10mである。

⑤東西軸東……長方形の一辺を隅切りしたような五角形であり、南北長0.87m、東西長0.90m。現状は石材を南北１：２とするように割れが入っている。上面は平坦で水平を保ち、柱心想定部分の標高は3.09mである。

各礎石の標高もほぼ等しく、東西軸と南北軸が直交していることから、この５石は一組の建物のものであり、礎石の形状、仕上げから南北軸が正面、東西軸が側面であると推定される。歴史資料によると、先の「佐賀城分間御絵図」に描かれた二ノ丸の大手門は、石垣を伴わず平地に立地し、扉や窓の描写から桁行き７間（３間＋１間＋３間）と推定される。梁間は絵図から読みとれないが、桁行きとのバランスを考えると、３間の可能性が高い。これを現状遺構に当てはめると、周囲の状況から矩折れ部が建物南西隅と推定され、不確定な中央大戸の間隔を現存する「佐賀城鯱の門」（註５）と同一に設定すると、「第27図　二ノ丸大手門想定図」が推定できる。僅か５石のみの検出であるため、推定の域を出るものではないが、桁行き16.6m、梁間5.6mとなり、続き櫓部分を除いた「鯱の門」と同等の規模であったこととなる。また、二ノ丸大手門西面と本丸鯱の門石垣西面が、一直線上に並び、綿密な配置計画が存在したことが伺われる。

(2)多聞櫓想定位置　佐賀城分間絵図では、①二ノ丸大手門から南へ約25m、そこから東に折れ約43mに渡って多聞櫓が描かれている。この一帯では、20個以上の礎石と赤石（註６）及び安山岩の棹石、漆喰塗遺構が検出された。次に、遺構ブロックごとに詳細を述べる。

①南北棟北端部（「第26図」参照）……二ノ丸大手門東西軸から約4.5m南側に、残存延長3.80mの東西にのびる赤石による棹石列を検出した。石材天端標高は西端で3.44m、中央で3.43m、東端で3.32mであり、大手門軸より約２度ずれている。東端の先は攪乱を受けているものの、あと１石伸びそこから南に直角に折れ、残存する同様の赤石棹石列につながるものと推定される。南北列の残存延長は1.35m、石材天端標高は3.32mである。東西列における石材仕上げ程度は明らかに南面が丁寧であり、南側が下がる段差を構成して



第26図　二ノ丸大手門～多聞櫓（北）周辺遺構図

第27図　二ノ丸大手門想定図

いたものと思われる。

また、南北列の東側で上面標高3.49mの礎石１石を検出しており、赤石矩折れ部を入り隅とするように、地盤が造成されていたことが伺える。

南北列石の下層には、天端標高3.11～3.16mの３列からなる安山岩棹石列を検出した。西列の残存状況は悪いが、中央列は延長3.70m、東列は2.70m残存している。南半では漆喰遺構が付随し、列石遺構を被覆する部分もある。漆喰遺構は、最大幅1.7m、延長2.4m、標高3.07～3.15mの範囲に広がっているが、南側には同様の漆喰が分布しており、これらと一連のものと思われる。

東西軸列石の南側は、溝状の落ち込みの中に多量の栗石混じり土が約40cm堆積している。

二ノ丸大手門東西軸と並行して、約7.2m南側に小型の礎石を３石とこれと直交する東端南北軸に礎石１石と束石１石、合計５石を検出した。礎石は45～70cm内外の自然石で、上面標高は東西列東から3.32m、3.27m、3.19m、北のはり出しが3.21mである。礎石間隔は、東西軸が約1.6m（約5尺4寸）と3.3m（約11尺）、南北軸が約2.1m（約6尺9寸）である。（第26図のＡライン参照）

さらに、先の栗石混じり土の下部から、礎石を３石検出した。それらの上面標高は西端から時計回りに2.96m、2.99m、2.94mであり大手門礎石より低い。この３石を矩折れに結ぶと、大手門軸と約５度ずれる。礎石間隔は、東西軸が約2.0m（約6尺6寸）、南北軸が約2.4m（約7尺9寸）である。（第26図のＢライン参照）

②南北棟中央部（「第28図　多聞櫓周辺遺構図（中～南）」参照）……南北に並ぶ１列の礎石列と、それと直交する３列の束石列を検出した。礎石列は４石からなり、45～80cm内外の自然石である。上面標高は、北から3.21m、3.23m、3.24m、3.30mであり、軸線は大手門軸線と等しい。束石列は北から２石、３石（うち１石は赤石）、１石からなり、その上面標高は3.30～3.32mにあり、礎石群と一致する。礎石間隔は北から約1.9m（約6尺3寸）、約1.9m（約6尺3寸）、2.0m（約6尺8寸）である。

③南北棟南端から東西棟矩折れ部（「第28図」参照）……漆喰遺構と大型の棹石列、南北の礎石列、礎石抜き取り痕跡を検出した。漆喰遺構は、北端部と異なり幅30～40cm内外、階段状に折れ曲がりながら延長約6mと細長く広がっている。標高は3.05～3.12mである。大型の棹石は、建物開口部の敷居石と思われ、その場合、石材加工程度から北側が室内側となろう。上面は平坦に精加工され、西端には「ほぞ」と思われる加工痕も残る。上面標高は、3.32～3.34mである。

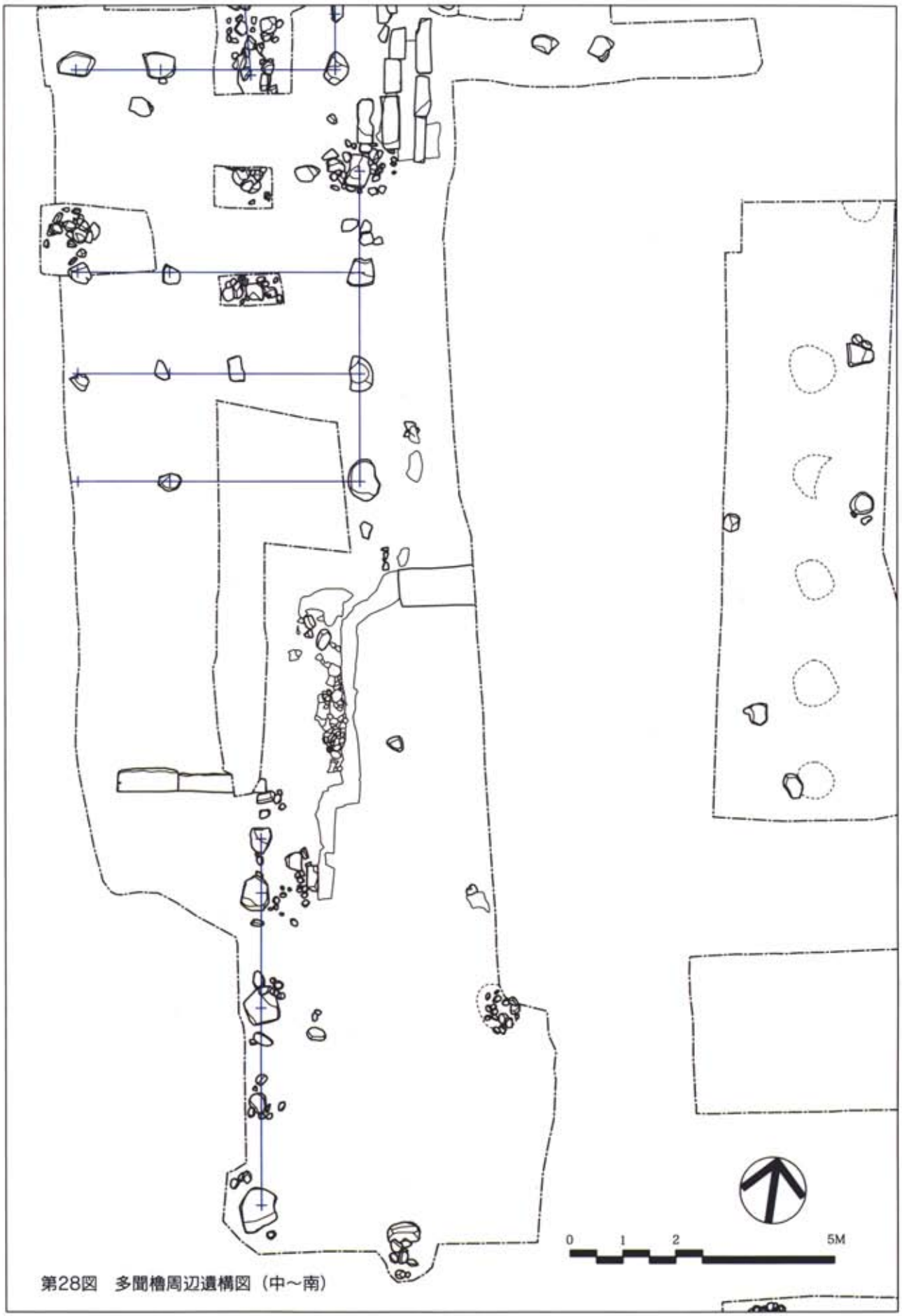
礎石列は４石からなり、北から約40cmの自然石、約65cmの自然石、約70cmの自然石、そして約75cmの自然石である。上面標高は、北から3.27m、3.35m、3.20m、3.17mである。４石の軸線は暴れがあるものの、概ね大手門軸線と等しい。礎石間隔は約1.0m（約3尺4寸）、約2.2m（約7尺2寸）、約3.7m（約12尺3寸）である。

礎石抜き取り痕跡は礎石列の約4.6m西側で１穴検出した。堀方直径が約80cmあり、15～20cmの玉砂利が充填され、佐賀城本丸跡で多数検出した礎石抜き取り痕跡の類似している。堀方直径から約60cm程度の礎石が推定される。

④東西棟部（「第29図　多聞櫓周辺遺構図（東）」参照）……瓦敷き遺構、赤石棹石と漆喰遺構からなる溝状遺構、礎石群、礎石抜き取り痕跡を検出した。瓦敷き遺構は、割瓦が堆積しており、その中に大量の炭が混在している。検出上面標高は、3.35m前後である。

溝状遺構は、赤石による棹石と漆喰遺構からなり、棹石を壁に、漆喰敷きを底面に溝を構成している。溝は調査区内で直角に折れ、東側が幅50cm、深さ15cm内外、西側が幅40cm、深さ18cm内外であり、棹石の上面標高は3.25～3.30m、漆喰標高は3.06～3.10mである。

礎石群は50～70cm内外の自然石で、２石を検出した。上面標高は3.40m、軸線は大手門軸線から5.5度ずれる。礎石間隔は約4.0m（約13尺）である。



第28図　多聞櫓周辺遺構図（中～南）

礎石抜き取り痕跡は２穴を検出した。西側の堀方は不明瞭で直径は不明であるが、15～20㎝の玉砂利が多数充填されている。東側の掘形直径は約65㎝で、少量の15～20㎝玉砂利が残存していた。掘形直径から40㎝程度の礎石が存在していたものと推定される。

⑤多聞櫓想定位置での遺構詳細は上記のとおりであるが、これら遺構群を分間絵図に見られるような一連の建物遺構として整理・論考するまでは、残念ながら今回の調査では至らなかった。ただし、遺構の時期差については、礎石高さや軸線の傾き等から以下のように推定した。

絶対時期基準を④東西棟部で検出した炭に求め、これを明治7年の火災跡（３度目の火災）とした。この上部にある赤石竿石を伴った漆喰遺構は明治以降と推定され、漆喰遺構に被覆される安山岩の竿石とこれらと同レベルである標高3.3ｍ前後の礎石が、明治7年の火災で炎上した嘉永5年再々建の佐賀城最後の第３期建物群のもの、さらにこれらの遺構群の下層標高3.0ｍ前後で検出した礎石が、享保火災後に再建され、天保年間に焼失した第２期建物群と推定される。二ノ丸大手門は、天保の火災で焼け残った（註７）とのことであるから、残存する大手門礎石は第２～３期を通してのものであり標高3.1ｍ前後と、第２期建物群の標高との整合性も注目される。

遺構は確認できなかったが、さらに下層には慶長年間に建てられた第１期建物群の遺構が存在する可能性がある。なお、佐賀城本丸における慶長期建物群（二ノ丸第１期相当）と天保期建物群（二ノ丸第３期相当）の標高差は30～40㎝である。また、上記推論を遺構図に明示したものを「第30図　多聞櫓周辺全体遺構図」に示した。

(3)式台玄関想定位置　標高3.46ｍ（現地表面下約10㎝）にて１個の礎石を検出した。礎石は正方形に削り出され、一辺が80㎝内外と大型である。周辺は後世の鉄筋コンクリート建物により破壊されていたため、関連する礎石は発見できなかった。しかしながら、礎石形状は本丸式台玄関礎石と類似し、「諸御手数録」にもこの地点に大手門から延石でつながれた式台が描かれているため、二ノ丸式台建物と推定した。「諸御手数録」によると、正面玄関はここより北側と推定されるため、脇玄関等の礎石ではないだろうか。

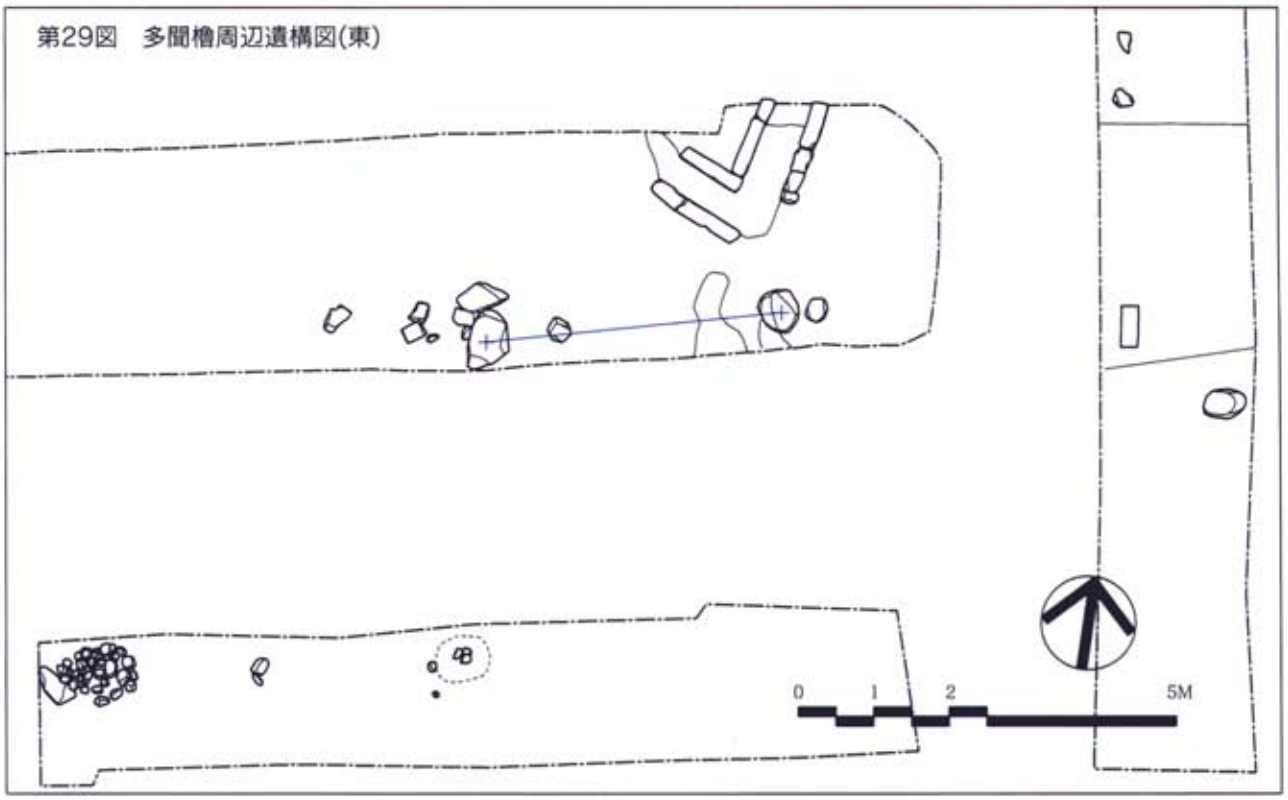
(4)その他(木枠遺構群、礎石抜き取り痕)　標高2.7ｍ前後から大量の木片、瓦辺、杭、そして四角に組んだ３組の木組み遺構を検出した。四角筒状に組まれた木組み板は長さ約70㎝、内辺が20～25㎝あり、木組み内部を除去したところ、赤石を砕いたものが底部に敷き詰めてあることが判明した。(「第31図　木組み遺構群図」参照)

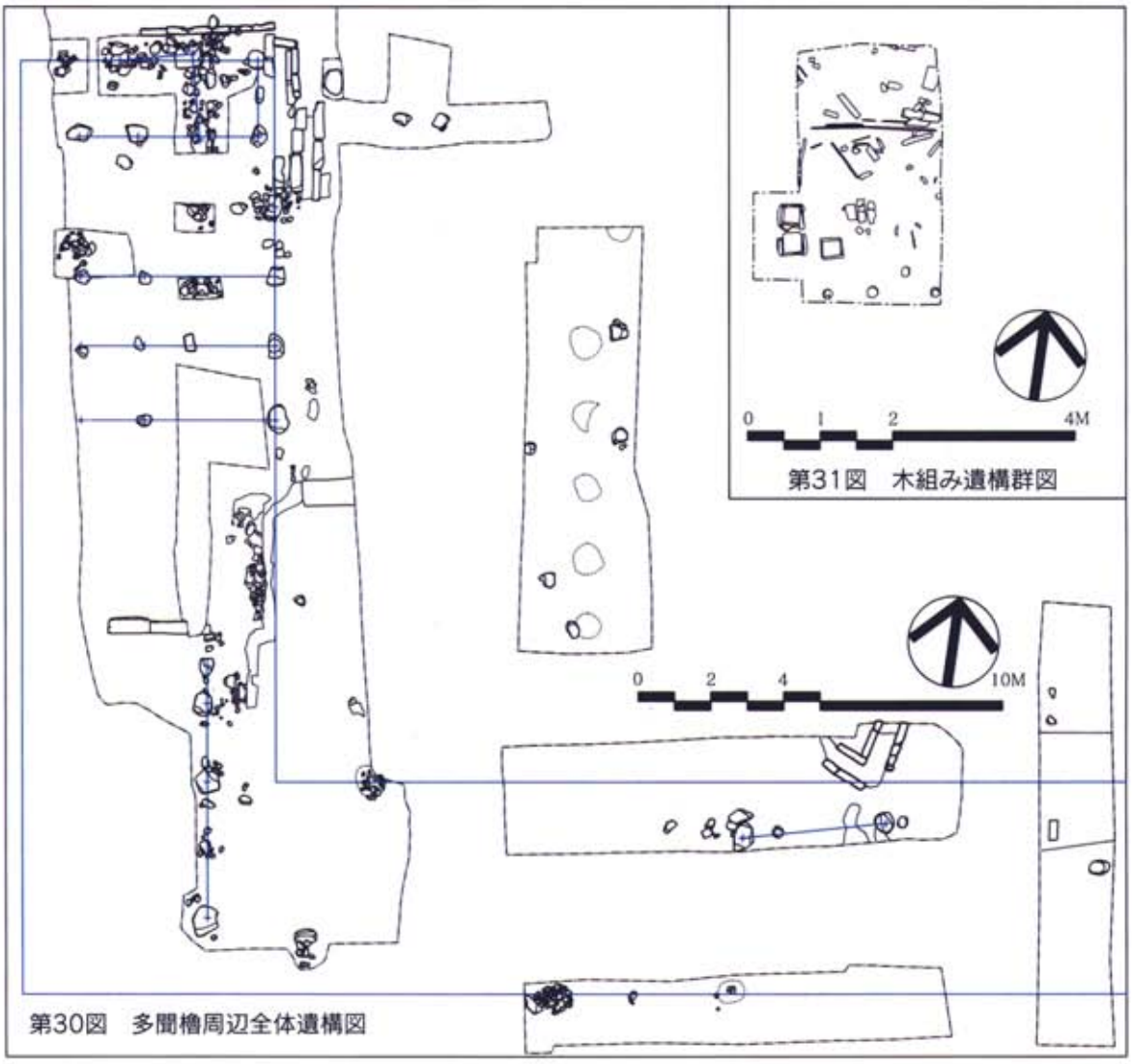
また、多聞櫓南北棟部分の東８ｍに５穴の土こうを検出した。これらは礎石抜き取り痕跡と推定され、直径70～90㎝で大手門軸線と平行に直線に並んでいる。検出面の標高は、3.14～3.20ｍである。先の「諸御手数録」には、この部分は式台前広場（空地）であるため、検出標高から、明治以降の可能性が高いと思われる。

まとめ　今回の調査では、佐賀城二ノ丸において初めての建物跡遺構を検出し、歴史資料との整合性を検討するに至ったこと、火災遺構を検出したことにより、歴史資料の火災記述が裏付けられたことが特筆される。特に二ノ丸大手門は、礎石の発見により建築学上の具体的検討に向けた貴重な資料となった。多聞櫓推定礎石は、遺構構成が複雑で、建物形状を推定するところまでは至らなかったが、石垣や基壇等の高まりを造成することなく、曲輪と同一平面上に配置されており、本丸周囲や天守台等を除いては、佐賀城内が大規模な造成高低差を設けることなく、構成されていたことを示す資料として注目される。式台推定礎石は、僅か１石の検出であるため、今後の調査に委ねる部分も多いが、礎石に本丸式台と同等の加工が施されていたことから、本丸と同等程度の仕上げ程度をもった建物であったことが類推される。

今回の調査地点は、駐車場造成予定地であり、佐賀城本丸整備と異なり、今回の調査によって得られた所見を元にした復元・整備等は行われない。しかし、検出した遺構を損傷することのないような駐車場計画が立案され、遺跡の保存と活用の調整が図られた。今回の調査範囲は、二ノ丸全体の10%程度であり、二ノ丸大手門から式台にいたる前庭空間にも当たったため、検出遺構は少なかったが、今後の周辺調査の参考となると共に、調査結果の蓄積により、二ノ丸遺構の解明が進むことが期待される。

第29図　多聞櫓周辺遺構図(東)





第31図　木組み遺構群図

第30図　多聞櫓周辺全体遺構図

註1）　天保6年(1835)頃に描かれたと推定される、本丸御殿設計図。縦140cm、横124cm、鍋島報效会所蔵

註2）　作製年不明、佐賀藩御進物所編。鍋島報效会所蔵

註3）　慶長後期(1609～1614)に描かれた推定される、佐賀城全体図。縦97cm、横101cm。鍋島報效会所蔵

註4）　寛政8年(1796)年に描かれたと推定される、佐賀城全体図。縦156cm、横166cm。鍋島報效会所蔵

註5）　本丸の大手門、天保の火災後、1838年の本丸再建時に建設。国重要文化財。佐賀市城内二丁目所在

註6）　小城町二子山近辺で産出、安山岩質凝灰角礫岩、柔らかく加工性に優れるため、江戸時代中期から明治時代にかけて広く使用された。

註7）　城原鍋島家日記、白石鍋島家日記、蓮池鍋島家史料による

発掘調査状況

漆喰遺構検出状況

多聞櫓南北棟東礎石列検出状況

木組み遺構検出状況

図版3　佐賀城二の丸

(2)　川副町

調査対象地区名　　川副町早津江川水辺プラザ事業地区

調査対象地遺跡名　佐賀藩海軍所跡(佐賀商船学校跡)

調査対象地所在地　佐賀郡川副町大字早津江字元海軍所

調査対象面積　　２ha(調査面積1821㎡)

調査担当者　　佐賀県教育庁文化課　武谷和彦

調査対象地区の立地　佐賀藩海軍所跡(佐賀商船学校跡)は、佐賀郡川副町と佐賀郡諸富町に跨り所在する。今回の調査対象地区は、佐賀平野南部、有明海河口より約7km上流で筑後川が東西に分流する付近で、西流する方の筑後川水系早津江川西岸に位置し、堤防外側の標高3m前後の河川敷に立地する。当該地は、現存する絵図等の資料(鍋島文庫所蔵「三重津海軍所図」・「早津江商船学校敷地図」等)では、幕末期には舟入場、調練場、番所、製罐所、船渠等、佐賀商船学校時代には、体操場、校舎、石船等が描かれている。

周辺の遺跡及び内容　佐賀藩海軍所跡の周辺では、埋蔵文化財包蔵地としては北東側約500mに寺井城跡(諸富町・中世末～近世初期)が周知化されているのみである。しかしながら、佐賀藩海軍所跡に隣接する集落のうち川副町北早津江地区の中には、江戸時代の絵図や明治中期の地籍図等に記されている集落があり、海軍所に密接に関係した集落の存在が想定される。これまでに(平成14年度２月現在)佐賀藩海軍所跡・佐賀商船学校跡の調査は、調練場地区(１区)、役所・兵学校地区(２区)、舟入東側堤防(３区)、佐賀商船学校寄宿舎地区(４区)、製罐所・船渠部地区(５区)、調練場西側堤防(６区)等で実施している。

調査方法及び内容　調査対象地内に46箇所の試掘坑(T1～46)を設定し、重機・人力により掘り下げを行った。

絵図等で舟入が描かれている地区の東側堤防に設定したT1～T5・T10・11試掘坑では近世堤防盛土が確認された。堤防盛土は、全体的に硬質であるが、外側(T1・3・10)は内側(T2・4・5・11)に比べてよく締めてある状況が確認された。また、T3では堤防盛土下位で杭(径10㎝前後・丸杭・2本)が打ち込んである状況が確認された。

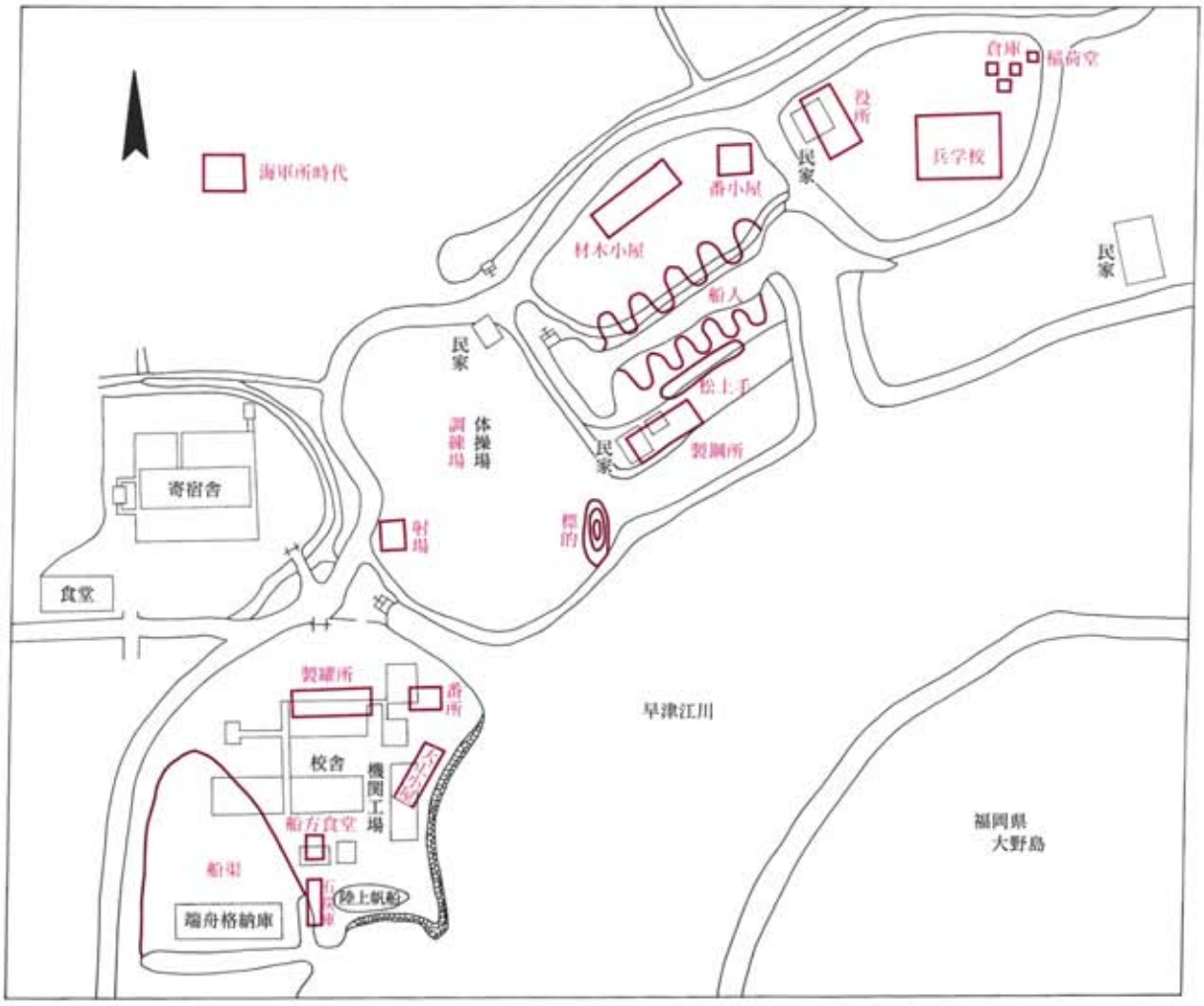
舟入東側、調練場北側の堤防に囲まれた地区に設定したT6～9試掘坑では、近世造成盛土と杭群(一部列状?・径10～15㎝の丸・角杭)が確認された。杭の性格は不明であるが、造成作業等に関連するもの(補強・設計関係等の用途?)や、T7・8・9で確認された盛土中の杭のうち、3・4本で1群を形成しているものについては建物基礎(礎石等の下位部分の根固め?)等の可能性が考えられる。

調練場東部に設定したT12～15・34試掘坑では、近世造成盛土とそれに伴うものと考えられる杭群(列状?)が確認された。絵図で標的盛土が描かれている場所付近と推定されるT12試掘坑では、盛土中に周辺盛土では確認されなかった砂層が部分的に混じっている。1区で確認された竹柵(しがらみ)遺構の延長線上に設定したT34試掘坑では、竹柵遺構は明瞭に確認されなかったが、竹が1本のみ盛土中に打ち込まれている状況が確認され、また、試掘坑北東部では盛土中に乱雑に竹の集中する部分が確認された(廃棄したものか?)。竹柵状遺構は、T34試掘坑周辺では断続的に延長もしくは延長部区画変更等の可能性がある。

T16～27・46試掘坑は、絵図では、製罐所、番所等が描かれている地区に設定した。全体的に、近世造成盛土が確認されているが、商船学校時代に広く整地化されている状況が確認され、後世(近代～)において上位部分(近世上位面)はある程度削平されているものと考えられる。また、河川側に近くなるにつれ、上位部分は主に近代以降の廃材(切石含む)を多く含む盛土が厚く堆積している。また、T46では、商船学校校舎等に関連するものと推定される木材が多量に投棄された状況を呈した廃棄坑が検出された。現況で周辺より一段(0.3～0.5m)高くなっているT24試掘坑周辺は、現代において廃棄場(コンクリート塊等の廃材)として利用された場所で、各所に廃棄坑が設けてあり、近世造成盛土は部分的に大きく掘削されている。T25～27試掘坑周辺は、現代において畑として利用した際にも削平を伴う整地化が行われたものと推定される。近世期に属する主な遺

第32図　川副町・諸富町佐賀藩海軍所跡（佐賀商船学校跡）位置図(1/50,000)

第33図　川副町佐賀藩海軍所跡(佐賀商船学校跡)確認調査対象範囲(1/10,000)



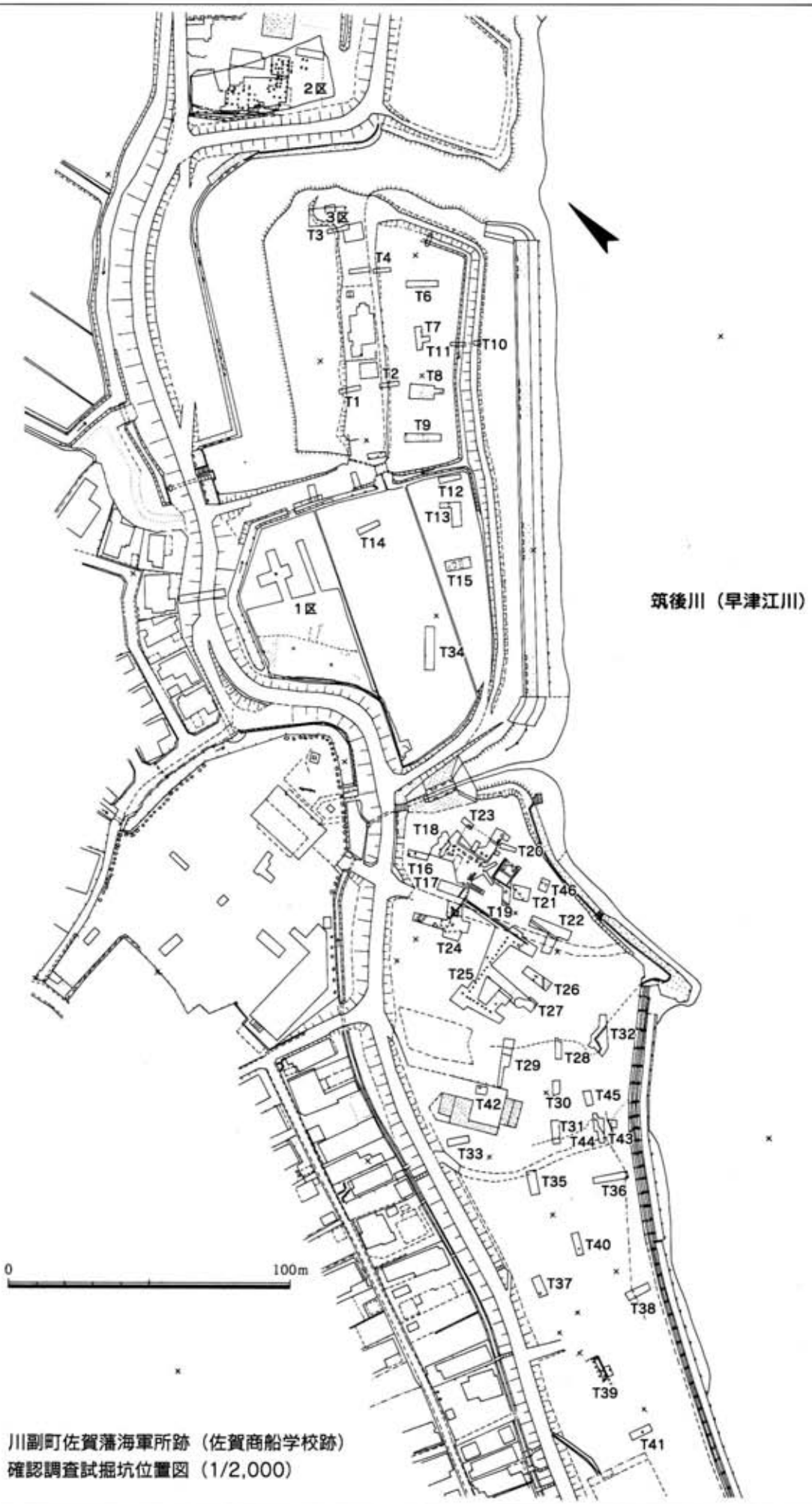
第34図　佐賀藩海軍所(佐賀商船学校)推定模式図
(鍋島文庫所蔵「早津江商船学校敷地図」・「三重津海軍所図」を基に作成)

構としては、近世造成盛土の他に、T18試掘坑で土坑1基(SK0002)、T24試掘坑で石組みの製鉄関連遺構(SX0009)1基、T26試掘坑で製鉄関連遺構3基(SX0007・0008・SX0023)、T27試掘坑で廃棄土坑1基(SK0018土坑)、その他、散在的に小穴数基(可能性あるものを含む)が検出された。出土遺物は、近世造成盛土のうち部分的に遺物の集中する層から陶磁器類を主体として他に鉄滓類・瓦(黒色・赤褐色)・赤石等が出土している。特に、T16試掘坑の陶磁器類を多量に含む盛土層(土層B13・14層)から、「海」(6点)・「船」(5点)・「～屋」(1点)・和歌文(1点・紫式部和歌)・字体不明(1点)の文字を書いた染付磁器皿・碗が、同様にT46試掘坑の近世盛土(6・7層)及び後世の攪乱坑等から、「海」(3点)・「船」(3点)・「役」(3点)の文字を書いた染付磁器小坏・皿・椀が出土している(2～11・14)。T16・T17試掘坑の出土遺物中には両試掘坑間において接合資料がある(3点＝土師質土器・瓦質土器焜炉？・陶器)。他にT16・17試掘坑の近世造成盛土中及びT22試掘坑の表土中から鍋島藩窯産の染付磁器皿(19世紀中頃＝幕末)が計4点(12・13)、T17試掘坑の9層から17世紀後半の肥前産の染付磁器皿1点(芙蓉手・17)、T46試掘坑の近世造成盛土中から17世紀前半の染付磁器皿1点、T22試掘坑の表土中から17世紀前半の景徳鎮産の染付磁器皿1点(15)が出土している。製鉄関連遺構からは鉄(銅)滓類が多く出土し、SX0009からは染付磁器碗小破片２点(1・19世紀～中頃)等、SX0007から染付磁器碗1点(19世紀～中頃)、坩堝等が出土している。また、SK0018土坑からは坩堝、石炭、多量の鉄滓等が出土している。その他、時期的には不明瞭であるが、T18試掘坑１・２層から石製鋳型(製品不明)、T29試掘坑近代造成盛土中から磁器製鋳型(製品不明)が出土している。商船学校に関連する遺構としては、各所において当該期の造成面が確認された他に、T16から鉄塔基礎(瓦片・磁器片を多く含むコンクリート)、T18から池状遺構(聴き取り調査による・三和土)、T19試掘坑から井戸(三和土)、T26試掘坑から土管、T17～19試掘坑、T22～25試掘坑からコンクリート建物基礎、布掘基礎(割石・瓦・礫を多く含む)等が確認されている。T25試掘坑で確認した建物基礎は、平面円形状の小穴に砂を詰めたもので、出土遺物が無く時期的判断は困難であるが、絵図・写真資料等から商船学校時代においてT25試掘坑周辺に校舎が建てられていたことが推定され、また、確認された商船学校の建物基礎軸との同一性が高く商船学校に関連する建物遺構である可能性が高い。

T29～33・42～45試掘坑を設定した地区周辺は、絵図では船渠部が描かれている場所と推定され、現況においても周辺に比べて凹地状になっている。T32・43試掘坑等では、河川側は現代(戦後?)における埋め立てが広範囲において確認され、埋土中には石垣(石船?)等に使用したと考えられる石材が多量に含まれていた。T32試掘坑では、現況石垣の延長部と推定される石垣と張り出し状の石垣が確認された。石垣は東西方向部分では3段の谷積み(間知石)で下部で胴木が検出され、張り出し部は1～３段の布積みで下部で胴木が検出された。張り出し先端部の上面は、セメントモルタルで階段状に構築されており、先端部の河川側には杭が複数打ち込まれてある状況を呈しており船着場(桟橋)としての利用が推定される。また、石垣の裏込には、商船学校の建物基礎と考えられる遺構に用いられている割石と比較的新しい時代(近代？)の所産と考えられる瓦が用いられており、検出した石垣は近代以降(佐賀商船学校時代か?)に構築された可能性が高い。T28・29・31・44試掘坑では船渠部への落ち際が確認された。T44試掘坑では張り出し状の構造が確認された。T32・44試掘坑は、船渠部の入口部分周辺に、T30・33・42・45試掘坑は船渠部内にあたるものと考えられる。T33試掘坑では1～1.5m程度の厚さで石炭を多量に含む層(近代の陶磁器類を含む)が確認され、船渠部は現堤防下まで延長する可能性があり、また湧水が著しかった。船渠部より南側に設定したT35～41試掘坑では、後世による造成・削平が部分的に認められるものの、近世造成盛土は調査対象範囲の最南部付近まで確認されており、海軍所の造成範囲は現時点では不明瞭である。また、T37試掘坑では近世期の埋甕(SX0022・19世紀～中頃)が検出されている。

所　　見　今回の確認調査における主な調査成果を以下に挙げる。

・近世期堤防盛土・造成盛土の確認



第35図　川副町佐賀藩海軍所跡（佐賀商船学校跡）
確認調査試掘坑位置図（1/2,000）

調練場以北の造成盛土・堤防盛土に関しては、出土遺物が少なく詳細な造成・築堤時期等については不明瞭であるが、製罐所地区付近の造成盛土に関しては、出土遺物から幕末期(19世紀中頃)におけるものと考えられる。盛土は、基本的に黄灰色系の粘質土のものであるが、製罐所地区及びその周辺においては多量の砂を用いており、特にT26試掘坑では砂と粘質土を交互に盛ったものであった。また、場所によっては盛土中に多量の遺物(陶磁器類・鉄滓類等)や焼土・炭化片を含む層が存在する(T16・17試掘坑等)。絵図には描かれていない対象範囲の最南端部でも、近世造成盛土と一部で遺構(T37試掘坑＝SX0022埋甕)が確認されており、海軍所の敷地は広範囲に及ぶものと推定され、佐賀藩海軍所は拡張性を備えたものであった可能性等も考えられ、今後の調査においては注意が必要である。また、各所で盛土中において杭が検出され、造成時における補強や設計に関する手法等が想定される。

・製鉄関連遺構の確認

今後、個別遺構の検討、出土遺物(鉄滓等)の詳細な分析等が必要であるが、海軍所においては船舶関係部品等の製造に係る一連の作業を行っていたこと等が推定され、近代化の初期段階における佐賀藩の技術的内容等を具体的に示す重要な遺構と考えられる。

・船渠部の確認

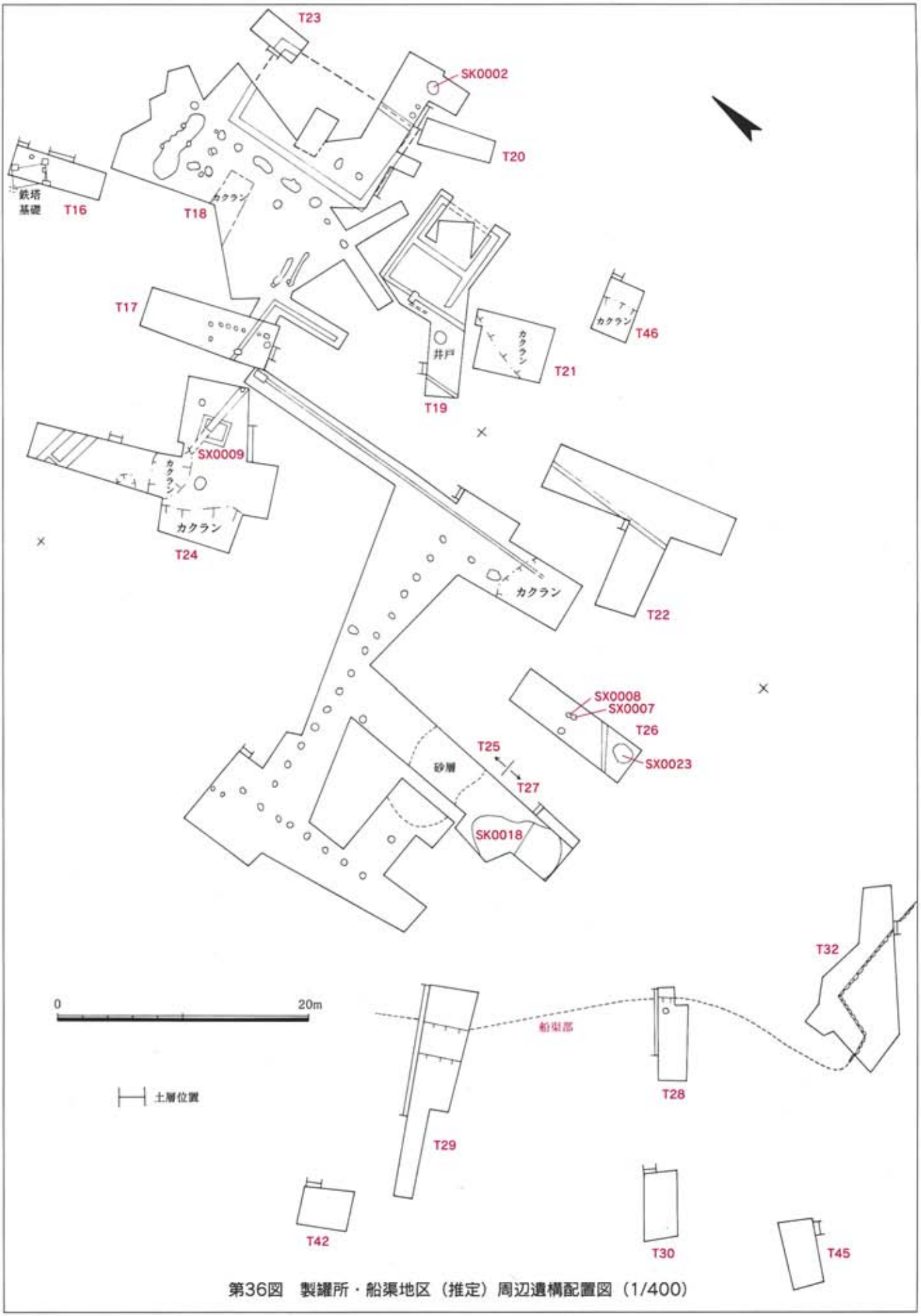
当時の船渠部の形態に関しては、潮汐作用や後世による改変等を考慮しなければならないが、位置的にはほぼ把握可能である。T33試掘坑は、船渠部内と考えられ、西側は現堤防下まで延長する可能性がある。今後の調査では、船渠部の正確な範囲・船渠部内の構造把握が必要である。

・「海」・「舩」・「役」等の文字染付磁器の出土

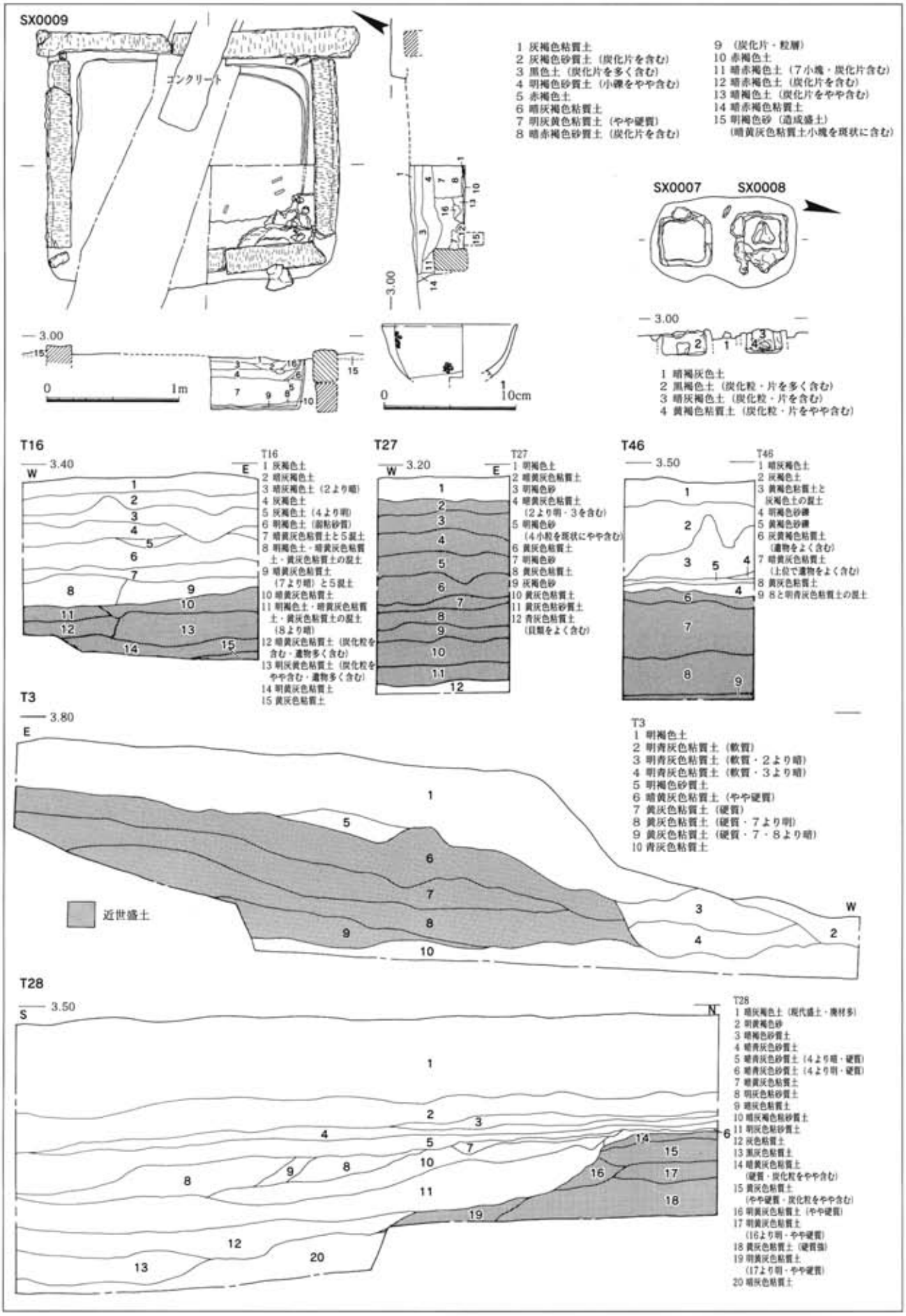
磁器そのものは肥前産の日用的雑器類(19世紀代～中頃主体)であるが、同一形態のものが複数出土していること等から、佐賀藩海軍所の公的備品として一定量が発注・生産されたことが考えられる。また、上記のようなことから、藩として海軍所の運営に積極的に取り組んでいたことがある程度裏付けられる重要な資料である。「海」・「舩」の染付磁器は、海軍所の属性等を考慮して示されたものと考えられ、佐賀藩海軍所の存在自体を端的に示す良好な資料である。「役」の染付磁器は、「役所」等の特定の機能場所(人)等を示すものとも考えられ、海軍所内における組織的構造の一端が窺える資料の可能性がある。今回出土した染付磁器は、性格的には佐賀藩海軍所の公的備品に用いられたものと考えられるが、個々に字体や文様等に特徴があり、銘々的使用にもある程度耐え得るものである。

今回の確認調査では、遺跡の上面は広範囲において後世(近代～現代)の改変を受けているが、多くの基礎的資料を得ることができた。遺跡は広範囲に及ぶことが確認され、佐賀藩海軍所としての区画範囲は現段階では不明瞭な部分が多い(※)。今後、今回の確認調査の結果を踏まえ計画的な調査が必要である。今後の主な課題としては、海軍所範囲の確認(北側・諸富町側を含む)、調練場東側堤防の遺存状況の確認、製罐所地区及びその周辺の状況確認、船渠部の正確な範囲・形態の確認、絵図資料では描かれていない箇所(特に船渠部以南)の状況確認、出土遺物(陶磁器類・鉄滓等)の詳細な調査等が挙げられ、また並行して文献資料の調査、幕末佐賀藩の技術的機関との比較検討等多くの課題がある。幕末期における蒸気船製造には多くの面で当時の先進的技術を必要としたものと推察されるが、佐賀藩海軍所では慶応元年(1865年)にある程度実用化に耐え得る蒸気船「凌風丸」を製造したこと等から、幕末佐賀藩の各種技術が集約されている場所とも考えられ、日本の近代化初期段階における佐賀藩の担った役割を考える上で重要な遺跡である。

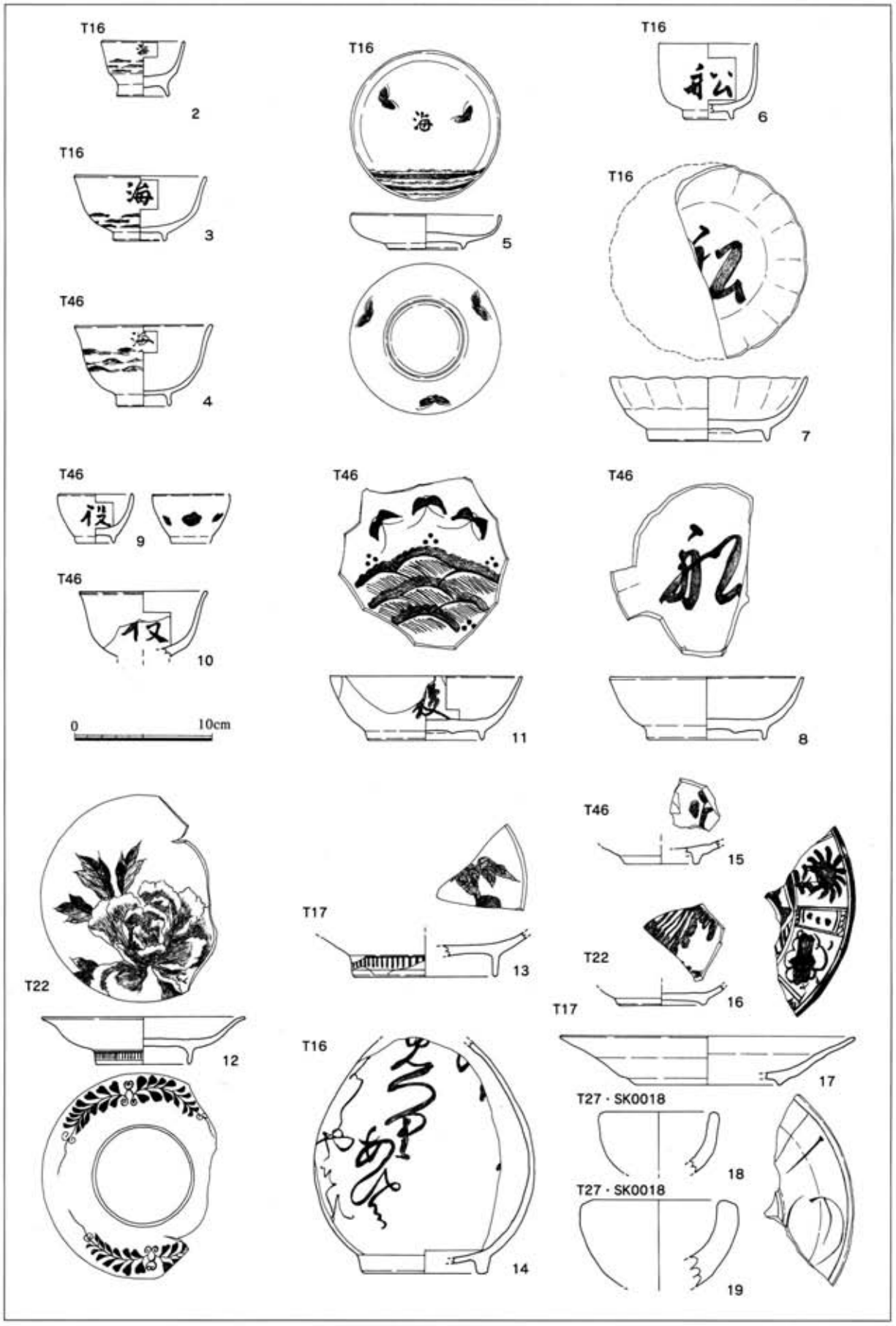
※川副町教育委員会が平成14年度に実施した確認調査により、現河川敷部分の造成盛土範囲の南限は船渠部より約200m南側までということが判明している。



第36図　製罐所・船渠地区（推定）周辺遺構配置図（1/400）



第37図　SX0007・0008・0009製鉄関連遺構（1/40）・SX0009出土遺物（1/4）
T3・16・27・28・46試掘坑土層断面実測図（1/4）



第38図　佐賀藩海軍所跡（佐賀商船学校跡）確認調査出土遺物実測図（1/4）
（2～17＝染付磁器・18・19＝坩堝）

表1　佐賀藩海軍所跡(佐賀商船学校跡)確認調査試掘坑一覧

試掘坑番号	面積(m²)	検出遺構等	主要出土遺物	時　期	備　　考
T1	14	堤防盛土	陶器壺(銅線補修)	近世	
		溝状遺構	陶磁器類・煉瓦・瓦	近・現代	
		表土(1層)	染付磁器(外底部「有48」染付)	近・現代	戦時(第2次大戦)統制下の資料。
T2	9.9	堤防盛土	なし	近世	
T3	12	堤防盛土	なし	近世	
		杭	木杭	近世	
T4	10.4	堤防盛土	陶器壺	近世	
T5	6.6	堤防盛土	なし	近世	
T6	26.6	造成盛土	なし	近世	
T7	23	造成盛土	なし	近世	
		杭	木杭	近世?	
T8	50	造成盛土	なし	近世	
		杭	木杭	近世?	
T9	36.4	造成盛土	染付磁器	近世	
		杭	木杭	近世?	
T10	3.4	堤防盛土	なし	近世	
T11	8.3	堤防盛土	なし	近世	
T12	15	造成盛土	瓦(赤・黒)	近世	
T13	36	造成盛土	染付磁器	近世	
		溝	瓦	現代	T15検出溝と同一溝か?
		杭	木杭	近世?	
T14	16.2	造成盛土	なし	近世	
T15	33.8	造成盛土	なし	近世	
		杭	木杭	近世?	
		溝・土坑	ガラス・瓦	現代	T13検出溝と同一溝か?
T16	16	造成盛土	陶磁器類・瓦・鉄滓・石炭　等多(鍋島藩窯製品含む)	近世	「海」・「艦」・「～屋」・和歌染付磁器出土。T17と接合資料有。(土師質・瓦質・陶器3個体分)
		小穴	なし	近世?	
		杭	木杭	近世	
		鉄塔基礎	瓦	近代	コンクリート(モルタル・瓦片含む)。
T17	41.2	造成盛土	陶磁器類・瓦・鉄滓　等多(鍋島藩窯製品含む)	近世	T16と接合資料有。(土師質・瓦質・陶器3個体分)
		杭	木杭	近世	
		建物基礎	なし	近代	コンクリート。商船学校校舎基礎?
T18	249.1	造成盛土	陶磁器類・瓦	近世	
		土坑	染付磁器・瓦	近世	SK0002。
		小穴	染付磁器	近世	
		建物基礎	染付磁器・瓦・モルタル・礫　多	近代	商船学校校舎基礎(校長室)?
		池	陶磁器類・瓦・赤石	近代	セメントモルタル。商船学校関係。
		(1・2層)	鋳型?	不明	近・現代遺物包含層中。
T19	68.8	造成盛土	陶磁器類・瓦	近世	
		井戸	陶磁器類・瓦・鉄・ガラス製品	近代	商船学校関係。
		建物基礎	陶磁器類・瓦・土管	近代	コンクリート。商船学校校舎(小使室)?
T20	10	造成盛土	陶磁器類・瓦	近世	上位は撹乱・削平。
T21	25.6	造成盛土	陶磁器類・瓦	近世	上位は撹乱・削平。
T22	77.2	造成盛土	陶磁器類・瓦	近世	上位は撹乱・削平。
		建物基礎	瓦	近代	商船学校校舎基礎。
		表土(1・2層)	景德鎮系磁器皿(17C前半)・「～所」染付磁器碗(18C末～19初?)　鍋島藩窯製品磁器(19C中頃＝幕末)	現代	
T23	8.4	造成盛土	なし	近世	
		建物基礎	染付磁器・瓦　多	近代	商船学校校舎基礎(校長室)?

T24	117.2	造成盛土	なし	近世	
		製鉄関係遺構	染付磁器・鉄滓	近世	SX0009。石組炉。
		小穴	なし	近世?	礎石・製鉄遺構関連?
		建物基礎	陶磁器類	近代	商船学校校舎基礎。
T25 (T27と連結)	358	造成盛土	染付磁器(把手)	近世	
		杭	木杭	近世	
		土坑	木片	近代?	
		建物基礎	なし	近代?	小穴内細砂。
T26	34.8	造成盛土	陶磁器類・瓦	近世	
		製鉄関係遺構	鉄滓・炭化片・瓦・坩堝	近世	SX0007・0008。SX0025。
		小穴	陶器・鉄滓・炭化片	近世	
		土管	土管	近代?	商船学校関係?
T27 (T25と連結)	38	造成盛土	陶磁器類・瓦	近世	
		廃棄土坑	陶磁器類・瓦・鉄滓・坩堝・鞴羽口?・土製鋳型?・石炭　等多	近世	SK0018。
T28	15	造成盛土	陶磁器類・瓦	近世	
		杭	木杭	近世	
		船渠部落際		近世	
T29	45.5	造成盛土	瓦・鉄滓	近世	
		船渠部落際		近世	
		造成盛土(10層)	鋳型?	近代	
T30	13.8	船渠部内		近世	
T31	24.4	造成盛土	なし	近世	
		杭	木杭	近世	
		船渠部落際		近世	
T32	56.1	造成盛土	瓦	近世	
		石垣	瓦	近代?	船渠部入口付近?
T33	20	船渠部内?	陶磁器類・石炭多	近世?	内部盛土自体は近現代。
T34	54.6	造成盛土	瓦・竹	近世	
T35	29.8	造成盛土	陶磁器類・瓦	近世	
		杭	木杭	近世	
T36	28.8	造成盛土	焼土塊	近世	
		杭	木杭	近世	
		河川側落際		近世	
T37	22.3	造成盛土	陶磁器類・瓦	近世	
		埋甕	陶磁器類・甕(19C代)	近世	SX0022。
T38	25.5	造成盛土	なし	近世	河川側落際。
T39	22.4	造成盛土	陶磁器類・土製品(十能?)・赤石	近世	
		建物基礎・礎石	陶磁器類	現代	
T40	21.3	造成盛土	陶磁器類・瓦	近世	
		小穴	炭化片	近世?	
T41	20.8	造成盛土	瓦	近世	
		小穴	なし	近現代?	
T42	12	船渠部内		近世	
		杭	木杭	近世?	
T43	6.3	旧河川内			
T44	29.3	造成盛土	なし	近世	船渠部入口付近?
T45	14.9	船渠部内	なし	近世	
T46	12.8	造成盛土	陶磁器類(初期伊万里含む)	近世	「海」・「船」・「役」染付磁器出土。
		廃棄土坑	陶磁器類・木材・煉瓦・瓦	近・現代	「海」染付磁器出土。

計　1821.5

表　採	寛永通寶	T38周辺。
	砲弾	T39周辺。近代?
	陶磁器類	各所。「船」(近世)・「商」(近代)染付磁器含む。
	煉瓦・瓦	各所。

1　佐賀藩海軍所跡（佐賀商船学校跡）遠景（北東から）

2　佐賀藩海軍所跡（佐賀商学校跡）主体部周辺（上＝南西）

図版４　佐賀藩海軍所跡（佐賀商船学校跡）①

1舟入地区導入路近景（北西から）

2舟入地区東側近景（北から）

3舟入地区東側近景（南西から）

4舟入地区東側堤防内近景（南西から）

5調練場地区近景（北から）

6調練場東側標的推定地（北西から）

図版5　佐賀藩海軍所跡（佐賀商船学校跡）②

1 T1試掘坑　堤防盛土
（東から・舟入地区東側堤防外側）

2 T7試掘坑　杭群
（南西から・舟入地区東側堤防内）

3 T9試掘坑　杭群
（南東から・舟入地区東側堤防内）

4 T8試掘坑　杭群
（南東から・舟入地区東側堤防内）

5製罐所地区近景（北から）

6船渠部南側地区近景（南から）

図版6　佐賀藩海軍所跡（佐賀商船学校跡）③

1 T17試掘坑　盛土中杭列
（北から・製罐所地区）

2 T18試掘坑
商船学校校長室建物基礎（北から）

3 T18試掘坑
商船学校建物基礎（北から）

4 T18試掘坑
商船学校池遺構（西から）

5 T18試掘坑　SK0002土坑（西から）

6 T19試掘坑
商船学校小使室周辺（南西から）

図版７　佐賀藩海軍所跡（佐賀商船学校跡）④

1 T19試掘坑
商船学校井戸遺構（南西から）

2 T24試掘坑
SX0009製鉄関連遺構周辺（南西から）

3 T24試掘坑
SX0009製鉄関連遺構（南西から）

4 T25試掘坑
商船学校建物基礎（東から）

5 T18試掘坑
SK0007・0008製鉄関連遺構他（南から）

6 T26試掘坑
SX0007(左)・0008(右)製鉄関連遺構（東から）

図版8　佐賀藩海軍所跡（佐賀商船学校跡）⑤

1 T26試掘坑
SX0023製鉄関連遺構（西から）

2 T27試掘坑　SK0018土坑（北から）

3 T27試掘坑　造成盛土土層（南から）

4 T28試掘坑　船渠部落際（南から）

5 T32試掘坑　石垣護岸（東から）

6 T37試掘坑　SX0022埋甕（北西から）

図版9　佐賀藩海軍所跡（佐賀商船学校跡）⑥

(3) 東脊振村

第39図　国道34号線拡幅(1)・田手川改修工事調査地区(2)位置図(1/50,000)

調査対象地区　国道385号拡幅工事事業

調査対象地所在地　神埼郡東脊振村大字大曲字前田

調査対象面積　2,723㎡（調査面積　500㎡）

調査担当者　東脊振村教育委員会　久保伸洋

調査期間　平成14年１月18日～平成14年２月７日

調査対象地区の立地　当該地（字前田）は、脊振山地の南麓裾部を南流する田手川によって形成されている谷水田に位置している。今回の調査地は標高約20～22ｍで、南にゆるく傾斜している。調査地の現状は水田である。調査地は、これまで遺跡の存在が知られていなかった場所で、今回の試掘・確認調査でその所在が明確になった。

周辺の遺跡及び遺跡の内容　周辺の遺跡としては、北東400ｍには古墳時代の生産遺跡と考えられる中ソリ遺跡が、北西400ｍには弥生時代の基地である西前田Ｂ遺跡がある。

調査方法　工事予定地の拡幅部分を中心に2×6m～3×10mの試掘坑を９ケ所設定し、調査を行った。

調査内容　調査対象地は水田で、基本層序は上から、耕作土20～15cm、その下の整地土が20～30cmの厚さがあり、その下には旧水田の堆積土や砂土が堆積している。調査の結果、試掘坑No.1、No.5、No.6、No.8において遺構・遺物が確認された。試掘坑No.1では弥生時代後期から古墳時代前期と見られる木製品と包含層を検出した為、試掘坑を拡張し確認調査を実施した（第１調査区）。確認調査区からは北東から南西に伸びる、幅7m、深さ0.5m程の大溝１条と、それに付随すると見られる溝跡を数条確認でき、木製品・木杭・矢板を検出した。試掘坑No.5でも落ち込みが確認されたために、試掘坑を拡張し確認調査を実施した（第２調査区）。深さ30cmほどの大溝２条を検出したが、第１調査区ほどの出土遺物はなく、木材が若干出土したのみである。試掘坑No.6・8では出土品はなかったが、溝跡らしき落ち込みが見られたので試掘坑を拡張し確認調査を実施した（第３調査区）。確認調査区からは弧状の浅い溝跡１条と東西方向の浅い溝跡を１条確認できた。弧状の溝跡からは弥生時代後期の土器がコンテナ１箱弱出土した。

所見・その他　第１～３調査区とも村主体試掘調査と併行して実施し、当該地区の埋蔵文化財の状況を総括的に確認することができた。当該地は従前、周知の埋蔵文化財包蔵地外であったので、今後は三津前田遺跡として周知する必要がある。調査状況から2ha程度の広がりを推定している。

調査対象地区　田手川河川改修工事事業

調査対象地所在地　神埼郡東脊振村大字大曲字字二ノ坪・一ノ坪

調査対象面積　2,200㎡（調査面積　60㎡）

調査担当者　東脊振村教育委員会　久保伸洋

調査期間　平成14年１月18日～平成14年２月15日

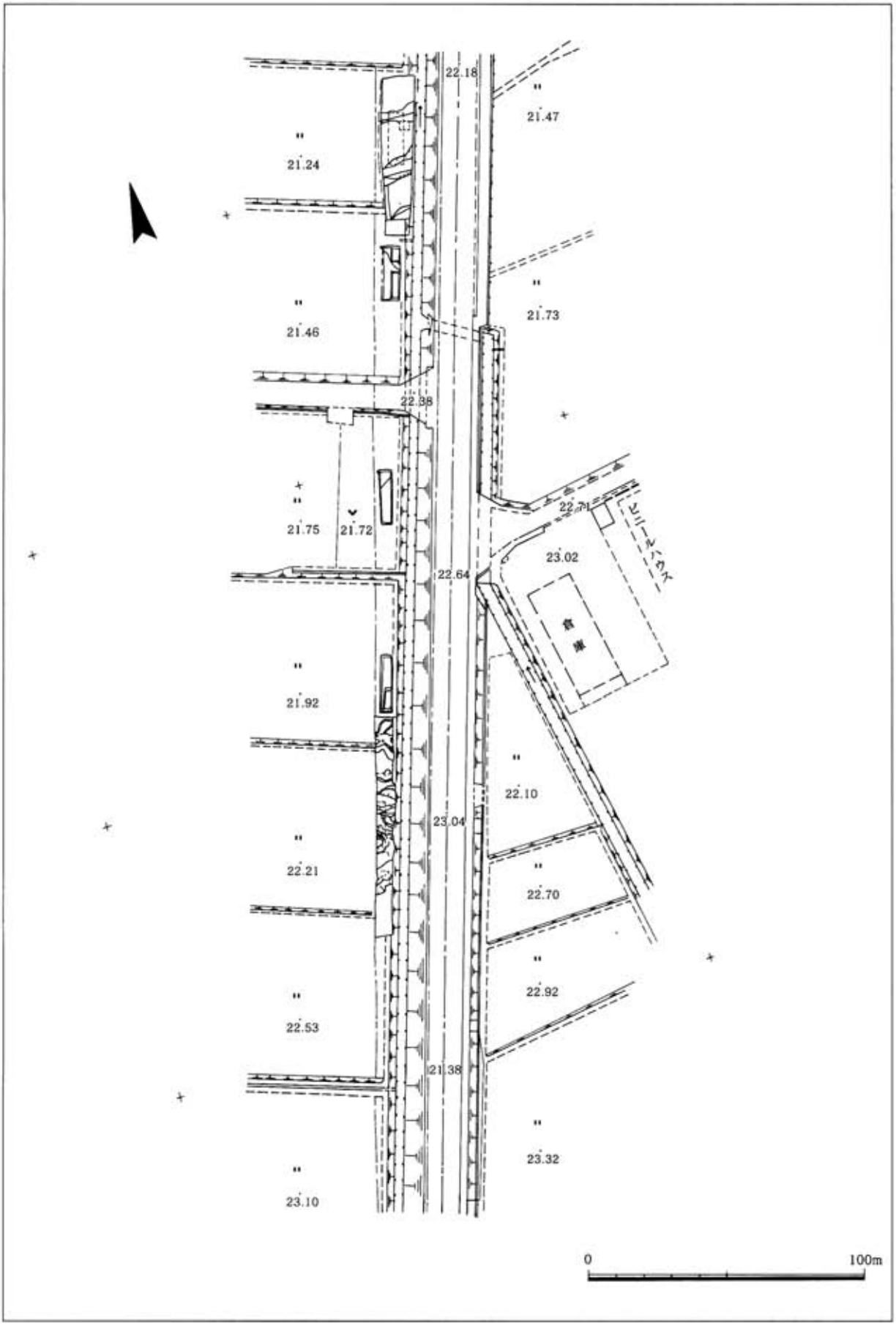
調査対象地区の立地　調査地は周知外（大曲二ノ坪遺跡の西方）で、脊振山地の南麓裾部を南流する田手川に形成されている谷水田に位置している。今回の調査地は標高は約12～13mで平坦である。調査地の現状は水田である、調査地は、これまで大曲二ノ坪遺跡の西方で、遺跡の存在が知られていなかった場所で、今回の試掘・確認調査でその所在が明確になった。

周辺の遺跡及び遺跡の内容　周辺の遺跡としては、西200mには中世から近世の生産遺跡と考えられる大曲二ノ坪遺跡が、西200mには弥生時代から奈良・平安時代の集落跡・墓地である吉野ヶ里遺跡がある。

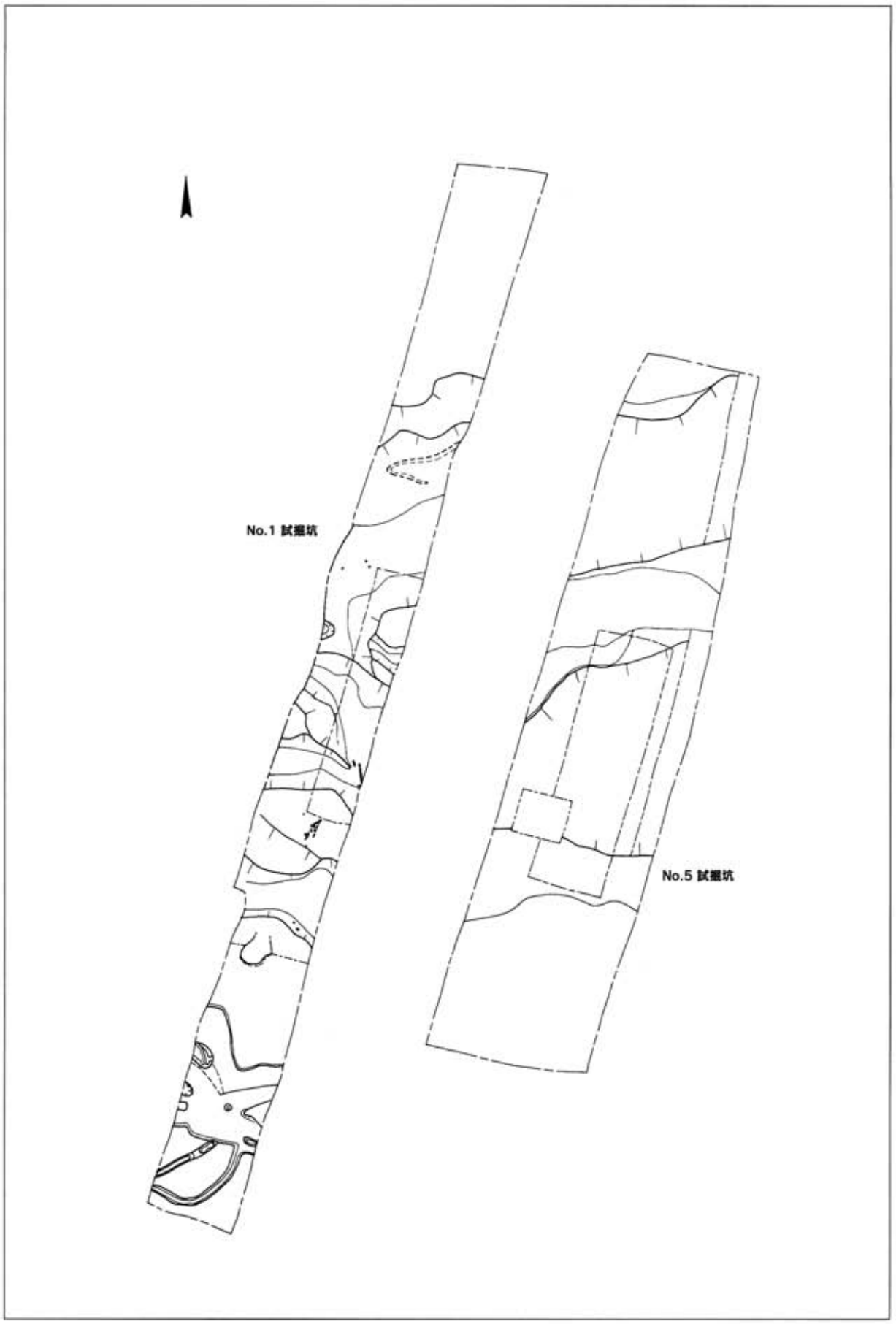
調査方法　３×20m～5×10mの試掘坑を６ヶ所設定し、調査を行った。

調査内容　調査対象地は水田で、基本層序は上から、耕作土20～15cm、その下の整地土が20～30cmの厚さがあり、その下には旧水田の堆積土や砂土が堆積している。検出遺構は試掘坑No.3～No.6において遺構・遺物が検出された。試掘坑No.3からNo.6にかけて近世の溝跡や陶磁器片が確認できたため、試掘坑を拡張し確認調査を実施した。確認調査区からは北部で田手川の旧河道と古墳時代の遺物包含層１ヶ所、中部から南部にかけて近世のものと見られる北から30°東偏した直線の溝跡を１条確認した。溝跡は深さ50cmほどで灌漑排水関係のものと見られる。出土遺物としては確認調査区の包含層からは古墳時代後期の須恵器・土師器がコンテナ２箱弱が出土し、遺構検出時に近世の陶磁器片が少量出土している。

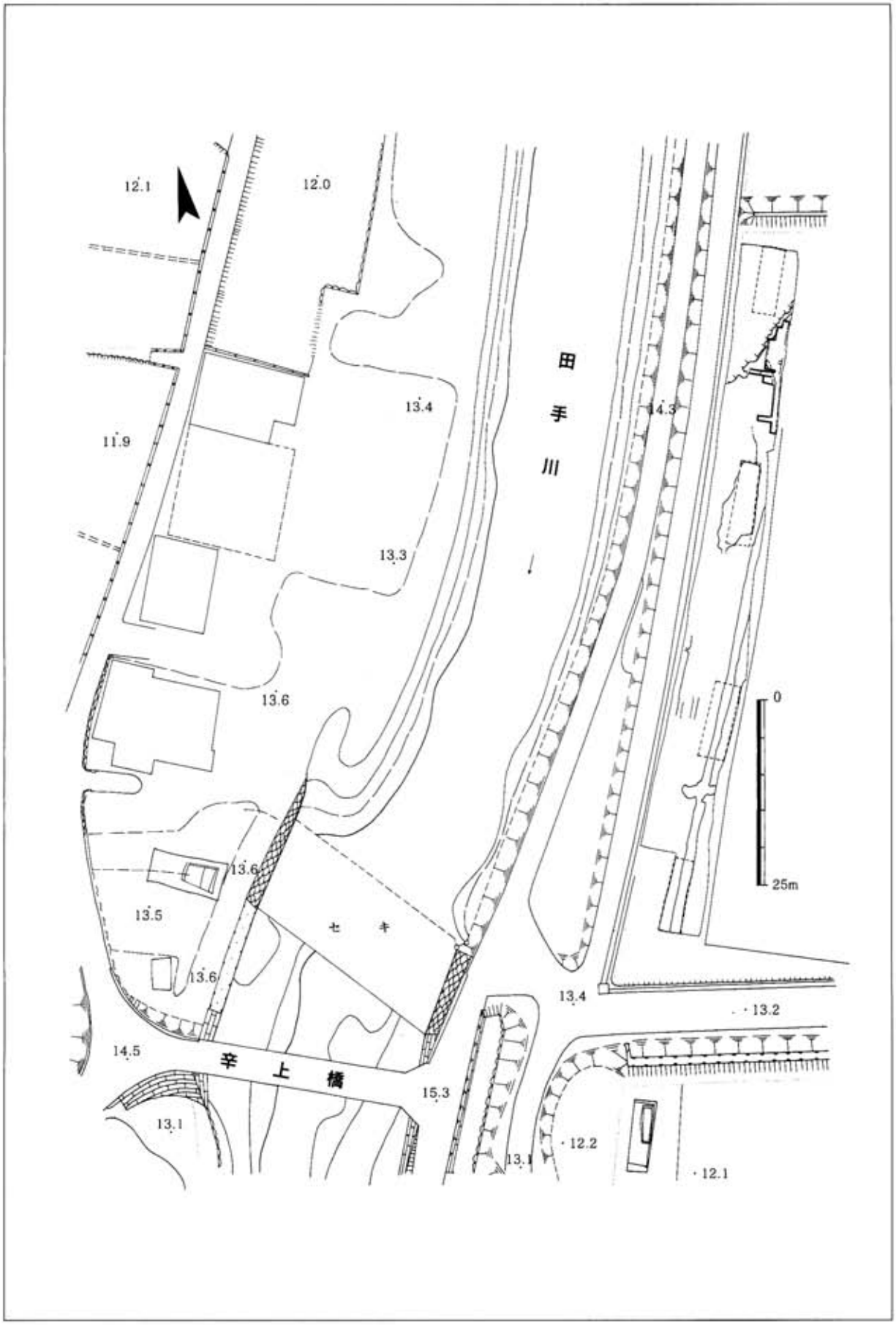
所見・その他　村主体の調査と並行して実施し、当該地区の埋蔵文化財の状況を把握することができた。当該地は従前、大曲二ノ坪遺跡の西方の周知の埋蔵文化財包蔵地外であったので、今後は大曲二ノ坪遺跡の一部として周知する必要がある。大曲二ノ坪遺跡は今回の調査状況から3ha程度の広がりを推定している。



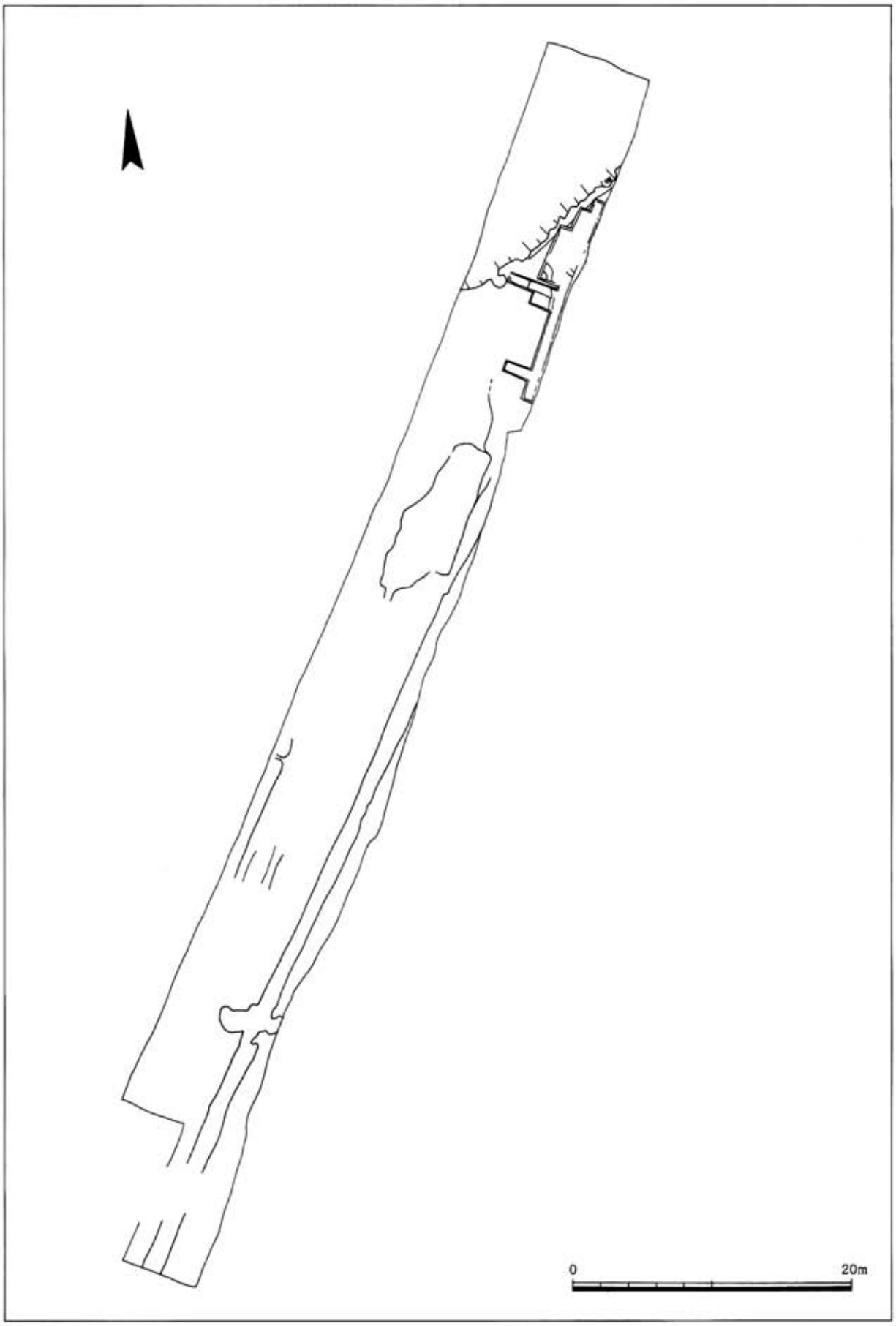
第40図　国道34号線拡幅トレンチ配置図



第41図　国道34号線拡幅遺構配置図(1/200)



第42図　田手川改修工事トレンチ配置図



第43図　田手川改修工事遺構配置図

国道34号線　木材等出土状況

同左

国道34号線　弧状溝

国道34号線　東西溝

田手川改修トレンチ全景(南から)

同北側遺物包含層

図版10　国道34号線拡幅・田手川改修工事

(4) 北方町

第44図　武雄福富線道路防災工事調査地区位置図(1/50,000)

調査対象地区　　武雄福富線　道路防災対策事業

調査対象地所在地　杵島郡北方町大字芦原字貝良木、山西

調査対象面積　　1,918㎡

調査担当者　　北方町教育委員会生涯学習課専門員　樋渡拓也

調査期間　　平成13年7月23日～8月13日

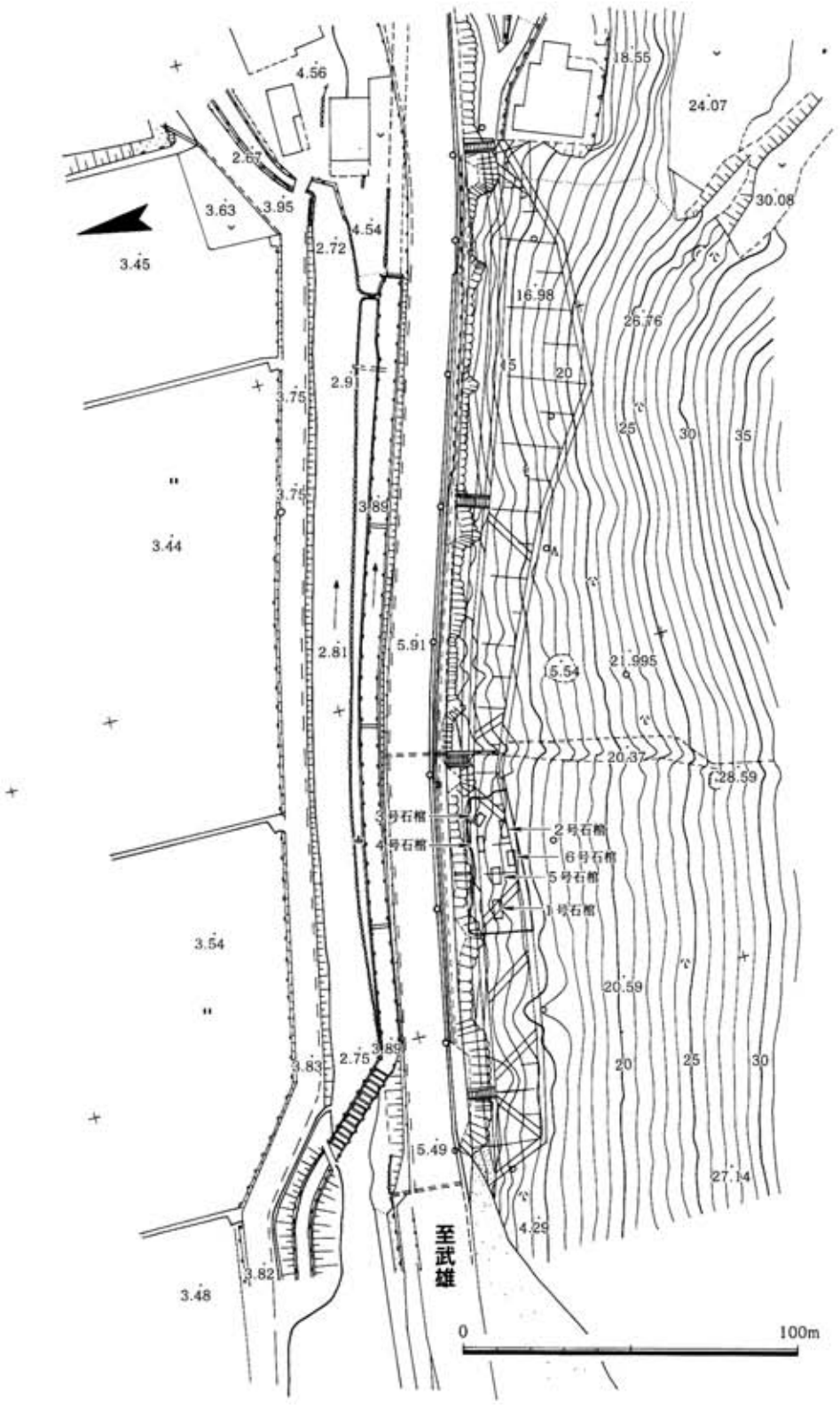
調査対象地区の立地　調査対象地は北方町の南部、鳴瀬山の山裾部分にあたり、北側には水田が広がり六角川が流れている。直下には、県道武雄・福富線が通っている。対象地の標高は約10～20mである。調査対象地は、現況では山林、竹林できつい傾斜面である。大正14年ごろの地籍図では、一部畑になっていた。

周辺の遺跡及び遺跡の内容　今回の調査地は貝良木遺跡及び山西古墳群として周知されている。貝良木遺跡は、弥生・古墳・奈良・平安・中世の遺物散布地として鳴瀬山の山裾から水田にかけて周知されている。山西古墳群は、古墳として鳴瀬山中腹から山裾にかけて周知されている。鳴瀬山山頂には、昭和61年に発掘調査がされた鳴瀬山頂古墳群が北方町から武雄市にまたがって所在し、他にも山中には江戸時代佐賀本藩領があった関係で鹿垣や農作物を守るための猪鹿防石塁が点在している。

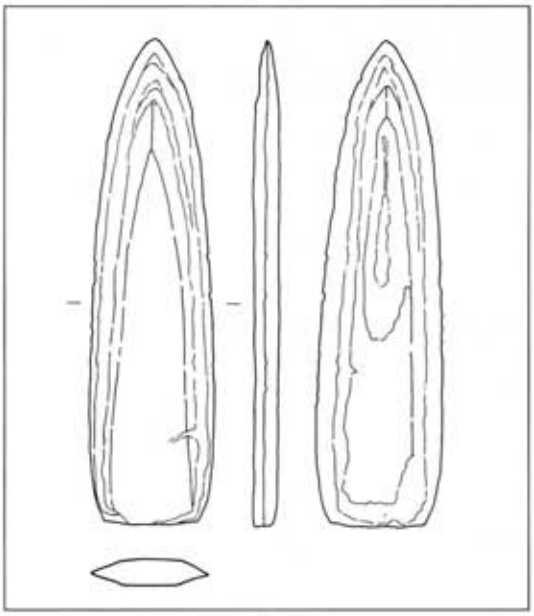
調査方法　対象地は、工事に先立ち確認調査を実施していたところで、その際の調査では遺構の存在は確認できていなかったが、実際に工事に着手したところ不明な遺構が見つかったとの連絡を受けて、現地を確認したところ、石棺の存在が判明し、その発見地点から範囲を広げて遺構の分布等の確認を行った。

調査内容　現場地形は、防災工事を行なうようなきつい斜面であり遺構は原地形より約70cm～1m程度掘削したところより出土した。連絡があった時点では、箱式石棺墓1基を確認していたが、重機及び人力による検出の結果、成人用5基・子供用1基の計6基の箱式石棺墓が確認された。掘り込みの跡は、石材の大きさにきっちりあわせた、厚みの薄い掘り込み跡であった。箱式石棺墓を作るときも、今回の工事と同じようにきつい斜面をフラットにして作ったようである。遺物としては、2号石棺墓周辺より磨製石剣が1本、6号石棺墓掘り込みより弥生土器破片が1片出土した。他に表採として土器片数点が出土。時代としては、掘り込み跡等より九州西北で箱式石棺墓が導入された時期とされる弥生時代後期後半頃のものと考えられる。

所見・その他　箱式石棺墓に使われている石材は、安山岩で、すぐ近くにある地元の岩石を使っているものと考えられる。6基の石棺墓はほぼ同時期に作られたものではないかと考えている。出土遺物である磨製石剣は、長さ13cm・最大幅3.3cm。



第45図　北方：武雄福富線関係トレンチ配置図



第46図　貝良木遺跡出土石剣実測図（1/2）

1　遺構全景

2　遺構全景

3　1号石棺

図版11　武雄福富線道路防災事業

Ⅲ．まとめ

平成13年度に実施した確認調査の結果等については表２にまとめた。ここでは確認された遺構を時代ごとに総括してみる。

縄文時代を中心とする時期のものに比定される黒曜石の剥片等が多久市・太良町・伊万里市・七山村域の各地区で確認できた。これらの確認された地区は周知の埋蔵文化財包蔵地に隣接はしているものの、ほとんどが未周知の地区であり、確認調査の難しさを感じさせる。

弥生時代の遺跡としては、小城町筑後川下流用水事業地区で確認できた。この久蘇遺跡は、史跡土生遺跡と町境を隔てて隣接しており、一連の遺跡である。この遺跡では近年の調査でも鋳型等の注目される遺物の出土を見ており、その遺跡の広がりが広範囲に及ぶことが確認できた意義は大きい。北方町武雄福富線地区は、杵島山系北麓に位置する。この地区では石棺群が確認できている。この石棺群は自然地形の段階では比較的急斜面部を加工して墓域にしている。所属時期は不明であるが、類例により弥生後期と位置づける。この地域においては、杵島山系は特殊な位置付けがあったこと考えられている。それは考古学的な遺跡分布から見ても明らかであるが、その意味については今後も検証が必要であろう。そのほか、東脊振村国道385号地区でまとまった弥生時代の土器群の出土を確認している。

古墳時代に関しては、太良町杉谷地区・東脊振村国道385号線地区で当該期の遺物が出土したが、遺構は確認できていない。杉谷地区のものは須恵器で、報告者によって今は失われた古墳が存在した可能性が推定されている。

古代に属する遺跡については、今回の一連の確認調査では一部当該期の遺物である可能性があるものの確認を除き検出することができなかった。

中世の遺跡では、多久市板谷上地区で近世まで継続する生活跡の存在が報告された。七山村馬川地区でも遺構は確認できなかったが遺物の出土が報告されている。

今回の確認調査では特に特筆されるものとして近世期～近代に属する遺跡がある。

佐賀城公園造成事業関係では、二の丸地区の確認調査を行った。二の丸は享保11年の佐賀城火災以後、翌々年再建された二の丸がその後百余年の間佐賀藩の藩政の中枢機能を担っている。しかし、数少ない佐賀城関係史料の中にあって、さらにこの二の丸地区の実態についてはわかっていない。しかし今回の調査では門跡や多聞櫓の可能性がある建物を確認するなど大きな成果を得ることができた。さらに、層位等の精査により、佐賀城の火災履歴など佐賀城地区の歴史を追確認できる資料も得られている。今回確認されたのは再建期二の丸遺構であるが、これら上層遺構の存在等により調査方法に制限があるが、慶長期の遺構の検出も一部でできており、その解明も期待されるところである。

筑後川沿いの川副町と諸富町にまたがる佐賀藩海軍所跡は、近代日本における雄藩の一として数えられる佐賀藩の歴史的事象を記念する遺跡であり、残された資料と突き合わせることにより、その実態をさらに明らかにできる資料を得ることができている。

林道九千部山横断線に伴う中原町域の調査では、時期不明であるが道路状遺構が確認できた。こうした山道のほとんどは地図等に記録されることもなく、また維持管理がされない性格から使用されなくなってしばらくするとそこに道があったのかさえ分からなくなる。こうした“山道”が本来人間生活にとって大きな意味を持っていたことを踏まえると、何らかの記録の採集が望まれる。

表2　佐賀県内遺跡確認調査地区(平成13年度実地)

【農林業基盤整備事業に伴う文化財確認調査地区】

地　区	市町村名	工事地区名	所在地	確認調査対象	調査結果	担当者	備　考
佐賀東部	中原町	九千部山横断線４－１工区	三養基郡中原町大字原古賀字丸山	8,000m²	道路状遺構、土師器片	太田　睦	未周知
佐賀西部	佐賀市	兵庫東部（県営ほ場整備）	佐賀市兵庫町大字若宮	21ha	明確な遺構は確認できず	市川・西田	未周知
		佐賀市東部（県営かんがい排水）				古川・松尾	
	多久市	西多久（船山）	多久市西多久町大字船山	1.9ha	遺構・遺物なし	高塚　啓介	未周知
	多久市	西多久（板谷上）	多久市西多久町大字板谷	7.1ha	中世～近世の生活跡	高塚　啓介	板谷遺跡
	多久市	西多久（平山）	多久市西多久町大字平山	2.5ha	サヌカイト剥片、遺構なし	高塚　啓介	未周知
	小城町	筑後川下流用水事業	小城郡小城町大字船田	780m	弥生時代～中世集落	古庄　秀樹	久蘇遺跡
佐賀南部	太良町	杉谷	藤津郡太良町大字多良字杉谷	1.9ha	黒曜石・須恵器片、遺構なし	市川・古川	未周知
	太良町	大川内	藤津郡太良町大字多良字大川内	3.0ha	近世陶磁器、遺構なし	市川・古川	未周知
佐賀北部	伊万里市	立目	伊万里市黒川町大字立目	1ヶ所	遺構・遺物なし	島内　浩輔	未周知
	伊万里市	野々頭	伊万里市山代町大字東分	0.34ha	遺構・遺物なし	島内　浩輔	未周知
	七山村	馬川	東松浦郡七山村大字馬川	1,000m	黒曜石、中近世土器、遺構なし	市　川	未周知
	厳木町	厳木（二タ又）	東松浦郡厳木町大字浪瀬	3.9ha	明確な遺構は確認できず	坂井　清春	未周知
佐賀上場	玄海町	上場Ⅳ期（棚橋）	東松浦郡玄海町大字今村字堤田	3,853m²	遺構・遺物なし	有光　宏之	未周知

【嘉瀬川ダム建設事業に伴う文化財確認調査地区】

嘉瀬川ダム	富士町	ダムサイト建設予定地	佐賀郡富士町大字畑瀬	－	近世石積み	市川・古川	未周知

【その他公共事業に伴う文化財確認調査地区】

佐賀城公園	佐賀市	二の丸	佐賀市城内二丁目	500m²	佐賀城二の丸関係遺構		
水辺プラザ	川副町	早津江川	佐賀郡川副町大字早津江字元海	2ha	佐賀藩海軍所・佐賀商船学校跡	武谷　和彦	佐賀藩海軍所跡
国　道	東脊振村	国道３８５号線	神埼郡東脊振村大字大曲字前田	2,723m²	弥生・古墳時代包含層、溝	久保　伸洋	三津前田遺跡
河川改修	東脊振村	田手川	神埼郡東脊振村大字大曲字二ノ	2,200m²	古墳時代土器、近世溝	久保　伸洋	大曲二ノ坪遺跡
県道防災	北方町	武雄福富線	杵島郡北方町大字芦原字貝良木・山西	1,918m²	石棺群	樋渡拓也	貝良木遺跡 山西古墳群

佐賀県文化財調査報告書第157集

佐賀県内遺跡確認調査報告書21

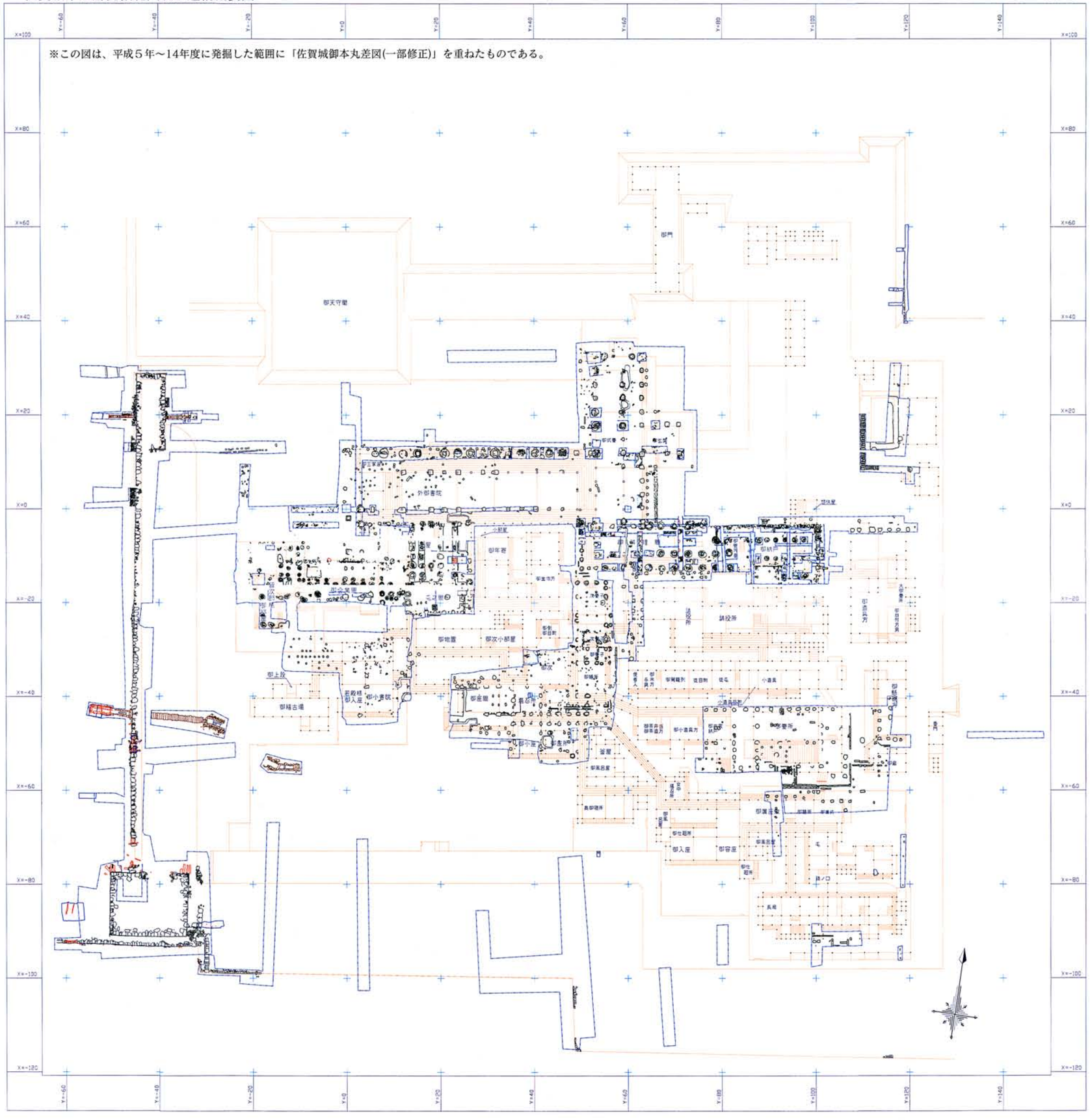
発　行　日　平成15年3月
編集・発行　佐賀県教育委員会
佐賀市城内一丁目1-59
印　　刷　(株) 三　光

付　図

佐賀城本丸跡発掘範囲及び遺構概要図(1/600)

佐賀城本丸跡発掘範囲及び遺構概要図

S＝1/600



再生紙を使用しています